

主要地方道成田松尾線VII

芝山町御田台遺跡・小池新林遺跡

1992

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

主要地方道成田松尾線VII

芝山町^{みただい}御田台遺跡・小池^{こいけしんばやし}新林遺跡

1992

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター



御田台遺跡002号住居跡出土土器

序 文

千葉県の北東部に位置する芝山町は、太平洋に注ぐ栗山川や木戸川が貫流しており、豊かな自然環境に恵まれた流域の台地上には埴輪が出土する古墳をはじめ原始・古代の遺跡が数多く所在しています。

現在この地域は、新東京国際空港を擁しているため各種の地域整備事業が活発に進められており、その一環として、千葉県土木部は空港と九十九里沿岸地域を結ぶ主要地方道成田松尾線地方道道路改良事業を計画し、一部については既に供用されているところです。

千葉県土木部では、当該事業地内に所在する遺跡の取扱いについて千葉県教育委員会と慎重に協議を重ねた結果、事業計画の変更が不可能なため、やむを得ず発掘調査による記録保存の措置を講じることで協議が整い、財団法人千葉県文化財センターが、昭和53年度から発掘調査を実施してまいりました。その成果の一部は『主要地方道成田松尾線』ⅠからⅥとして既に報告しているところです。

このたび、昭和61年度に調査を実施した芝山町御田台遺跡及び、昭和62年度の芝山町小池新林遺跡の調査成果がまとめ『主要地方道成田松尾線』Ⅶとして刊行する運びとなりました。

両遺跡からは先土器時代から奈良・平安時代に至るまでの遺構・遺物が多数検出されていますが、特に古墳時代の住居跡が目に見える大規模な遺跡であることが明らかとなり、当該地域の歴史を知る上でたいへん貴重な資料となるものです。

本報告書が学術資料としてはもとより、郷土の歴史を理解するために活用されるとともに文化財の保護・普及のため活用されるよう願ってやみません。

最後に発掘調査から報告書刊行にいたるまで多大な御協力、御指導をいただきました千葉県土木部成田土木事務所、千葉県教育庁生涯学習部文化課、芝山町教育委員会をはじめ関係諸機関に感謝の意を表すとともに、調査に携わっていただいた調査補助員の皆様に心からお礼申し上げます。

平成4年3月

財団法人千葉県文化財センター

理事長 岩瀬 良三

凡 例

1. 本書は主要地方道成田松尾線地方道道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に記載する遺跡は、山武郡芝山町小池元高田字辺田1385ほかには所在する御台遺跡、芝山町小池字三田977-1ほかには所在する小池新林遺跡である。
3. 調査は千葉県教育庁生涯学習部文化課の指導のもと、千葉県土木部との委託契約に基づき、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
4. 遺跡コードは御台遺跡（409-020）、小池新林遺跡（409-003）を使用した。
5. 発掘調査は御台遺跡が昭和61年度、小池新林遺跡が昭和62年度、整理作業は御台遺跡が昭和62・63・平成2・3年度、小池新林遺跡が平成元・2年度に行なった。
6. 発掘調査の担当者は下記の通りである。

御台遺跡	調査部長 鈴木道之助、部長補佐 岡川宏道、班長 高橋賢一 主任調査研究員 川島利道
小池新林遺跡	調査部長 堀部昭夫、部長補佐 古内茂、班長 矢戸三男 調査研究員 新田浩三
7. 整理作業の担当者は下記の通りである。

昭和62年度	調査部長 堀部昭夫、部長補佐 古内茂、班長 矢戸三男 調査研究員 新田浩三
昭和63年度	調査部長 堀部昭夫、部長補佐 古内茂、班長 矢戸三男 調査研究員 新田浩三・渡邊高弘
平成元・2年度	調査部長 堀部昭夫、部長補佐 阪田正一、班長 藤崎芳樹 技師 渡邊高弘
平成3年度	調査部長 天野勢、部長補佐 阪田正一、班長 宮重行 技師 渡邊高弘
8. 本書の執筆は先土器時代・縄文時代石器を技師落合章雄、縄文・弥生時代遺構・土器・ま
とめを宮重行・技師安井健一が担当し、それ以外は渡邊高弘が行なった。
9. 本書の編集は渡邊が行なった。
10. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸機関の御協力を頂いた。ここに感謝の意を
表します。

千葉県土木部道路建設課、千葉県成田土木事務所、芝山町教育委員会、芝山町立芝山古墳
・はにわ博物館。

用 例

1. 遺構番号は遺構別の3ケタの通し番号を発掘調査時に付しているが、本書では番号の後に遺構の種類を付け加えている。
2. 遺構の縮尺は竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑1/80、カマド1/40、溝・粘土採掘坑1/100である。
3. 遺物の縮尺は先土器時代石器1/2、縄文・弥生土器1/3、石器2/3・1/3、古墳・奈良時代土器1/4、土製品1/2・1/4、石製品1/3、鉄製品1/2である。
4. 遺物出土状況図で使用している記号は、●が土器、○が土製品、■が石器・石製品、▲が鉄製品である。
5. 本書に使用した地形図のうち第1図は、国土地理院発行の1:50,000成田・東金、第2図は、芝山町役場発行の1:2,500芝山町23・27、第113図は、国土地理院発行の1:25,000多古をそれぞれ編集したものである。
6. 小池新林遺跡の全測図(第78図)、遺構実測図の一部(第84・85・89・108・111図)は『三田遺跡発掘調査報告書』からトレースして転載したものである。
7. 本書に使用した航空写真は、京葉測量株式会社撮影のものである。
8. 各遺構の実測図に使用したスクリーントーンは以下のことを示している。



カマド・炉等の被熱赤化部分



カマド構築材



カマド構築材崩壊土



カマド掘り方埋め土



焼土



焼土を多く含む土層

9. 各土器の表面に使用したスクリーントーンは以下のことを示している。



赤彩土器



内黒土器



漆仕上げ

本文目次

序文
凡例
用例

序章	1
第1節 遺跡の立地と周辺の遺跡	3
第1章 御田台遺跡	7
第1節 調査の方法と概要	11
第2節 先土器時代	12
第3節 縄文・弥生時代	14
第4節 古墳時代	20
第5節 奈良・平安時代	104
第6節 掘立柱建物跡	112
第7節 溝	116
第2章 小池新林遺跡	119
第1節 調査の方法と概要	123
第2節 縄文・弥生時代	124
第3節 古墳時代	126
第4節 奈良時代	162
第5節 掘立柱建物跡	163
第3章 まとめ	169
第1節 縄文・弥生時代	171
第2節 古墳・奈良時代	172
第3節 内面に記号状の赤彩が施される土師器坏について	175

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡位置図	4
第 2 図	周辺地形と遺跡	6
第 3 図	御田台遺跡全測図	9
第 4 図	小グリッド分割図	11
第 5 図	御田台遺跡基本層序	12
第 6 図	先土器時代遺物出土状況・出土石器	13
第 7 図	グリッド出土縄文土器 (1)	14
第 8 図	グリッド出土縄文土器 (2)	16
第 9 図	グリッド出土弥生土器	17
第 10 図	縄文時代石器	19
第 11 図	001号住居跡・カマド実測図	21
第 12 図	002号住居跡・カマド実測図	23
第 13 図	004号住居跡・カマド実測図	24
第 14 図	005号住居跡・カマド実測図	26
第 15 図	006号住居跡・カマド実測図	27
第 16 図	007号住居跡・カマド実測図	28
第 17 図	008号住居跡・カマド実測図	30
第 18 図	009号住居跡・カマド実測図	32
第 19 図	010号住居跡・カマド実測図	33
第 20 図	012号住居跡・カマド実測図	35
第 21 図	013号住居跡・カマド実測図	36
第 22 図	014号住居跡・カマド実測図	37
第 23 図	015号住居跡実測図	38
第 24 図	016号住居跡・カマド実測図	40
第 25 図	017号住居跡・カマド実測図	41
第 26 図	018号住居跡実測図	43
第 27 図	019号住居跡・カマド実測図	44
第 28 図	020号住居跡・カマド実測図	46
第 29 図	023号住居跡・カマド実測図	47
第 30 図	024号住居跡・カマド実測図	49

第 31 図	025号住居跡実測図	50
第 32 図	026号住居跡実測図	51
第 33 図	030号住居跡・カマド実測図	53
第 34 図	032号住居跡実測図	54
第 35 図	033号住居跡・カマド実測図	55
第 36 図	034号住居跡・カマド実測図	57
第 37 図	035号住居跡・カマド実測図	58
第 38 図	036号住居跡・カマド実測図	59
第 39 図	037号住居跡実測図	60
第 40 図	039号住居跡実測図	61
第 41 図	040号住居跡実測図	61
第 42 図	001号住居跡出土土器	70
第 43 図	001・002号住居跡出土土器	71
第 44 図	002号住居跡出土土器	72
第 45 図	002・004号住居跡出土土器	73
第 46 図	004・005号住居跡出土土器	74
第 47 図	005・006・007・008号住居跡出土土器	75
第 48 図	008・009・010・012号住居跡出土土器	76
第 49 図	012・013号住居跡出土土器	77
第 50 図	013・014・016・017号住居跡出土土器	78
第 51 図	017号住居跡出土土器	79
第 52 図	017号住居跡出土土器	80
第 53 図	017・018・019号住居跡出土土器	81
第 54 図	019・020号住居跡出土土器	82
第 55 図	020・023・024号住居跡出土土器	83
第 56 図	024号住居跡出土土器	84
第 57 図	025号住居跡出土土器	85
第 58 図	025・026・030・032号住居跡出土土器	86
第 59 図	033・034号住居跡出土土器	87
第 60 図	034・035・036号住居跡出土土器	88
第 61 図	036・037・039号住居跡出土土器	89
第 62 図	001・004・010・012・017・019・030号住居跡出土土製品	102
第 63 図	026号住居跡出土石製品	102

第 64 図	016・026号住居跡出土鉄製品	103
第 65 図	003号住居跡・カマド実測図	105
第 66 図	011号住居跡・カマド実測図	106
第 67 図	022号住居跡・カマド実測図	107
第 68 図	027・028号住居跡実測図	108
第 69 図	029号住居跡実測図	108
第 70 図	038号住居跡実測図	109
第 71 図	003・011・029号住居跡出土土器	110
第 72 図	029号住居跡出土土器	111
第 73 図	001・002号掘立柱建物跡実測図	113
第 74 図	003号掘立柱建物跡実測図	114
第 75 図	004号掘立柱建物跡実測図	115
第 76 図	001・002・003・004・005・006・007・008・009号溝実測図	116
第 77 図	010号溝実測図	117
第 78 図	小池新林遺跡全測図	121
第 79 図	小グリッド分割図	123
第 80 図	001・002号土壇実測図	124
第 81 図	001・002号土壇出土土器	125
第 82 図	グリッド出土縄文・弥生土器	125
第 83 図	縄文時代石器	126
第 84 図	007A号住居跡実測図	127
第 85 図	007B号住居跡実測図	128
第 86 図	012号住居跡実測図	130
第 87 図	013号住居跡実測図	131
第 88 図	014号住居跡・カマド実測図	132
第 89 図	016号住居跡・カマド実測図	134
第 90 図	017号住居跡実測図	135
第 91 図	018号住居跡・カマド実測図	136
第 92 図	019号住居跡実測図	138
第 93 図	020・021・022号住居跡実測図	139
第 94 図	粘土採掘坑実測図	140
第 95 図	007A・007B号住居跡出土土器	145
第 96 図	007B号住居跡出土土器	146

第97図	007B号住居跡出土土器	147
第98図	007B号住居跡出土土器	148
第99図	007B・012・013号住居跡出土土器	149
第100図	013・014号住居跡出土土器	150
第101図	014・016号住居跡出土土器	151
第102図	016・017・018号住居跡出土土器	152
第103図	018・019号住居跡出土土器	153
第104図	019・021号住居跡出土土器	154
第105図	007B・016号住居跡出土土製品	161
第106図	014号住居跡出土石製品	161
第107図	007A・007B号住居跡出土鉄製品	162
第108図	015号住居跡実測図	163
第109図	001号掘立柱建物跡実測図	164
第110図	003号掘立柱建物跡実測図	165
第111図	004号掘立柱建物跡実測図	166
第112図	三田遺跡080号住居址出土須恵器高坏	173
第113図	⊕・⊖状赤彩坏出土遺跡	176
第114図	⊕状赤彩坏集成図	177
第115図	⊖状赤彩坏集成図	178
第116図	官門遺跡016号住居跡、振子上遺跡第1号住居跡・調査区内出土土器	179

表 目 次

第1表	古墳時代土器観察表	90
第2表	古墳時代土製品計測表	103
第3表	古墳時代石製品計測表	103
第4表	古墳時代鉄製品計測表	103
第5表	奈良時代土器観察表	111
第6表	古墳時代土器観察表	154
第7表	古墳時代土製品計測表	162
第8表	古墳時代石製品計測表	162
第9表	古墳時代鉄製品計測表	162

圖 版 目 次

卷頭圖版 御田台遺跡002号住居跡出土土器

圖版 1 遺跡周辺航空写真

圖版 2 4C-67先土器時代遺物出土狀況

11G-31土層断面

12H-72土層断面

圖版 3 南区全景

001号住居跡

002号住居跡

圖版 4 004号住居跡

005号住居跡

006号住居跡

圖版 5 007号住居跡

008号住居跡

009号住居跡

圖版 6 010号住居跡

012号住居跡

013号住居跡

圖版 7 014号住居跡

015号住居跡

016号住居跡

圖版 8 017号住居跡

018号住居跡

019号住居跡

圖版 9 020号住居跡

023号住居跡

024号住居跡

圖版10 025号住居跡

030号住居跡

032号住居跡

圖版11 033号住居跡

034号住居跡

003号住居跡

圖版12 011号住居跡

022号住居跡

029号住居跡

圖版13 001・002号掘立柱建物跡

003号掘立柱建物跡

004号掘立柱建物跡

圖版14 縄文時代土器 (1)

圖版15 縄文時代土器 (2)

圖版16 弥生時代土器

圖版17 先土器時代石器

縄文時代石器

圖版18 古墳時代土器 (1)

圖版19 古墳時代土器 (2)

圖版20 古墳時代土器 (3)

圖版21 古墳時代土器 (4)

圖版22 古墳時代土器 (5)

圖版23 古墳時代土器 (6)

圖版24 古墳時代土器 (7)

圖版25 古墳時代土器 (8)

圖版26 古墳時代土器 (9)

圖版27 古墳時代土器 (10)

圖版28 古墳時代土器 (11)

圖版29 古墳時代土器 (12)

圖版30 古墳時代土器 (13)

圖版31 古墳時代土器 (14)

- 図版32 古墳時代土器 (15)
- 図版33 古墳時代土器 (16)
- 図版34 古墳時代土器 (17)
- 図版35 古墳時代土器 (18)
- 図版36 古墳時代土器 (19)
- 図版37 古墳時代土器 (20)
- 図版38 奈良時代土器
- 図版39 古墳時代土製品
古墳時代石製品
- 図版40 古墳時代鉄製品
調査区全景
007A・007B号住居跡
- 図版41 014号住居跡
016号住居跡
018号住居跡
- 図版42 015号住居跡
003号掘立柱建物跡
粘土採掘坑
- 図版43 001・002号土坑出土土器
グリッド出土縄文・弥生土器
縄文時代石器
- 図版44 古墳時代土器 (1)
- 図版45 古墳時代土器 (2)
- 図版46 古墳時代土器 (3)
- 図版47 古墳時代土器 (4)
- 図版48 古墳時代土器 (5)
- 図版49 古墳時代土器 (6)
- 図版50 古墳時代土製品
古墳時代石製品
古墳時代鉄製品

序 章

序 章

第1節 遺跡の立地と周辺の遺跡（第1・2図、図版1）

房総半島は、南側の標高200～300mの丘陵・山地が連綿と続く上総丘陵、嶺岡山系、安房丘陵、北側の第四紀の洪積世台地（下総台地）と利根川、東京湾、太平洋に面する低地に景観が三分される。遺跡の所在する山武郡芝山町は半島の北東部、地形的には下総台地の南東部に位置する。下総台地は、浅海性の砂層である成田層の上に下末吉・武蔵野・立川ローム層が堆積した標高約50m以下の起伏の少ない平坦な台地であるが、太平洋、利根川に流入する河川によって侵食され、台地は樹枝状に複雑に入り組んだ変化に富んだ地形を作り出している。芝山町は利根川と太平洋の分水嶺にあたる新東京国際空港付近に源を発する栗山川の支流である高谷川と木戸川の南東に流れる河川によって開析された台地から形成され、御田台遺跡・小池新林遺跡は、木戸川左岸中流域の南西方向に延びる標高40m前後の平坦な舌状台地上に立地する。周囲には小池元高田遺跡、小池地蔵遺跡など小支谷によって分断された台地上に遺跡が広がっており、あわせて大規模な集落遺跡が展開していたと思われる。

近年、周辺では新東京国際空港建設に端を発する各種の開発行為に伴い、多くの発掘調査が行なわれている。これらのうち、分布調査によって明らかになった遺跡については、遺跡分布図や「主要地方道成田松尾線」Ⅰ～Ⅵなどを参照して頂き、今回は、小池新林遺跡・御田台遺跡の周辺で比較的近接して調査が行なわれた遺跡のうち、内容が判明しているものについてその概要を紹介する。

1. 小池麻生遺跡（萬崎ほか 1983）

木戸川左岸の扇状の台地のつけ根に立地する。昭和53年に成田松尾線建設に伴い発掘調査された。縄文時代では中峠期1軒、加層利EⅢ期2軒の竪穴住居跡、古墳時代後期の竪穴住居跡12軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡15軒、掘立柱建物跡1棟が検出された。遺構は平坦面から南に面する斜面側に集中している。

2. 小池麻生遺跡（平岡・戸田 1976）

成田松尾線の調査区から約30mほど北西側の地点に位置する。昭和50年に宅地造成に伴い発掘調査された。縄文時代では中峠期1軒、加層利EⅢ期3軒の竪穴住居跡が検出された。そのほかに古墳時代後期～奈良時代の竪穴住居跡4軒が検出されている。

3. 小池地蔵遺跡（奥田 1985）

県道八日市場八街線の北西側に位置し、昭和54年に成田松尾線建設に伴い発掘調査された。南西緩斜面～平坦面にかけて遺構が検出され、縄文時代は遺構は検出されなかったが、中期の

阿玉台式から晩期の前浦式までの土器片が出土している。古墳時代の竪穴住居跡が13軒、奈良・平安時代では9世紀代を中心として5軒の竪穴住居跡が検出された。ほかに時期不明とされるカマドをもつ竪穴住居跡4軒が検出されている。

4. 小池地藏遺跡（渡邊ほか 1991）

昭和60年に成田松尾線建設に伴い発掘調査された。小池新林遺跡とは小支谷をはさんで北側に隣接する台地の南側緩斜面に位置し、小池地藏遺跡の県道八日市場八街線をはさんだ南東側に隣接し、小池地藏遺跡とは本来同一の遺跡である。検出された遺構は、古墳時代の竪穴住居跡3軒、土坑1基、奈良・平安時代の竪穴住居跡4軒、そのほかに時代を特定できないピット・竪穴状遺構・溝などが計23基検出されている。

5. 三田遺跡（福岡 1989）

今回報告する小池新林遺跡と同一の台地上東側に隣接する本来は同一の遺跡であって、昭和62年に芝山町文化センター建設に伴い発掘調査が行なわれた。5世紀代から7世紀代に至る合計106軒の竪穴住居跡が密集して検出された。今回、小池新林遺跡と遺構の位置関係を明らかにするために第78図に全測図を掲載した。

6. 御田台遺跡（新井 1986）

本書で報告する成田松尾線の調査区の北区の東側に隣接し、昭和61年に宅地造成に伴って調査された。検出された遺構は古墳時代後期1軒、平安時代1軒の竪穴住居跡、時期不明の溝1条である。

7. 小池元高田遺跡（高橋・伊藤 1986）

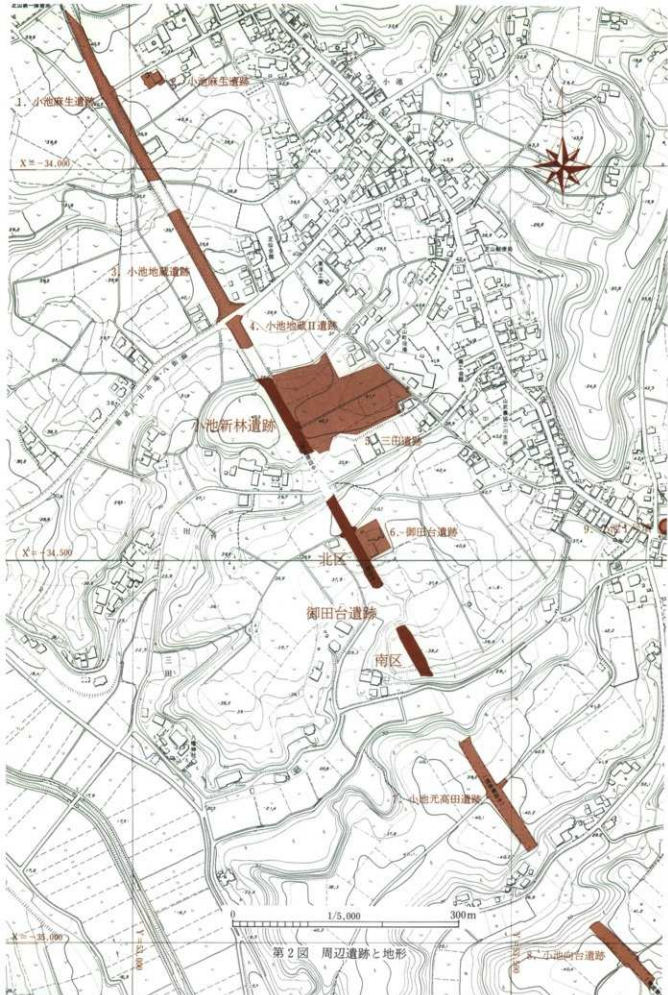
御田台遺跡の南側の舌状台地上に立地する。昭和57年に成田松尾線建設に伴って発掘調査され、先土器時代の石器集中地点1か所、奈良・平安時代を中心とする10軒の竪穴住居跡、ピット群などが検出された。ほかに縄文時代早期～後期の土器が出土している。

8. 小池向台遺跡（萬崎ほか 1983）

小池元高田遺跡の南側の台地上に立地する。昭和53年に成田松尾線建設に伴って発掘調査された。検出された遺構は古墳時代後期1軒、奈良・平安時代5軒の竪穴住居跡である。

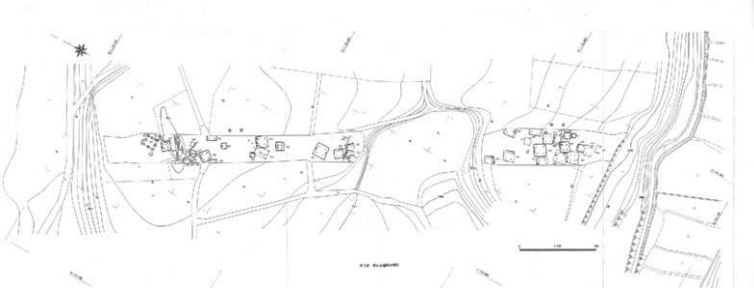
9. 小池1号墳（小杉・佐藤 1956、平岡 1989）

御田台遺跡の南側の支谷の最奥部の台地上に位置する。前方後円墳2基、円墳3基で構成される小池古墳群の現存する2基の円墳の内の1基で、昭和31年に横芝町芝山（中台）古墳群調査の一貫として学術調査された。周囲を道路・宅地に削平されており、現存する規模は最大径約25m、高さ5.9mを測り、築造当時は径30m以上、高さ6m以上を測る円墳であったとされている。主体部の石室は墳丘南側裾部に位置し、調査時には既に露出し、横穴式石室の奥壁と西壁の一部を残すのみであった。遺物は石室内から人骨細片少量、鉄鏃1本、須恵器片3点、小玉3点が検出されている。



第 1 章

御田台遺跡



第1章 御田台遺跡

第1節 調査の方法と概要(第2・3・4図)

御田台遺跡は、芝山町市街地(旧県道成田松尾線)の南西約300mに位置し、西方約600mに流れる木戸川の支谷によって樹枝状に開析された舌状台地に立地する。台地の南側を画する支流は台地中央付近で北東方向に小支谷が入り込んでおり、調査地点が北と南に分断された形になっている。また本遺跡は、小支谷を挟んで北側に昭和54・62年に調査された小池新林遺跡(奥田 1985、昭和62年調査分は本書に所収)南側には昭和57年に調査された小池元高田遺跡(高橋・伊藤 1986)にそれぞれ隣接する(第2図)。

遺跡は芝山町小池元高田字辺田1385に所在する。調査対象面積は3,400㎡。発掘調査は昭和61年8月1日から11月29日まで実施した。調査にあたっては公共座標に基づいて20×20mの大グリッドを設定し、大グリッドは調査区域の北から南に向かって1～13、西から東にA～Hとし、これを組合せて1A、2A、3Aの名称で呼称した。さらにその中を第4図に示したように2m四方の小グリッドに分割して00～99の番号を付け、これに先の大グリッドの名称を組合せて1A-00、1A-99などと呼称した。なお、2B-00グリッドの北西隅の点の座標は公共座標

00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
10	11								
20		22							
30			33						
40				44					
50					55				
60						66			
70							77		
80								88	
90									99

0 1/500 20m

第4図 小グリッド分割図

X=-34.420、Y=52.760に対応する。また、先述したように調査区が北と南に分断されていることから、以下記述の便宜上北側を北区、南側を南区と呼称する。

発掘調査は、まず上層の確認調査として調査区全域に2×2mの確認グリッドを入れ、対象面積の10%、340㎡の調査を実施した。その結果、北区の一部を除いてほぼ全域から古墳時代～奈良時代の遺構が検出されたため、3,188㎡を上層本調査範囲とし、表土除去を行い、遺構の調査を行った。また、下層の確認調査も上層の本調査と併行して、対象面積の4%、136㎡行ったが、北区から1か所、南区から2か所先土器時代の遺物が検出され、併せて60㎡を下層の本調査範囲とし、それぞれ拡張を行なった。

遺跡は調査前は畑であったことから、すでにローム面まで削平されており、遺構の遺存状態は不良であった。検出された遺構は、竪穴住居跡・掘立柱建物が主体であるが、そのほかに時代を特定できないピット・土坑・溝等が検出されおり、これらのうち近現代以降の農作業に伴うものと判断されるものは遺構として取り扱わず、本書では割愛した。

第2節 先土器時代

本遺跡の先土器時代の石器出土地点は北区の4C-67、南区の11G-31、12H-72の3か所で検出された。石器の出土層準はいずれもVII層にあたる。それぞれ確認グリッドの拡張を行ったが遺物の分布の広がりは認められなかった。検出された石器の総数は4点であるが、11G-31で検出された1点は先土器時代の所産のものでないことが明らかとなり、図示せず、図版2に土層断面を示すにとどめた。

層序区分 (第5図、図版2)

I層 暗褐色土層。ローム粒・塊を多量に含む表土層 (耕作土)。

II層 耕作による削平のため検出されていない。

III~V層 黄褐色土層。いわゆるソフトローム層~ハードローム層に対応する。III層は削平のため遺存状態が極めて悪い。

VI層 明黄褐色土層。AT層に相当する。

VII層 暗黄褐色土層。第2黒色帯に相当する。本遺跡石器出土層準はこの層にあたる。

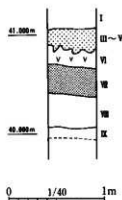
VIII層 暗黄褐色土層。立川ローム層最下部に相当し、VII層より色調が明るく、粘性が強い。

IX層 暗褐色土層。武蔵野ローム層に相当する。

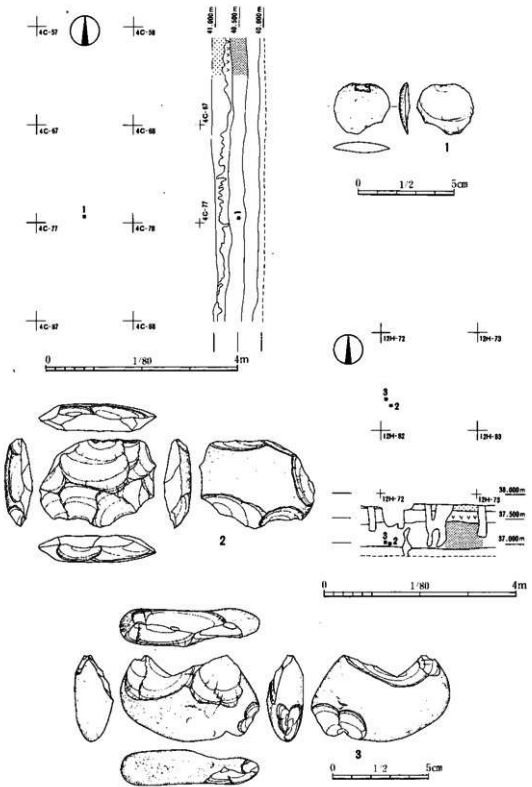
出土遺物 (第6図、図版2・17)

1は北区の北部4C-67で、VII(第2黒色帯相当)層から出土したものである。珪質頁岩製の剥片であり、剥片剥離工程の初期の段階に作出されたもので、原石面を有する。石器の素材剥片とするより、石核の形状を整えるために作出された剥片の可能性が高い。長さ2.5cm、幅2.9cm、厚さ0.4cm、重量3.8gを測る。なお、かなり広範囲に周囲の拡張を行なったが、ほかに遺物は検出されなかった。

2・3は南区の南部12H-72で、VII層下部において近接して出土したものである。2は安山岩製の剥片利用石核である。原石面を有し、大型の剥片を素材とし、周縁から求心的に剥片を作出しているのが窺える。長さ4.5cm、幅6.3cm、厚さ1.4cm、重量43.3gを測る。3は赤色を呈するチャート製の扁平礫より剥片を作出した痕跡がみられ、礫の大きさは8cmほどのものと思われる。打面は1ヶ所に限定せず、不特定の周縁部を打面としている。長さ7.0cm、幅5.2cm、厚さ1.8cm、重量70.9gを測る。



第5図 御田台遺跡基本層序



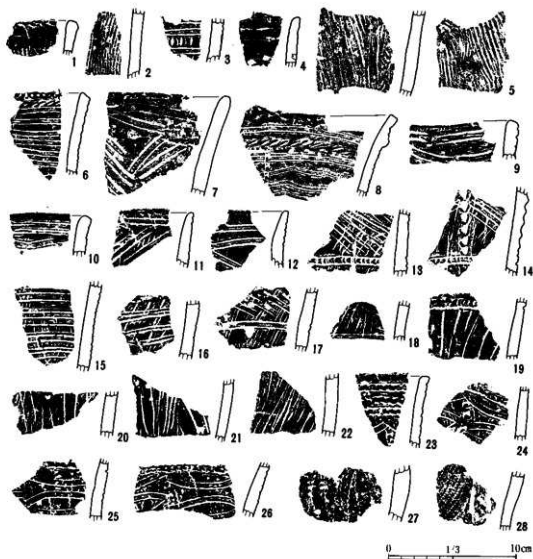
第6図 先土器時代遺物出土状況・出土石器

第3節 縄文・弥生時代

本遺跡出土の縄文・弥生時代の遺物はすべてグリッドないしは古墳・奈良時代の遺構覆土中から出土したもので、当該期の遺構は検出されなかった。

グリッド出土土器（第7・8・9図、図版14・15・16）

縄文土器の点数は早期土器6点、前期土器67点。中期土器は加曾利E式を中心に195点で、本遺跡出土の縄文土器の主体である。後・晩期土器の土器は堀之内式が主体で68点である。弥生土器は73点出土した。



第7図 グリッド出土縄文土器 (1)

早期の土器 (1~5)

1・2は燃糸文系土器である。1はRL縄文が胴部に加え口唇部にも施文されるもので、井草Ⅱ式土器である。2は燃糸施文の胴部片である。3は横位の沈線に刺突文が付加されているもので、田戸下層式である。4・5は少量の繊維を含む土器である。4は外面に細い円形刺突文が連続して巡ると思われるもので、器表に擦痕を伴うへう痕が顕著にみられる。5は内外面に貝殻条痕文を有している。4は子母口式、5は条痕文系土器の古い段階のものと思われる。

前期の土器 (6~27)

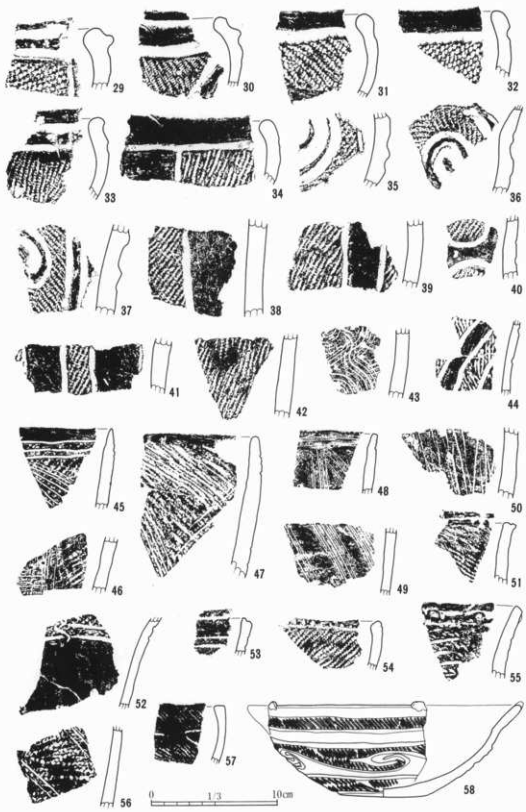
浮島Ⅰ式土器が主体である。沈線は半載竹管による2本組である。6は横位の沈線がみられ、口唇部には両縁にキザミ目が施されている。7は斜行の沈線が施されるもので、菱形文の構成をなすものと思われる。胎土中に長石・スコリア粒を含む特徴を有する。8~19は燃糸文を地文に沈線文が施文されるものである。8は折り返し状の隆起帯を有するもので、小突起がみられる。隆起帯上にはキザミ目が施されている。横位の沈線文に縦区切りの刺突列を加え、肋骨文を構成するとみられる。9~19は斜行・横走の沈線文が施文されており、13・19は結節沈線文、14にはそれに加えて縦位の連続刺突文を有している。20~22は燃糸文施文のものである。20・21の燃糸は16・19と同じもので、ひじょうにきつく燃られている。23~26は貝殻腹縁文を地文に沈線文が施文されている。23・26は変形爪形文的な沈線文を有している。24には連続刺突文がみられる。文様の構成は弧状沈線を組み合わせた肋骨文の変形パターンをとるものであろう。27は貝殻腹縁文単独施文のものである。

中期の土器 (28~43)

28は縄文地に沈線を伴い隆起線が配されており、胎土中に雲母・長石粒が顕著にみられる。阿玉台式の範疇に入るものである。29~43は加曾利E式であり、地文的な縄文に太い沈線で、隆起線・無文帯を組み合わせて施文することを特徴とする。29~34は口縁部である。29~33には太い沈線を伴う隆起線文がみられる。加曾利EⅡ・Ⅲ式段階のものであろう。34は縦に無文帯が形成される加曾利EⅢ式でも新しい段階のものと思われる。35~37は渦巻状の隆起線を有している。38・39・41は縦位の無文帯・縄文が区画されている。40は「U」字状の区画に縄文が充填されており、加曾利E式の新しい様相を呈している。42はRLの斜縄文を有し、胎土中には雲母・長石・石英粒を包含している。阿玉台式から加曾利E式初頭にかけてのものであろう。43は櫛歯状沈線による波状文を有しており、後期にも認められる文様であるが、一応、加曾利E式の新しい要素のものと考え、中期に含めておく。

後期の土器 (44~57)

44は曲線的な構成の磨消縄文を有しており、称名寺式になる。45~46は縄文地に櫛歯状の沈線が施文されており、48・49では櫛歯状の沈線のみで、地文を欠いている。これらは堀之内Ⅱ式である。50は縦沈線のみを有するもので、時期的な決め手を欠く。51はかるく外反する口縁

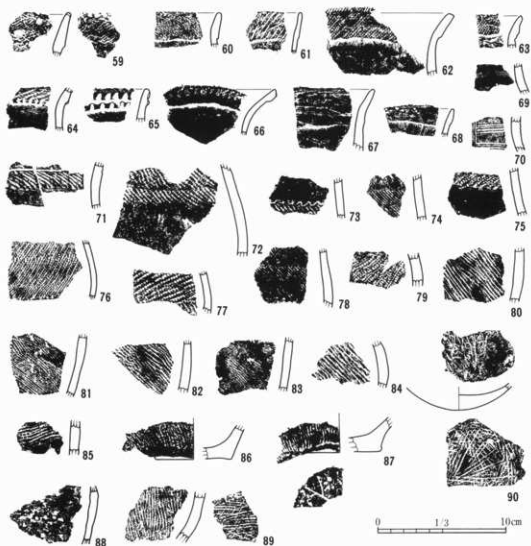


第 8 図 グリッド出土縄文土器 (2)

部で、無節縄文が施され口唇部には沈線が配されている。52～57は加曾利B式に属するものである。52は帯縄文を有する胴部で、区切りにはS字沈線が用いられている。文様帯以下には縦ミガキが顕著である。53は口縁部に帯縄文を、口唇部に沈線文を有している。54は刻文帯を上端に配した縄文施文の口縁部である。55は縄文地に紐線文・弧状沈線を有する。56は縄文地に2本単位の斜沈線が施されている。55・56は粗製・紐線文土器に含まれよう。57は内湾する口縁部をなし、縄文地に横位の小無文区画が認められるが、小破片であり器形・文様構成は推定できない。

晩期の土器 (58)

58の浅鉢は口唇部に小突起を有し、三叉文を交え雲形文の構成をなす磨消縄文が施文されて



第9図 グリッド出土弥生土器

いる。突起はB形になると思われる。縄文は沈線区画後に充填され、無文部はミガキが入る。内面にはミガキ痕が顕著であり、赤彩の痕跡を残す。安行3b式である。

弥生土器 (59~89)

本遺跡から出土した弥生土器は、後期の北関東系とされる印旛・手賀沼式の範疇に入るものである。

59は表裏にS字状結節を有する縄文が施文される口縁部で、口唇部にはキザミ目が入る。60~68は折り返し状の口縁部をなすもので、文様は口唇部及び口縁部に施文されている。60は燃りのゆるい燃糸文、61~63にはLR縄文が原体である。64には縄文に加え口縁部下端、折り返しの接合部に縄原体によるキザミ目を有する。65は棒状工具による波状沈線、キザミ目列が口縁部に巡っている。口唇部は縄文施文である。66は格条体の押圧によるキザミ目のみが口唇部に施文されたものである。67・68は外面にササラ状の擦痕を有している。

69~86・88・89は頸部から胴部の破片である。69・70は十王台式な極描沈線を有しているもので、壺形土器の頸部であろう。71は無節縄文に沈線を併せ持っている。72~79は斜縄文施文のもので、縄末端が施文されている例が多い。73では結節による綾織り文がみられる。78は上部に斜縄文、下部に燃糸文が分けて施文された例。79はLR+Rの付加縄文である。80~85は斜行の燃糸文(R)が施文されており、85には異方向の燃糸文が交差している。88はササラ状の擦痕を有している。89は内外面に沈線文が密に施文されたもので、方向は外面が縦位、内面は横位・斜位の交差である。

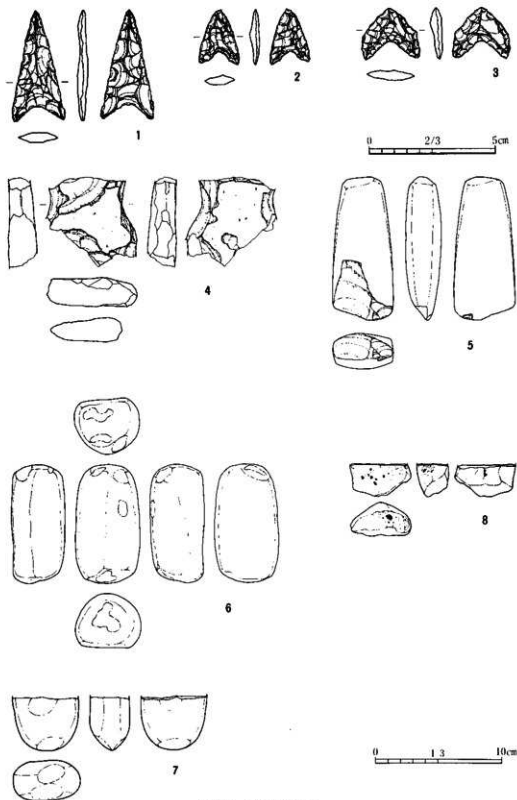
86~88は底部片である。86・87は平底で、縦位Rの燃糸文がみられ、87には底部に木葉痕が残されている。88は丸底状を呈しており、内外面に沈線が密に交差して施文されている。沈線の方向は外面上部で口縁部に平行に、底面では放射状になることが窺われ、複数条単位で繰り返して描出されている。内面は見込部分に限られており、不規則に施文されている。

縄文時代石器 (第10図、図版17)

1~3は石鏃である。1は両側縁が直線的にのびるもので、かなり二辺が長い二等辺三角形状を呈する。長さ4.2cm、幅2.0cm、厚さ0.4cm、重量2.5gを測り、安山岩製である。2は両側縁がやや丸味を帯びる形状で、先端部が欠損する。長さ2.1cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm、重量0.9gを測り、チャート製である。3は流紋岩製で、肩の張る形状を呈す。長さ1.95cm、幅2.2cm、厚さ0.4cm、重量1.2gを測る。

4は安山岩製の打製石斧である。両刃が欠損しているが、分銅型を呈するものであろう。くびれ部には部分的に摩滅痕がみられる。長さ6.9cm、幅7.1cm、厚さ2.2cm、重量144.1gを測る。

5は磨製石斧である。刃部にみられる剥離は使用時の剥落痕と思われる。全体にわたり、よく研磨され、特に基部は平面的に磨かれており、整形時に反転させて研磨されたことが窺える。長さ11cm、幅4.9cm、厚さ2.9cm、重量260.5gを測る。砂岩製である。



第10圖 縄文時代石器

6は花崗岩製の磨石である。被熱しているため全体に黒ずんだ色調を呈する。磨痕は部分的にみられ、また両端には敲打痕がみられるため、敲石としての機能を有していたものと思われる。長さ9.2cm、幅5.2cm、厚さ4.2cm、重量398.2gを測る。

7は花崗岩製の凹石である。全体の1/2のみが遺存する。両面に凹みがみられ、全体に形状を整えるための研磨が施される。特に端部は磨製石斧の刃部状に研磨されている。長さ4.3cm、幅5.3cm、厚さ3.2cm、重量107.7gを測る。

8は加工痕のみられる軽石である。全体に研磨され形状を整えようとしたものであるが、最終的にどのような形状にしようとしたのか、また使用目的も不明である。重量6.3gを測る。

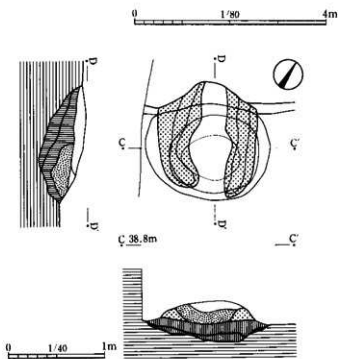
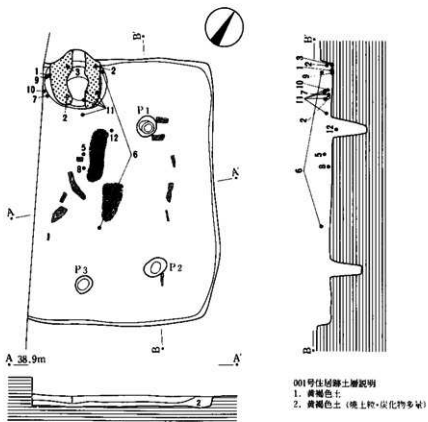
第4節 古墳時代

1. 遺構

001号住居跡（第11図、図版3）

南区中央部、11G-40・41・42・50・51・52・61・62・63・71・72に位置し、ほぼ平坦面に立地する。南西側1/3は調査区域外にかかっていたため調査できなかった。規模は北東壁で約5.2m、中軸線は5.6mを測る。カマドが北西壁の中心に位置するとすれば、やや横長の方形を呈すると考えられる。主軸方向はN-35°-W。覆土は上層が黄褐色土、下層が焼土粒・炭化物粒を多く含む黄褐色土が主体で、締まりがないことから、埋め戻しを行なった可能性が高い。また、焼土・炭化物が床面上に分布しており、焼失住居と考えられる。床面はハードルーム層で、中央付近に硬質部分があるほかは全体に軟弱で、ほぼ平坦であった。壁高は北東壁で約24cmを測り、約75度で立ち上がる。ピットは3か所検出された。主柱穴はP1・P2で径約40cm、深さはP1が80cm、P2が70cmを測る。柱間寸法は2.9mを測る。P1-P2ラインは主軸に比してやや西側に振れている。P3は出入口部施設に伴うピットと考えられ、径約40cm、深さ13cmを測る。カマドは北西壁に位置する。遺存状態は比較的良好であった。主軸方位はN-36°-Wで、住居跡のそれに比してやや西側に振れている。壁外に約30cm掘り込み、全長約1.2m、幅約1.2mを測る。底面は焚口から燃焼部にかけて径約1m、深さ20cmほど楕円形に掘り込まれているが、この掘り方のハードルーム面を直接底面にしているのではなく、山砂・ローム土を用いて埋め土をすることによってほぼ平坦な面を作り出し、その上に袖部を構築している。左袖部は壁から1.1m、右袖部は壁から1.2mの長さで、床面からは約20cmの高さで遺存していた。袖部は主に黄褐色の山砂を用いて構築していた。燃焼部は一段深く掘り込まれたようになっている。焚口～燃焼部底面直上には山砂を含む焼土が堆積していたが、赤色硬化面は認められなかった。煙道部は約15度で緩やかに立ち上がる。

遺物は、カマド周辺を中心として土師器、土製支脚が出土した。床面からやや浮いた状態で



第11図 001号住居跡・カマド実測図

出土したものが多いが、カマド内から出土した坏（2・3）、カマド左側調査区際坏（1）、壺（7・9・10）は直接本住居跡に伴うと判断されるものである。

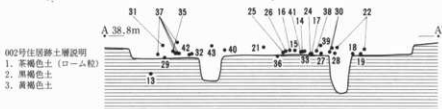
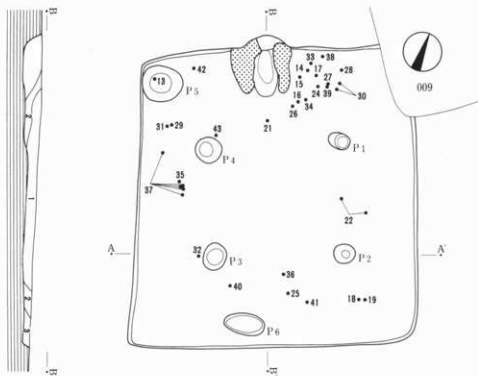
002号住居跡（第12図、巻頭図版、図版2）

南区中央部、12G-05・06・07・14・15・16・17・18・25・26・27・28・35・36・37・38に位置し、南に面する緩斜面に立地する。北側コーナーは009号住居跡に切られている。規模は南東壁で6.0m、南西壁で5.7mを測り、方形を呈する。主軸方向はN-24'-E。覆土は攪乱によってほとんど失われていたが、ローム粒を多く含む茶褐色土、黒褐色土が主体であった。床面はハードローム層で、全体に堅緻でほぼ平坦であった。壁高は南西壁で約20cm、南東壁で6cmを測り、約75度で立ち上がる。ピットは6か所検出された。主柱穴はP1~P4で、径約40cm、深さはP1が66cm、P2が77cm、P3が47cm、P4が68cmを測る。柱間寸法はP1-P2が2.3m、P2-P3が2.8m、P3-P4が2.2m、P4-P1が2.9mを測る。配置はやや横長の方形を呈する。P1~P2ラインは主軸に対してやや西側に振れている。覆土はローム塊を含む暗茶褐色土が主体で、柱痕は検出されなかった。P5は西側コーナー下に位置する貯蔵穴で、楕円形を呈し、長軸径約80cm、短軸径約70cm、深さ約35cmを測る。覆土はローム粒を含む暗茶褐色土が主体であった。P6は出入口部施設に伴うピットと考えられるもので、横長の楕円形を呈し、長軸径約90cm、短軸径約42cm、深さ18cmを測る。覆土は黒褐色土を主体とする。カマドは北西壁に位置する。遺存状態は比較的良好であった。主軸方位はN-21'-Eで、住居跡のそれに比してやや西側に振れている。壁外に約25cm掘り込み、全長約1.3m、幅約1.3mを測る。焚口~煙道部は楕円形の浅い掘り込みを有する。袖部は壁から1.0mの長さで、床面からは約40cmの高さで遺存していた。袖部は黄褐色土の砂質粘土を用いて構築していた。燃焼部底面直上には焼土が堆積していたが、赤色硬化面は認められなかった。焼土層の直上には天井部構築材崩壊土は認められた。燃焼部奥（煙道部）には黄褐色土の砂質粘土塊を含む黄褐色土が堆積しており、煙道の障壁である可能性が高い。煙道部は約40度で立ち上がる。

遺物は、北東側、カマド右側を中心としてまとまって土師器が出土した。南西壁下から出土した壺（37）を除いて、床面上ないしはやや浮いた状態で出土し、特に坏は遺存状態が良好なものも多く、一括遺物と考えられるものである。

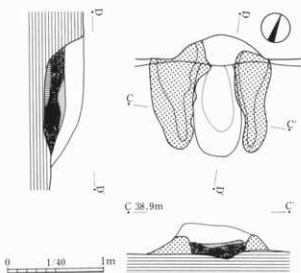
004号住居跡（第13図、図版4）

南区南部、11G-14・22・23・24・25・32・33・34・35・42・43・44・45・46・52・53・54・55・63に位置し、ほぼ平坦面に立地する。東側コーナーは006号住居跡によって切られていた。遺存状態は良好であった。規模は北西壁が5.8m、北東壁・南東壁・南西壁が6.0mを測り、ほぼ正方形を呈する。主軸方位はN-35'-W。覆土は主として2層に分かれ、上層がローム塊を含む暗茶褐色土、下層がローム粒を含む茶暗褐色土で、自然堆積と考えられる。床面はハードローム層でほぼ平坦であった。壁高は北西壁が44cm・北東壁・南東壁が40cm、南西壁が52cm

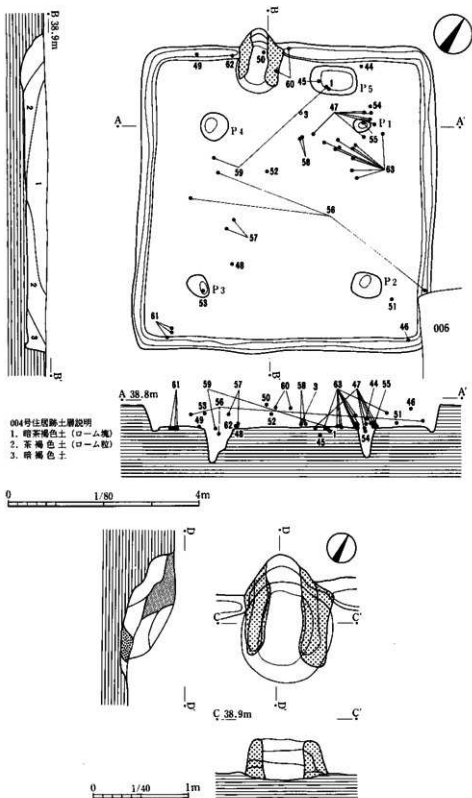


- 002号住居跡土層説明
 1. 赤褐色土 (ローム状)
 2. 黒褐色土
 3. 黄褐色土

0 1/80 4m



第12図 002号住居跡・カマド実測図



第13図 004号住居跡・カマド実測図

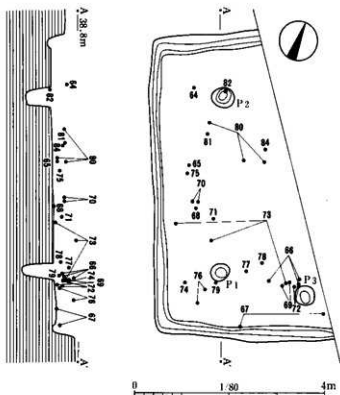
掘り、約77度で立ち上がる。周溝はカマド内を除いて全周し、最大幅36cm、深さ約12cmを測る。ピットは支柱穴が4か所、貯蔵穴が1か所検出された。支柱穴はP1～P4で、規模は径26～64cm、深さはP1が59cm、P2が64cm、P3が65cm、P4が68cmを測る。柱間寸法はP1-P2が3.2m、P2-P3が3.4m、P3-P4が3.3m、P4-P1が3.2mを測る。配置は不整形形で、P3-P4ライン、P4-P1ラインはそれぞれ対する壁面に平行していた。P5は北西壁下カマド右側に位置する貯蔵穴で、平面形は横長の長方形を呈し、規模は長軸約1m、短軸約30cm、深さ約50cmを測る。覆土はローム粒を含む暗茶褐色土を主体とする。カマドは北西壁中央から約80cm南西に位置する。遺存状態は良好である。主軸方位はN-35°-Eで、住居跡のそれと同じ。壁外へは約30cm掘り込み、全長約1.3m、幅約1mを測る。底面の掘り込みは焚口～燃焼部に施されており、径約1.0mの不整形円形を呈し、床面からの深さは最大10cmを測る。袖部は壁面の掘り込みの側面から主軸ラインに沿って直線的に伸びており、長さ約1.0m、床面からの高さ約40cmを測る。構築材は上層と下層に山砂・砂質粘土を含む暗褐色土、中層に山砂を交互に用いていた。焚口直上には焼土を多く含む暗褐色土、燃焼部～煙道部底面直上には山砂・砂質粘土・ローム粒を含む暗褐色土が、その上には山砂・砂質粘土主体の層が堆積しており、天井部の落ち込んだものと考えられる。煙道部は段をなし、下段約20度、上段約70度で立ち上がる。

遺物は、北西側1/2を中心としてややまとまって土器、土製品が出土した。P1周辺から散らばって出土した土師器坏(47)、甕(58・63)、南側コーナー付近から出土した甕(61)は床面直上からの出土であり、本住居跡に確実に伴うものと考えられる。

005号住居跡(第14図、図版4)

南区北部、10G-96・97、11G-06・07・16・17・18・26・27・28に位置し、ほぼ平坦面に立地する。北東側約1/2は調査区域外にかかっており調査できなかった。規模は南西壁で6.0mを測り、南東壁下のピット(P3)が中軸線上に位置するとすれば、やや横長の方形を呈する住居跡と考えられる。主軸方位はカマドが検出されないため不明だが、南西壁はN-18°-E方向を向いている。覆土はローム塊を含む暗褐色土が主体で、自然堆積と考えられる。床面はハードローム層で、全体に軟弱で凹凸がある。壁高は北西壁で26cm、南東壁で38cm、南西壁で35cmを測る。周溝は未検出部分を除いて全周しており、最大幅40cm、深さ7cmを測る。ピットは3か所検出された。支柱穴はP1・P2と考えられ、P1は径40cm、深さ66cmを測る。P2は径46cm、深さ54cmを測る。P1-P2の柱間寸法は3.6mを測る。配置は北東側の支柱穴が未検出のため不明である。P3は出入口施設に伴うピットと考えられるもので、南東壁上場から74cm北側に位置する。規模は径40cm、深さ28cmを測る。

遺物は覆土上層から中層にかけて出土したものが多いが、西壁中央下の土師器坏(68)、南壁下の坏(67)は床面直上から出土したもので本住居跡に伴うものと考えられる。また、P2覆土中から土師器甕(82)が出土していることから、住居跡廃絶後、柱材の抜き取りが行なわれた

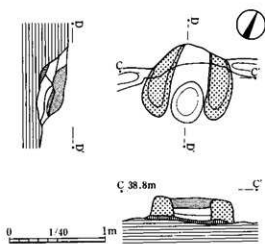
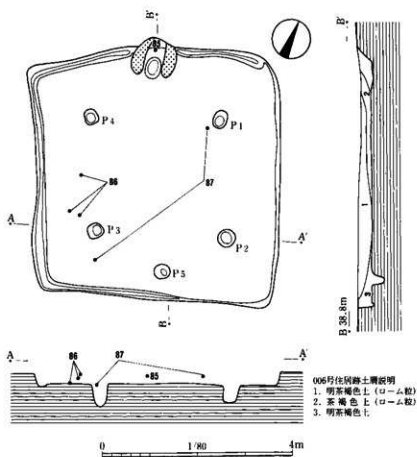


第14図 005号住居跡実測図

可能性が高い。

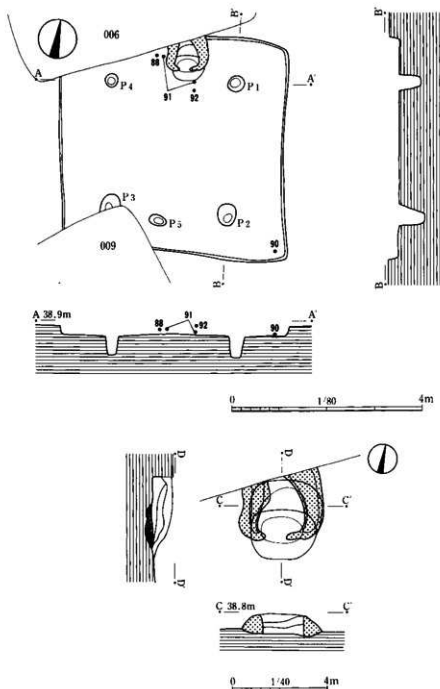
006号住居跡 (第15図、図版4)

南区北西部、11G-27・28・35・36・37・38・46・47・48・49・56・57・58・59に位置し、ほぼ平坦面に立地する。規模は北東壁が5.0m、南東壁が4.4mを測り、不整形を呈する。主軸方位はN-29°-Wである。覆土はローム粒を多く含む茶褐色土が主体であった。床面はハードローム層で、特にP1~P4を囲む部分一帯が堅く踏み締められていた。壁高は北西壁が36cm、北東壁が24cm、南東壁が26cm、南西壁が22cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝はカマド内を除く南東壁1/3~北西壁隅まで施されており、最大幅36cm、深さ4cmを測る。ピットは5か所検出された。主柱穴はP1~P3で、径26~40cm、深さはP1が44cm、P2が36cm、P3が47cm、P4が37cmを測る。柱間寸法はP1-P2が2.4m、P2-P3が2.8m、P3-P4・P4-P1が2.3mを測る。覆土はローム塊を含む黄褐色土の単一層であった。P5は南東壁下に位置する出入口施設に伴うピットと考えられるもので、径約30cm、深さ約30cmを測る。カマドは北西壁ほぼ中央に位置する。耕作による攪乱を受けているものの遺存状況は比較的良好であった。主軸方位はN-15°-Wで、住居跡のそれに比して東に振れている。壁外には約20cm掘り込まれており、全長80cm、幅約95cmを測る。焚口から燃焼部にかけて径約1m、深さ5cm楕円形に掘り込まれている。



第15図 006号住居跡・カマド実測図

袖部は山砂・砂質粘土を用いて構築されており、左右とも壁からの長さ約70cm、高さ約25cm遺存していた。燃焼部の直上にはローム主体の焼けて赤化した山砂を含む暗巻褐色土が、その上には硬く焼き締まった山砂が堆積しており、天井部と考えられる。また燃焼部奥～煙道部の屈



第16図 007号住居跡・カマド実測図

曲面にはローム主体で、山砂・砂質粘土を含む黄褐色土が貼られていた。煙道部には山砂・焼土・炭を含む黒褐色土が堆積していた。

遺物は覆土中からまばらに出土した。カマド内から出土した土師器環(85)は焼けた痕跡が認められず、カマド機能時の位置を留めていないと思われる。須恵器蓋(86)・坏(87)は破片が散らばった状態で出土し、流入ないしは投棄された可能性が高い。

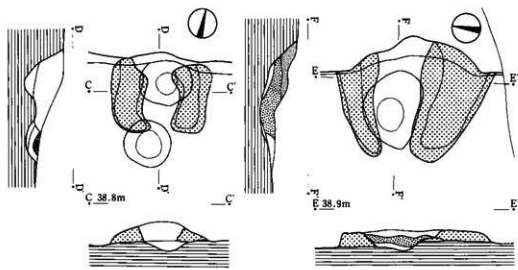
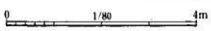
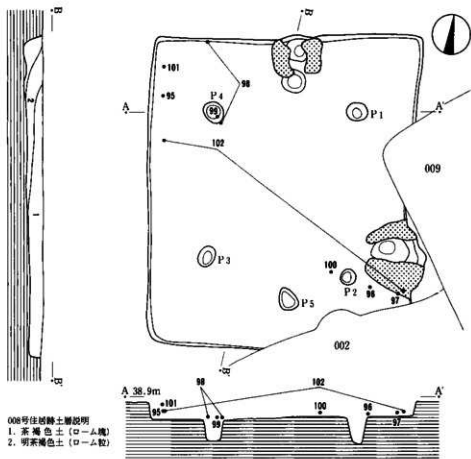
007号住居跡(第16図、図版5)

南区北部、11G-57・58・59・67・68・69・77・78・79に位置し、平坦面に立地する。北西コーナー～北壁西半は006号住居跡、南西コーナー～南壁東側1/3は009号住居跡にそれぞれ切られている。なお、本住居跡は後述する015号住居跡を建て替えて拡張を行なったものである。規模は東壁で4.2mを測り、不整形を呈する。主軸方位はN-9°-E。覆土はローム粒を含む暗茶褐色土が主体で、自然堆積と考えられる。床面はローム塊を含む黄褐色土によって貼床がなされており、全体に軟弱であった。壁高は北壁・東壁・南壁が20cm、西壁が18cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝は検出されなかった。ピットは5か所検出された。P1～P4は支柱穴であり、径28～46cm、深さ46～56cmを測る。柱間寸法はP1-P2が2.8m、P2-P3が2.5m、P3-P4が2.6m、P4-P1が2.6mを測る。配置は方形を呈する。覆土はローム塊を含む黒褐色土が主体であった。P5は出入口施設に伴うピットと考えられるもので、楕円形を呈し、長軸径38cm、短軸径22cm、深さ約25cmを測る。カマドは北壁に位置する。両袖部は遺存しており、主軸方位はN-9°-Eで住居跡のそれと同じ。煙道部分が006号住居跡によって破壊されているため、壁外への掘り込みは不明であり、幅90cmを測る。床面の掘り込みは不整形を呈し、焚口部分は一段深く掘り込まれている。掘り込みの規模は径約80cm、床面からの深さは焚口で最大10cmを測る。両袖部は黄褐色の砂質粘土を構築材として用いており、床面からの高さは15cm遺存していた。焚口～燃焼部底面はあまり焼けていなかったが、直上には焼土が堆積していた。それより上の覆土は茶褐色土が主体であった。天井部構築材崩壊土は認められなかった。

遺物は、カマド周辺からまばらに土師器が出土した。坏(88)・鉢(91)は床面からやや浮いた状態で出土したものであるが、遺存度も大きく一括遺物と考えられる。

008号住居跡(第17図、図版5)

南区北部、11G-73・74・75・76・83・84・85・86・93・94・95・96、12G-03・04・05・06に位置し、平坦面に立地する。東壁中央部分は009号住居跡、南東コーナー南壁東半は002号住居跡にそれぞれ切られている。規模は北壁で5.6m、西壁で6.2mを測り、縦長の方形を呈する。主軸方位は北側のカマドとP5を結んだラインはN-10°-W方向に向いている。覆土はローム塊を含む茶褐色土が主体で自然堆積と考えられる。床面はハードローム層で、全体に軟弱であった。壁高は北壁・東壁で30cm、南壁で20cm、西壁で35cmを測り、約70度で立ち上がる。周溝は検出されなかった。ピットは5か所検出された。P1～P4は支柱穴であり、径32～48cm、



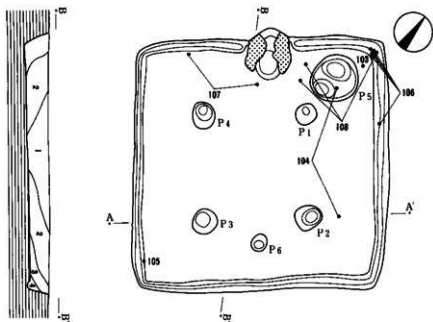
第17図 008号住居跡・カマド実測図

深さはP1が44cm、P2が43cm、P3が34cm、P4が38cmを測る。柱間寸法はP1-P2が3.3m、P2-P3・P3-P4・P4-P1が3.0mを測る。配置はほぼ正方形を呈する。P5は出入口施設に伴うピットと考えられるもので、径約40cm、深さ約40cmを測る。カマドは北壁と東壁の2か所に検出された。北壁のものは北壁中央からやや東よりに位置する。主軸方位はN-16°-Wで、住居跡のそれに比して西に振れている。壁外への掘り込みほとんどないが、煙道部が若干突出し、全長約1.2m、幅約1.15mを測る。焚口の掘り込みは不整形形を呈し、径約50cm、床面からの深さは最大12cmを測る。燃焼部奥の掘り込みも不整形形を呈し、径約60cm、深さは床面から最大15cmを測る。両袖部はローム主体の黄褐色土を構築材として用いて構築されている。袖部は壁からの長さ約80cm、高さは15cm遺存していた。覆土は焚口覆土最上層に焼土が堆積していたほかは、ローム主体の黄褐色土を主とする。煙道部は約50度で立ち上がる。東壁のカマドは北東コーナーから4.8m南に位置する。主軸方位はN-177°-W。壁外へは約40cm掘り込み、全長1.3m、幅約1.7mを測る。両袖部は壁からの長さは約1m、床面からの高さは最大15cmを測る。構築材は山砂・焼土粒を含む暗褐色土を用いていた。燃焼部は楕円形に浅く掘り込まれ、長軸径80cm、短軸60cmを測る。この掘り込み面の直上には、焼土粒を主体とし、多量の山砂・ローム粒を含む暗赤色土が堆積していたが、赤色硬化面は認められなかった。煙道部は約50度で立ち上がる。

遺物は、住居跡北西コーナーを主体にまばらに土師器が出土した。東壁カマド右側の坏(96・97)は床面直上からの出土であり、一括遺物と考えられる。

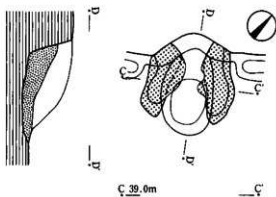
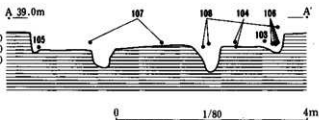
009号住居跡 (第18図、図版5)

南区中央部南東寄り、11G-76・77・78・86・87・88・89・96・97・98・99、12G-07・08に位置し、ほぼ平坦面に立地する。規模は北西壁で5.2m、北東壁・南東壁で5.0m、南西壁で4.8mを測り、ほぼ正方形を呈する。主軸方位はN-38°-W。覆土はローム粒を含む茶褐色土・暗茶褐色土が主体であった。床面はハードローム層で、中央部はひじょうに堅緻であった。壁高は北西壁が44cm、北東壁が40cm、南東壁が48cm、南西壁が41cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝はカマド内を除いて全周しており、最大幅32cm、深さ12cmを測る。ピットは6か所検出された。主柱穴はP1~P4で、径45~60cm、深さ33~50cmを測る。柱間寸法はP1-P2、P3-P4・P4-P1が2.2m、P2-P3が2.3mを測り、配置はほぼ正方形を呈する。P5はカマド右側、北西壁下に位置する貯蔵穴で、不整形形を呈し、規模は径約1m、深さ約45cmを測る。底面はピット状に浅く掘り込まれている部分が2か所あり、中央部は凸面となる。覆土はローム粒を少量含む黒褐色土が主体であった。P6は出入口施設に伴うピットと考えられるもので、南東壁上場から50cm北西側に位置する。規模は径36cm、深さ40cmを測る。カマドは北西壁中央やや北東寄りに位置する。遺存状態は比較的良好で、両袖部及び楕円形の浅い掘り込みが検出された。主軸方位はN-38°-Wで、住居跡のそれと同じ。壁外へは約20cm掘り込み、全長約1.1m、幅1.0

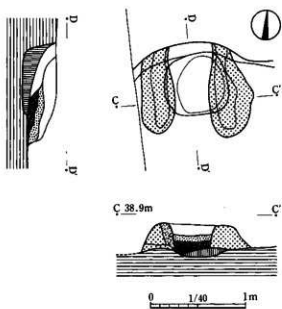
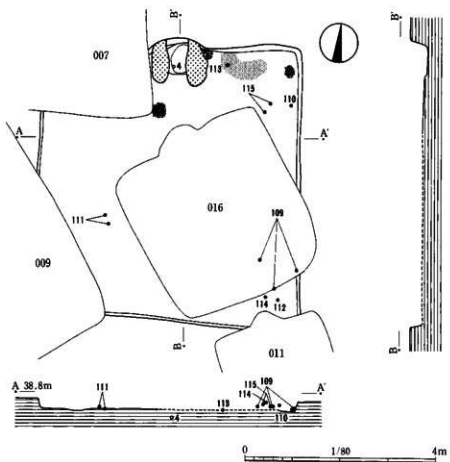


009号住居跡土層説明

1. 暗茶褐色土 (ローム状)
2. 茶褐色土 (ローム状)
3. 暗茶褐色土 (ローム状)
4. 黒褐色土



第18図 009号住居跡・カマド実測図



第19図 010号住居跡・カマド実測図

mを測る。袖部は壁からの長さ約80cm、床面から約30cmの高さで遺存していた。両袖部は燃焼部付近でオーバーハングしており、内側はよく焼け、赤色に硬化していた。両袖の内側の間隔は約40cmを測る。構築材は黄褐色の砂質粘土を用いていた。掘り込みは焚口～煙道部下まで施されており、長さ90cm、幅55cm、深さ約7cmを測り、覆土は2層に分かれるが、焚口～燃焼部の底面上には多量の焼土粒を含む赤褐色土が充満しており、その上には茶褐色土が堆積していた。煙道部は約70度で立ち上がる。

遺物は、P5周辺を中心として土師器が出土した。床面から浮いた状態で出土したものが多く、本住居跡に伴うものか断定できない。

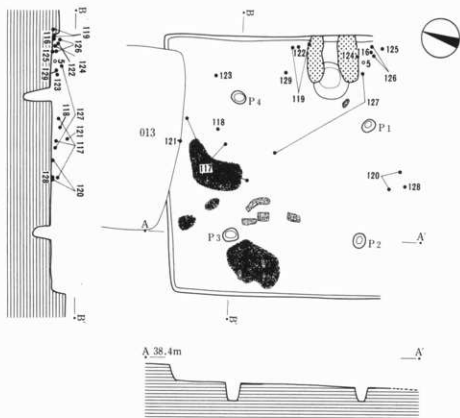
010号住居跡（第19図、図版6）

南区北部、11G-69・78・79・88・89・99、11H-60・61・70・71・80・81・90・91に位置し平坦面に立地する。多くの住居跡に切られており、南東側が016号住居跡、南東コーナーが011号住居跡、南西コーナーが009号住居跡、北西コーナーから北壁が015号住居跡にそれぞれ重複している。規模は全辺遺存の壁面がないため不明だが、カマドと南壁を結ぶ中軸線は5.8mを測り、方形を呈すると推測される。主軸方位はN-7°-W。覆土はローム塊を含む茶褐色土が主体で、部分的に焼土・山砂の分布がみられた。床面はハードローム層で全体に軟弱であった。壁面は部分的にしか遺存していなかったが、壁高は北壁で22cm、南壁で28cm、西壁で20cmを測り、約70度で立ち上がる。周溝・ピットは検出されなかった。カマドは北壁に位置する。耕作による攪乱を受けており、遺存状態は不良であったが、両袖部は遺存していた。主軸方位はN-7°-Wで、住居跡のそれと同じ。壁外に約25cm掘り込み、全長約1.0m、幅約1.2mを測る。燃焼部の掘り込みは不整形を呈し、径約70cm、深さは床面から最大10cmを測る。この掘り込みの直上には埋め土と思われる山砂・ローム粒を含む暗褐色土が堆積していた。両袖部は山砂を構築材として用いており、壁からの長さ約1.0m、高さは25cm遺存していた。焚口～燃焼部底面はほとんど焼けてはいなかったが、直上には焼土が、その上には焼土を多量に含む褐色土が堆積していた。煙道部には焼土粒・炭化物粒・山砂を含む暗褐色土が堆積していた。天井部構築材崩壊土は認められなかった。煙道部は約30度で立ち上がる。

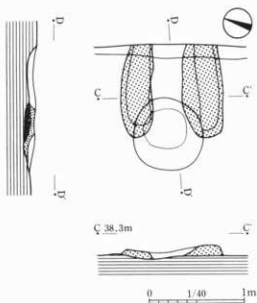
遺物は、住居跡東側にまばらに土師器、土製支脚が出土した。いずれも床面直上からの出土であり、一括遺物と考えられる。

012号住居跡（第20図、図版6）

南区北部、12G-38・39・48・49・58・59・68・69、12H-20・30・31・40・41・50・51に位置し、南に面する緩斜面に立地する。斜面下方の南側1/4は欠失。北壁の東側約1/2は003号住居跡に切られていた。規模は北壁で5.2mを測り、方形を呈すると推測される。主軸方位はN-78°-W。覆土は焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土・褐色土が主体で、自然堆積と考えられる。また、西側を中心として床面上から焼土・炭化材が検出され、焼失住居であると考えられる。床面は



0 1/80 4m



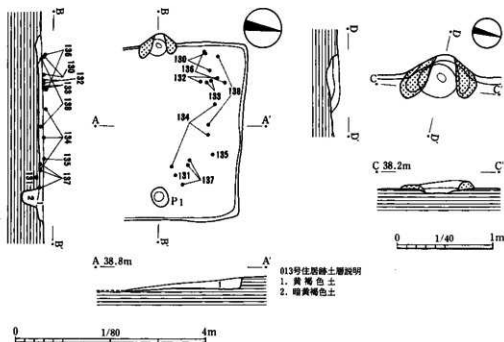
第20図 012号住居跡・カマド実測図

ハードローム層で、全体に堅緻で一部焼けて硬化している部分が認められた。壁面は痕跡的にしか遺存していなかったが、壁高は東壁で15cm、西壁で30cm、北壁で35cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝は検出されなかった。ピットは支柱穴が4か所検出された。P1～P4は径15～30cm、深さ30～60cmを測る。柱間寸法はP1～P2が2.4m、P2～P3が2.7m、P3～P4・P4～P1が2.8mを測る。配置は不整な方形を呈する。カマドは東壁に位置する。南壁が失われているため、本来、東壁のどの辺に位置するか不明であるが、支柱穴との位置関係からかなり南側に寄っていると考えられる。攪乱を受けており、遺存状態は不良であったが、両袖部は遺存していた。主軸方位はN-70°-Wで、住居跡のそれよりやや東に振れている。壁外への掘り込みはなく、全長約1.3m、幅約1.1mを測る。焚口～燃焼部にかけての床面の掘り込みは不整形を呈し、径約80cm、深さは床面から最大10cmを測る。両袖部は山砂を構築材として用いており、壁から直線的に伸び、長さ約1.0m、高さは10cm遺存していた。焚口～燃焼部底面直上には焼土が、その上には焼土主体の赤褐色土が堆積していた。煙道部には多量の山砂を含む褐色土が堆積していた。煙道部は約40度で立ち上がる。

遺物は、住居跡東側、カマド周辺にややまとまって土師器、土製支脚が出土した。いずれも覆土下層ないしは床面直上からの出土であり、一括遺物と考えられる。

013号住居跡（第21図、図版6）

南区中央部、12H-50・51・52・60・61・62に位置し、南に面する斜面に立地する。斜面下



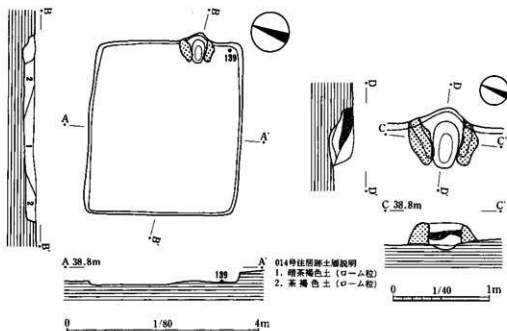
第21図 013号住居跡・カマド実測図

方の南側約1/3は欠失。規模は東壁で3.5mを測り、カマドとP1を結んだラインを中軸線と考えれば、ほぼ正方形を呈する住居跡であると推測される。主軸方位はN-105°-E。覆土はローム粒を多量に含む暗褐色土を主体とする。床面はハードローム層でほぼ平坦であった。壁高は北壁で約24cm、西壁・東壁で約12cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝は施されていない。ピットは一か所検出された。P1は出入口施設に伴うピットと考えられるもので、東壁上場から25cm北西側に位置する。規模は径40cm、深さ36cmを測る。覆土はローム塊を多く含む暗黄褐色土であった。カマドは西壁に位置する。耕作による攪乱を受けており遺存状態は不良であったが、主軸方位はN-101°-Wで、住居跡のそれに比してやや南側に振れている。壁外には約20cm掘り込み、全長約45cm幅約80cmを測る。袖部は壁から約40cm、床面からの高さは約10cmを測る。構築材は黄褐色土の砂質粘土を主体とする。燃焼部の掘り込みは径約30cm、床面からの深さ約5cmを測る。焚口底面はよく焼け赤化していた。覆土は2層に分かれ、上層は砂質粘土粒を含む黄褐色土、下層に焼土粒を含む黒褐色土が堆積していた。煙道部は約30度で立ち上がる。

遺物は、覆土上層を主体に土師器が出土した。西側の坏(131)、甕(137)は床面直上から出土したものであり、本住居跡に伴うものと判断される。

014号住居跡(第22図、図版7)

南区北部、10G-93・94・95、11G-03・04・05に位置し、ほぼ平坦面に立地する。耕作による攪乱を受け、遺存状態は不良であった。規模は北東壁・南西壁で3.0m、南東壁で3.5m、



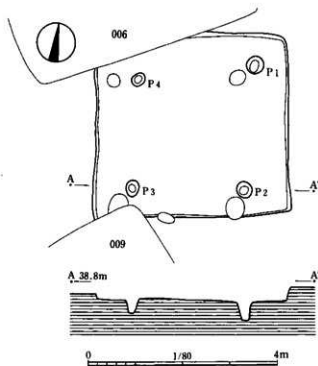
第22図 014号住居跡・カマド実測図

北西壁で3.4mを測り、縦長の不整な方形を呈する。主軸方位はN-68°-E。覆土はローム粒を含む暗茶褐色土・茶褐色土が主体であった。床面はハードローム層で、全体的に軟弱であった。壁高は北東壁で24cm、南東壁・南西壁で約20cm、北西壁で約8cmを測り、約70度で立ち上がる。周溝及びピットは検出されなかった。カマドは北東壁の中央から約70cm南側に寄りに位置し、両袖と楕円形の掘り込みが検出された。主軸方位はN-74°-Eで、住居跡のそれよりやや東に寄っている。壁外に約20cm掘り込み、全長約60cm、幅約75cmを測る。袖部は壁からの長さ約50cm、床面からの高さ約20cmが遺存していた。構築材は山砂を主体とする。掘り込みは長軸径約50cm、短軸径約25cm、床面からの深さ約15cmを測る。覆土は焼土粒・山砂・炭化物粒を含む暗褐色土を主体とするが、燃焼部から煙道部にかけての中層に焼土が堆積していた。煙道部は約80度で立ち上がる。

遺物は、覆土中から少量の土師器片が出土した。東側コーナー際の土師器甕(139)床面直上からの出土であり、本住居跡に伴うものと判断される。

015号住居跡(第23図、図版7)

南区北部、11G-57・58・59・67・68・69・77・78・79に位置し、平坦面に立地する。北西コーナー～北壁西半は006号住居跡、南西コーナー～南壁東側1/3は009号住居跡にそれぞれ切られている。本住居跡は先述したとおり、007号住居跡が建て替えて拡張を行なう前の住居跡であ



第23図 015号住居跡実測図

り、大部分は破壊されていたが北壁・東壁は007号住居跡とほぼ重なる。規模は東壁で3.6mを測り、不整形を呈する。主軸方位はN-7°-W。覆土は全て007号住居跡の貼床で、ローム塊を含む黄褐色土が主体であった。床面はハードローム層で全体に軟弱であった。壁高は北壁・東壁で約30cm、007号住居跡によって削平された南壁・西壁で約10cmを測り、約75度で立ち上がる。周溝は検出されなかった。ピットは主柱穴が4か所検出された。P1~P4は径30~40cm、深さ30cmを測る。柱間寸法はP1-P2が2.6m、P2-P3が2.4m、P3-P4が2.2m、P4-P1が2.5mを測る。配置はP1が北東コーナー側に大きくずれており、不整形な方形を呈する。カマドは北壁に位置する。007号住居跡のカマドと同じ場所に構築されていたと考えられ、掘り込みが検出されたのみである。底面には焼けた痕跡が認められ、焼土を少量含む茶褐色土が堆積していた。

遺物は、覆土中から土師器の小片が出土したが、図示することはできなかった。

016号住居跡（第24図、図版7）

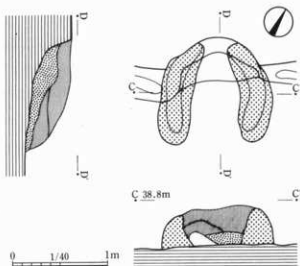
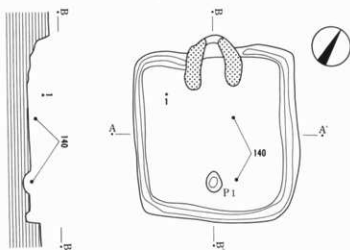
南区中央部、11G-79・89、11H-70・71・80・81・90・91に位置する。ほぼ平坦面に立地する。所々に擾乱を受けていたほかは遺存状態は比較的良好であった。規模は北西壁・北東壁が3.3m、南東壁が3.0m、南西壁が3.1mを測り、ほぼ正方形を呈する。主軸方位はN-33°-W。覆土は主として2層に分かれ、上層にローム塊を含む茶褐色土・暗茶褐色土、下層には明茶褐色土が堆積しており人為的堆積と考えられる。床面はハードローム層でほぼ平坦であった。壁高は北西壁が45cm、北東壁が44cm、南東壁が30cm、南西壁が52cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝はカマド内を除いて全周し、最大幅約36cm、深さ約4cmを測る。ピットは1か所検出された。P1は出入口施設に伴うピットと考えられるもので、径約40cm、深さ10cmを測る。覆土はローム塊を多量に含む黄褐色土が堆積していた。カマドは北西壁中央に位置する。遺存状態は良好であった。主軸方位はN-35°-Wで、住居跡のそれよりやや西に寄っている。壁外へは約30cm掘り込み、全長約1.1m、幅約1.2mを測る。底面の掘り込みは認められなかった。袖部は壁からの長さ1.1m、底面からの高さは約40cm遺存していた。構築材は山砂を主体とする。カマド内の覆土は底面直上層が焼土を多量に含む暗赤褐色土、それ以外は山砂を主体とする黄褐色土であった。煙道部は約60度で立ち上がる。

遺物は、まばらに土師器片などが出土した。図示した坏（140）・刀子（1）は覆土中層から出土したものである。

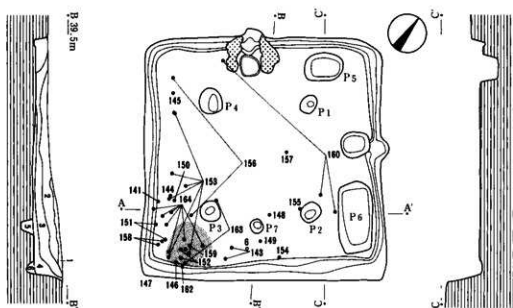
017号住居跡（第25図、図版8）

北区西北部、3B-19・28・29・38・39・48・49・59、3C-10・20・21・30・31・40・41・50に位置し、ほぼ平坦面に立地する。規模は北東壁で4.7m、南東壁で5.0m、南西壁4.6m、北西壁4.8mを測り、ほぼ正方形を呈する。主軸方位はN-42°-W。覆土はローム粒を含む黒褐色土・暗褐色土が主体であり、自然堆積と考えられる。また、南側コーナー下には山砂の分布が

みられた。床面はハードローム層で、特にP1~P4を囲む部分一帯が堅く踏み締められていた。壁高は北東壁で24cm、南東壁・北東壁で60cm、南西壁で76cmを測り、約80度で立ち上がる。周

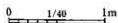
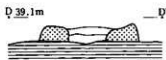
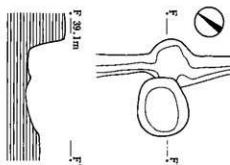
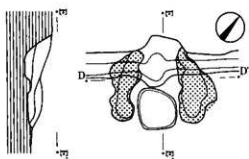
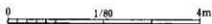
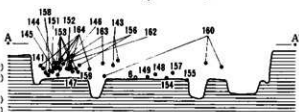


第24図 016号住居跡・カマド実測図



017号住居跡土層説明

1. 黒褐色土 (ローム粒少量)
2. 暗褐色土 (ローム粒多量)
3. 暗褐色土 (ローム塊)
4. 暗褐色土 (ローム粒多量)
5. 暗褐色土 (ローム粒・塊)
6. 暗黄褐色土 (ローム粒・塊)



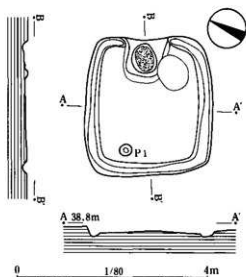
第25図 017号住居跡・カマド実測図

溝は全周しており、最大幅50cm、深さ8cmを測る。ピットは7か所検出された。主柱穴はP1～P4で、径30～52cm、深さは約33～40cmを測るほぼ均一な掘り方である。柱間寸法はP1-P2が2.3m、P2-P3が2.1m、P3-P4が2.2m、P4-P1が2.0mを測り、配置はほぼ正方形を呈する。P5は北西壁下カマド右側に位置する貯蔵穴で、不整な方形を呈し、規模は長軸約80cm、短軸約60cm、深さ約40cmを測る。覆土は暗褐色土を主体とする。P6は東側コーナー下に位置する貯蔵穴で、縦長の方形を呈し、規模は長軸約1.4m、短軸約80cm、深さ約25cmを測る。覆土は下層が暗黒褐色土、上層がローム塊を多量に含む暗褐色土が堆積しており、上層は埋め戻しによるものと思われる。P7は南東壁下に位置する出入口施設に伴うピットで、径約30cm、深さ約30cmを測る。カマドは北西壁と北東壁の2か所に検出された。北西壁のものは壁の中央やや西寄りに位置し、遺存状態は比較的良好であった。主軸方位はN-42°-Wで、住居跡のそれと同じである。壁外へは約20cm掘り込み、全長約1.0m、幅約1.1mを測る。焚口から燃焼部にかけて径約80cm、深さ5cmの隅丸方形に掘り込まれており、また、燃焼部奥～煙道部にかけては円形に周溝の幅を広げている。袖部は山砂を用いて構築されており、左右とも壁からの長さ約80cm、高さは約15cm遺存していた。覆土はローム粒・焼土粒を含む暗褐色土を主体とする。煙道部は約55度で立ち上がる。北東壁のカマドは壁の中央よりやや北西寄りに位置し、浅い掘り込みが検出されたのみで、袖部は完全に失われていた。主軸方位はN-58°-E。壁外へは約15cm掘り込み、全長約1.0mを測る。底面は径約60cm、深さ10cm、楕円形に掘り込まれており、また北西側のものと同様に周溝の幅を広げている。煙道部は約75度で立ち上がる。以上、北東側のカマドが破壊されていることと、P6が埋め戻されていることから、両者は同時に使用されたのではなく、北東壁を中心として諸施設を設けた住居跡（主軸が東西方向）から北西壁中心の住居跡（主軸が南北方向）に改築されたものと考えられる。

遺物は、南側コーナーを中心として土師器、土製支脚がまとまって出土した。南東側床面直上出土の鉢(149)、甕(154・155)は確実に本住居跡に伴うものと考えられる。それ以外は覆土中層から出土したものが多く、流れ込みの可能性が高い。

018号住居跡(第26図、図版8)

北区北西部、5C-27・28・29・37・38・39に位置し、ほぼ平坦面に立地する。003号掘立柱建物跡と重複する。規模は東壁で2.1m、南壁で2.5m、西壁で2.4m、北壁で2.6mを測り、方形を呈する。主軸方位はN-63°-E。覆土は攪乱によって、ほとんど残存していないが、床面直上に焼土粒、山砂、ローム粒を少量ずつ含む黒褐色土が堆積していた。床面はハードローム層で、全体に堅く踏み締められていた。壁面は遺存状態が悪く、壁高は東壁が10cm、南壁が5cm、北壁が12cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝はカマド内を除いて施されており、最大幅30cm、深さ約5cmを測る。ピットは1か所検出された。P1は径約25cm、深さ約40cmを測る。カマドは北壁ほぼ中央に位置する。遺存状況は耕作による攪乱を受けており上部は失われ、基部



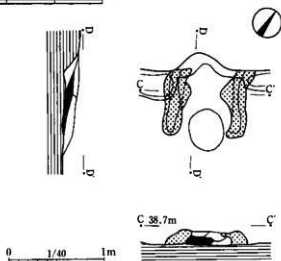
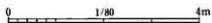
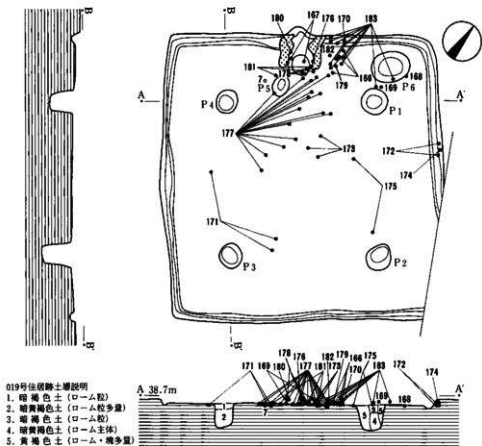
第26図 018号住居跡実測図

のみが検出された。主軸方位はN-72°-Eで、住居跡のそれに比して東に振れている。袖部の基部は、地山のハードロームを一辺約1.0mの方形に削り出し、その中を径約60cm、深さ約5cm楕円形に掘り込んでいる。掘り込みの底面はよく焼け、焼土粒を含む暗褐色土が堆積していた。袖部は住居跡の覆土中に焼けた山砂が流出していることから、本来は山砂を用いて構築したと思われる。

遺物は、覆土中からまばらに土器片が出土した。

019号住居跡（第27図、図版8）

北区北西部、5D-11・12・13・20・21・22・23・30・31・32・33・34・40・41・42・43・44・51・52に位置し、ほぼ平坦面に立地する。東側コーナーは調査区域外におよんでおり、調査できなかった。規模は北西壁で5.5m、南西壁で5.8mを測り、方形を呈する。主軸方位はN-41°-W。覆土は攪乱によって、ほとんど残存していないが、ローム粒を少量含む暗褐色土が堆積していた。床面はハードローム層で、特にP1~P4を囲む部分一帯が堅く踏み締められていた。壁高は北西壁で10cm、北東壁で12cm、南東壁・南西壁で5cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝は検出部分ではカマド内を除いて全周しており、最大幅60cm、深さ6cmを測る。ピットは6か所検出された。主柱穴はP1~P4で、径45~60cm、深さは約45~60cmを測り、ほぼ均一な掘り方である。柱間寸法はP1-P2・P4-P1が3.6m、P2-P3・P3-P4が3.7mを測り、配置はほぼ正方形を呈する。なお、P1には柱痕跡が認められた。P5は北側コーナー下に位置する貯蔵穴で、不整形を呈し、規模は長軸径約80cm、短軸径約60cm、深さ約30cmを測る。覆土はローム粒を含む暗褐色土を主体とする。P6はカマド左手前に位置する小ピットで径約40cm、深さ約40cmを測る。カマドは北西壁中央に位置する。遺存状態は比較的良好であった。主軸方位



第27図 019号住居跡・カマド実測図

はN-41°-Wで、住居跡のそれと同じである。壁外へは約20cm掘り込み、全長約1.0m、幅約90cmを測る。焚口から燃焼部にかけて径約40cmのわずかな窪みが認められた。袖部は山砂を主材とする暗褐色土・ローム塊を含む土を用いて構築されており、左右とも壁からの長さ約65cm、高さは約15cm遺存していた。燃焼部の底面直上に焼けて赤化した山砂、それ以外は山砂・焼砂粒を含む暗褐色土が堆積していた。煙道部は約45度で立ち上がる。

遺物は、カマド周辺及び手前からままとまって出土した。床面直上ないしはやや浮いて出土したものが多く、すべて一括遺物と考えられる。

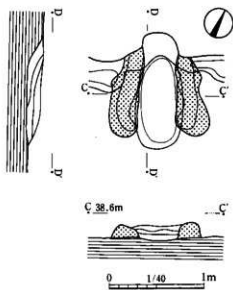
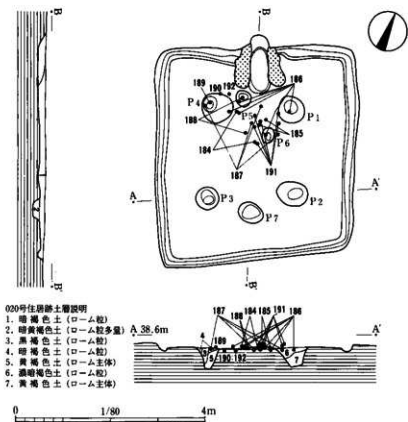
020号住居跡（第28図、図版9）

北区南部、5D-62・63・64・72・73・74・82・83・84・93に位置し、南に面する緩斜面に立地する。遺存状態は比較的良好であった。規模は北西壁・北東壁・南東壁で3.9m、南西壁で4.4mを測り、方形を呈する。主軸方位はN-26°-W。覆土はローム粒を含む暗褐色土を主体とする。床面はハードローム層で、とくにカマド手前から中央部にかけて硬く締まっていた。壁高は北西壁・南西壁で16cm、北東壁・南東壁で12cmを測り、約64度で立ち上がる。周溝はカマド内を除いて全周し、最大幅26cm、深さ約4cmを測る。ピットは7か所検出された。主柱穴はP1~P4で、規模は径43~60cm、深さはP1が24cm、P2・P3が44cm、P4が20cmを測る。柱間寸法はP1-P2・P2-P3が1.8m、P3-P4が1.9m、P4-P1が1.7mを測る。配置は不整形方形を呈する。なお、P3・P4は黒褐色土が柱状に堆積しており、柱痕と考えられる。P5はカマド手前左側に位置するピットで、径約35cm、深さ約15cmを測る。P6はP1の南側約80cmに位置し、径約30cm、深さ60cmを測る。P5・P6ともその機能は詳らかではない。P7は径約50cm、深さ15cmを測り、出入口部施設に伴う柱穴と考えられる。カマドは北東壁中央に位置する。遺存状態は良好である。主軸方位はN-29°-Wで、住居跡のそれよりやや西側に振れている。壁外へは約25cm掘り込み、全長約1.2m、幅約1.1mを測る。底面の掘り込みは焚口部から燃焼部に施されている。袖部は壁面からやや外方に開きながら伸びており、長さ約90cm、床面からの高さ約20cmを測る。構築材は山砂を主材とする。覆土は焼砂・炭化物粒を含む暗褐色土を主体とする。煙道部は約30度で立ち上がる。

遺物は、カマド手前を中心としてままとまって土器が出土した。床面直上ないしはやや浮いて出土したものが多く、本住居跡に伴うものと考えられるのは北東周溝中から出土した土師器坏(32)のみであり、それ以外の北東コーナー側から出土した土器は流れ込みの可能性が高い。

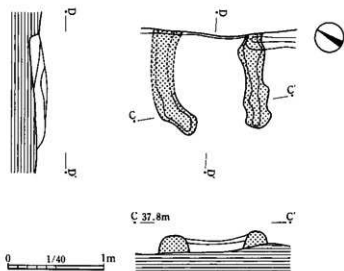
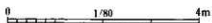
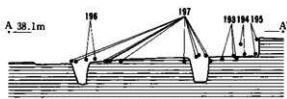
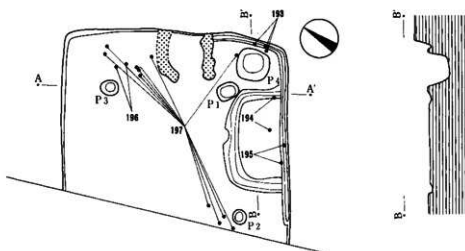
023号住居跡（第29図、図版9）

南区南部、10F-34・35・36・44・45・46・47・55・56・57に位置し、北西に面する斜面に立地する。南西側1/4は調査区域外にかかっていたため調査できなかった。規模は北東壁で4.6mを測り、方形を呈すると推測される。主軸方位はN-51°-E。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体であった。床面はハードローム層で、ほぼ平坦であった。壁高は北東壁で36cm、南東



第28図 020号住居跡・カマド実測図

壁で38cm、北西壁で6cmを測る。周溝は北東壁カマド南側～南東壁検出部分手前まで巡っており、最大幅16cm、深さ8cmを測る。また、南東壁中央下には方形に溝が巡っており、長方形の



第29図 023号住居跡・カマド実測図

間仕切り状のスペースを作り出している。規模は長軸1.6m、短軸80cmを測る。ピットは4か所検出された。P1～P3は主柱穴で、径30～48cm、深さ41～49cmを測る。柱間寸法はP1-P2が2.6m、P3-P1が2.5mを測る。配置は不整形を呈すると推測され、P3-P1ラインは北東壁にほぼ平行している。P4は東側コーナー下に位置する貯蔵穴で、径70cm、深さ50cmを測り、不整形を呈する。覆土はローム粒・塊を含む暗褐色土を主体とする。カマドは北東壁ほぼ中央に位置する。所々攪乱を受けており、左袖の大部分は失われていた。主軸方位はN-51'-Eで住居跡のそれと同じ。壁外への掘り込みはなく全長約1m、幅約1.2mを測る。底面への掘り込みは認められなかった。右袖部は壁面からの長さ約1.0m、高さ15cmを測り、構築材には山砂を用いている。内側の覆土は上層に焼土粒を少量含む暗褐色土、中層に被熱し赤変した山砂を少量含む暗黄褐色土、下層には焼砂・炭化物粒を含む暗黒褐色土が堆積していた。

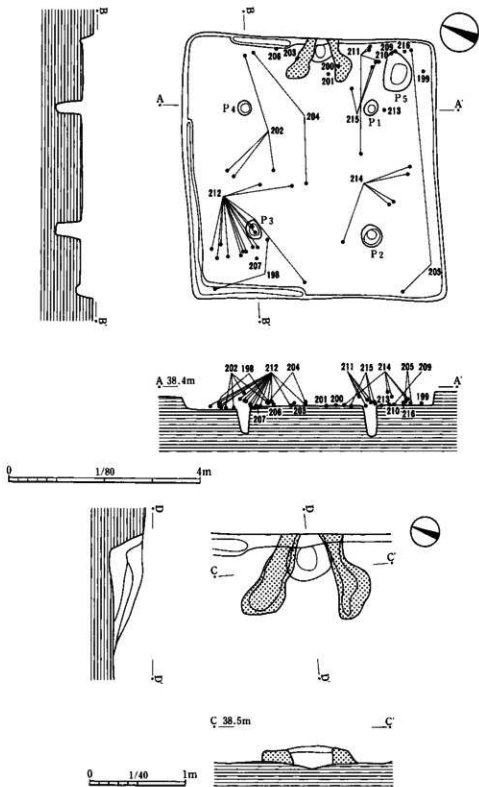
煙道部は約65度で立ち上がる。

遺物は、住居跡東側を中心としてややまとまって土師器が出土した。南東壁際の坏(194・195)以外は床面直上からの出土であり、本住居跡に伴うものと考えられる。

024号住居跡（第30図、図版9）

南区北西部、10F-67・68・69・77・78・79・87・88・89・97・98・99、10G-70・80に位置し、北西に面する緩斜面に立地する。規模は北東壁で5.1m、南東壁で5.2m、南西壁で5.3m、北西壁で5.4mを測り、ほぼ正方形を呈する。主軸方位はN-69'-Wである。覆土はローム粒を含む暗褐色土が主体であった。床面はハードローム層で、特にP1～P4を囲む部分一帯が堅く踏み締められていた。壁高は北東壁で28cm、南東壁で24cm、南西壁で27cm、北西壁で22cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝は北東壁カマド北側・南西壁1/2～北東壁1/3まで施されており、南側には施されていない。最大幅40cm、深さ7cmを測る。ピットは5か所検出された。主柱穴はP1～P4で径33～44cm、深さは48～60cmを測り、ほぼ均一な掘り方である。柱間寸法はP1-P2・P4-P1が2.6m、P2-P3・P3-P4が2.5mを測り、配置はほぼ正方形を呈する。P5は東側コーナー下に位置する貯蔵穴で不整形を呈し、長軸径約80cm、短軸径60cm、深さ約40cmを測る。カマドは北東壁中央よりやや南寄りに位置する。遺存状況は比較的良好であった。主軸方位はN-72'-Wで、北東壁にほぼ直交して構築されており、住居跡の主軸に比して東に振れている。壁外への掘り込みはなく、全長90cm、幅約1.4mを測る。燃焼部～煙道部にかけて径約50cm、深さ約5cm楕円形に掘り込まれている。袖部は山砂を用いて構築されており、「ハ」の字状に開いている。左右とも壁からの長さ約90cm、高さは約15cm遺存していた。燃焼部底面直上には焼砂を少量含む黒褐色土、その上には炭化物粒を含む暗褐色土が堆積していた。煙道部は約60度で立ち上がる。

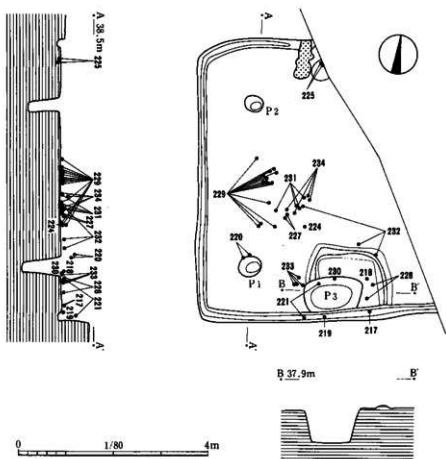
遺物は、住居跡全体から土師器が出土した。ほとんどが床面直上ないしは覆土下層中から出土したもので、一括遺物と考えられる。



第30図 024号住居跡・カマド実測図

025号住居跡 (第31図、図版10)

南区南部、10G-33・43・44・53・54・55・63・64・65に位置し、北東に面する斜面に立地する。北東側1/3は調査区域外にかかっていたため調査できなかった。規模は西壁で5.4mを測り、方形を呈すると推測される。主軸方位はN-6°-W。覆土はローム質の褐色土が主体であった。床面はハードローム層でほぼ平坦であった。壁高は北壁で約8cm、南壁で約60cm、西壁で約52cmを測り、約90度で立ち上がる。周溝は検出部分ではカマド内を除いて全周しており、最大幅26cm、深さ5cmを測る。ピットは3か所検出された。P1・P2は支柱穴で径30~48cm、深さ64~80cmを測る。柱間寸法はP1-P2が3.2mを測る。配置は東側の支柱穴が未検出のため不明であるが、P1-P2ラインは西壁にほぼ平行している。P3は南壁下に位置する貯蔵穴で、横長の方形を呈し、長軸1.2m、短軸70cm、深さ約70cmを測り、南側の側面は周溝に取りついている。覆土は褐色のローム土を主体とする。また、このP3の北東コーナーから東側を取り囲むようにして、地山を削り出して作られた幅約30cm、高さ約10cmを測る方形の低い土堤状のものが巡っており、貯蔵穴P3に関わる施設であると推測される。カマドは北壁に位置する。東側1/



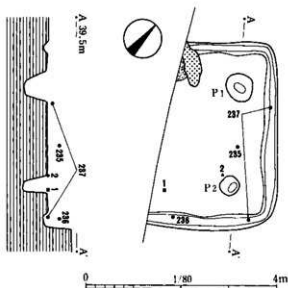
第31図 025号住居跡実測図

2は調査区域外に及んでおり、右袖部は調査することができなかつた。主軸方位はN-6'-Wで、住居跡のそれと同じ。壁外への掘り込みは不明。掘り込みは焚口から燃焼部まで及んでいるとみられ、径約45cmの円形を呈すると推測される。袖部は壁面からの長さ80cm、高さ10cmを測り、構築材には山砂を用いている。覆土は焼砂・炭化物粒を含む暗黒褐色土が主体に堆積していた。

遺物は、住居跡南西側を中心として土師器が出土した。床面直上から出土したものがほとんどで、P1付近の坏(220)南壁際の坏(221)以外は本住居跡に伴うものと思われる。

026号住居跡(第32図)

北区南東部、3B-88・89・98・99、3C-90、4B-08・09、4C-00に位置し、ほぼ平坦面に立地する。住居跡南西側は調査区域外にかかっていたため調査できず、北西側は溝によって壁面が破壊されており、遺存状態は不良であった。規模は南西壁で3.0mを測り、方形を呈すると推測される。主軸方位はN-35'-W。覆土は暗褐色土が主体であった。床面はハードローム層で、比較的平坦で硬く締まっている。壁高は北西壁で13cm、北東壁で54cm、南東壁で55cmを測り、約88度で立ち上がる。周溝は検出部分では全周しており、最大幅約38cm、深さ10cmを測る。ピットは主柱穴が2か所検出された。P1は径約60cm、深さ46cm、P2は径約40cm、深さ50cmを測る。柱間寸法は2.0mを測る。カマドは北西壁に位置し、左側約半分は調査区域外に及んでおり調査できなかつた。遺存状態は比較的良好であった。主軸方位はN-35'-Eで住居跡のそれと同じ。壁外への掘り込みは不明である。袖部は山砂を構築材としており、壁からの長さ約90cm、床面からの高さ最大20cm遺存していた。燃焼部底面は浅く掘り込まれ、赤色に硬化しており、直上には多量に純焼砂を含む暗褐色土が堆積していた。



第32図 026号住居跡実測図

出土遺物の量は少ないが、北東壁～南東壁下から土師器壺(235・236)・甕(237)砥石(1)・鎌(2)が出土した。

030号住居跡(第33図、図版10)

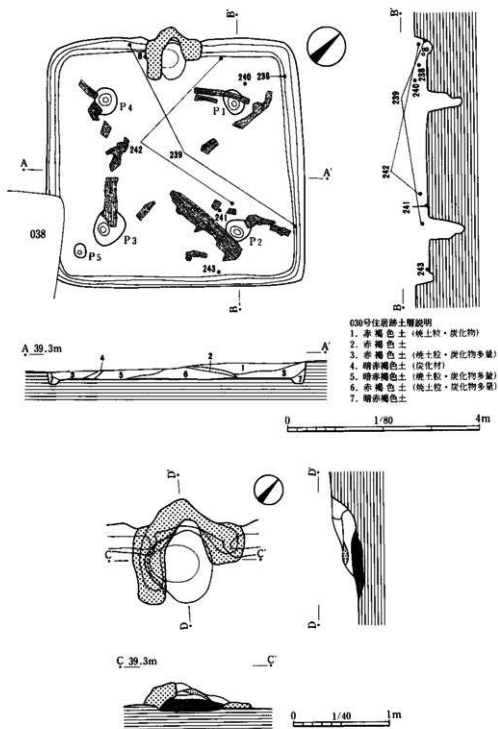
北区南部、4C-11・12・13・20・21・22・23・24・30・31・32・33・41・42・43に位置する。南に面する斜面に立地する。南側コーナー～南西壁1/3が038号住居跡に切られているほかは、遺存状態は良好であった。規模は北西壁・南東壁で5.0m、北東壁で4.8m、南西壁で4.6mを測り、方形を呈する。主軸方位はN-41°-W。床面直上には焼土粒、炭化物を多量に含む赤褐色土が堆積し、ピット付近からは柱材・屋根材と考えられる炭化材が検出された。このことから本住居跡は焼失住居と考えられる。上層の覆土は炭化物を含む赤褐色土・暗赤褐色土を主体とする。床面はハードローム層で、壁高は北西壁で26cm、北東壁で22cm、南東壁で38cm、南西壁で12cmを測り、約85度で立ち上がる。周溝はカマド内を除いて全周し、最大幅40cm、深さ約4cmを測る。ピットは5か所検出された。主柱穴はP1～P4で、規模は径30～40cm、深さはP1・P2が72cm、P3が60cm、P4が78cmを測り、4か所とも掘り方中場から細くなり、掘え方を有する。また、4か所とも柱痕が検出された。柱間寸法はP1-P2が2.6m、P2-P3が2.8m、P3-P4・P4-P1が2.7mを測り、配置はほぼ正方形を呈する。P5はP3と南側コーナーのほぼ中間に位置するピットで、径約30cm、深さ7cmを測る。カマドは北西壁中央に位置する。右袖部が溝跡によって削平されているほかは、遺存状態は良好である。主軸方位はN-43°-Wで、住居跡のそれよりやや西側に振れている。壁外へは25cm掘り込み、全長1.1m、幅約1.2mを測る。底面の掘り込みは焚口から燃焼部に施されており、床面からの深さは最大10cmを測る。左袖部は壁面の掘り込みの側面から、やや内湾気味に伸びており、燃焼部付近でオーバーハンクしている。長さ約1.0m、床面からの高さ約30cmを測る。構築材は山砂を主材とする。焚口から燃焼部底面直上には焼土が堆積し、ほかは焼土粒を含む赤褐色土が主に堆積していた。最上層には天井部の痕跡と思われるやや焼けた山砂が堆積していた。煙道部は約50度で立ち上がる。

遺物は、北側を中心としてややまばらに土器、土製支脚が出土した。本住居跡に確実に伴うものと考えられるのは東側P2周辺から出土した土師器壺(241)・甕(243)のみであり、それ以外の土器は流れ込みの可能性が高い。

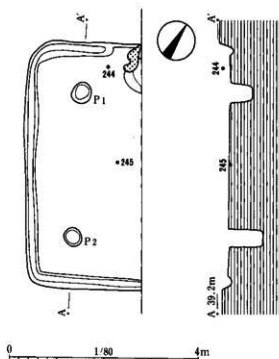
032号住居跡(第34図、図版10)

北区南東部、4C-69・79・89、4D-60・70・80・81に位置する。ほぼ平坦面に立地する。住居跡北東側1/2は調査区域外にかかっていたため調査できなかった。規模は南西壁4.9mを測り、カマドが北西壁の中心に位置するとすれば、ほぼ正方形を呈する住居跡と推測される。主軸方位はN-31°-E。覆土は暗褐色土が主体であった。床面はハードローム層で、比較的平坦で硬く締まっている。壁高は北西壁で約20cm、南東壁で12cm、南西壁で5cmを測り、約70度で立ち上がる。周溝はカマド内を除いて全周し、最大幅約36cm、深さ8cmを測る。ピットは主柱

穴が2か所検出された。P1は径約40cm、深さ70cm、P2は径40cm、深さ46cmを測り、柱間寸法は約3.0mを測る。カマドは北西壁に位置する。右側半分は調査区域外に及んでおり調査できな



第33図 030号住居跡・カマド実測図



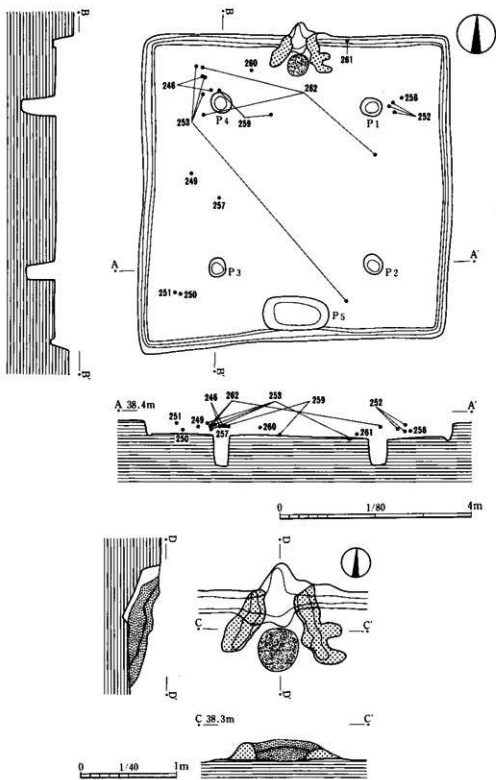
第34図 032号住居跡実測図

かった。主軸方位はN-31°-Eで、住居跡のそれと同じ。壁外への掘り込みは検出部分では認められず、全長約1.0mを測る。袖部は暗褐色土・焼土・炭化物を含む山砂を構築材としていた。壁からの長さ60cm、床面からの高さは最大20cm遺存していた。焚口～燃焼部は15cmほど掘り込まれており、直上には焼土が堆積していた。それ以外の覆土は焼土を多量に含む褐色土を主体とする。

出土遺物の量は少ないが、土師器杯(244)がカマド左側から、甕(245)が中央部から出土した。

033号住居跡(第35図、図版11)

北区南部、6D-55・56・57・58・59・65・66・67・68・69・75・76・77・78・79・85・86・87・88・89・95・96・97に位置する。南に面する斜面に立地する。遺存状態は良好であった。規模は北壁で6.4m、東壁で6.2m、南壁で6.3m、西壁で6.5mを測り、方形を呈する。主軸方位はN-3°-W。覆土は黒褐色土を主体とする。床面はハードローム層で、壁高は北が約40cm、東壁・西壁・南壁で約30cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝は全周し、最大幅約30cm、深さ約10cmを測る。ピットは5か所検出された。P1～P2は主柱穴で、規模は径35～42cm、深さ60～80cmを測るしっかりとした掘り方である。柱間寸法はP1-P2・P2-P3・P4-P1が3.3m、P3-P4が3.4mを測る。配置は整然としており、ほぼ正方形を呈する。P5は南壁直下に位置する貯蔵穴で、横長の隅丸方形を呈し、長軸1.4m、短軸70cm、深さ約90cmを測り、南側の側面は



第35図 033号住居跡・カマド実測図

周溝に取りついている。カマドは北壁中央に位置する。遺存状態は良好である。主軸方位はN-0°で、真北を向いている。壁外へは約30cm掘り込み、全長約1m、幅約1.3mを測る。底面の掘り込みは焚口から燃焼部に浅く施されており、床面からの深さは最大5cmを測り、また燃焼部奥へ煙道部にかけて周溝の幅を広げている。袖部は長さ約60cm、床面からの高さ約10~20cmを測る。構築材はローム粒を含む灰白色土を主体とする。焚口~燃焼部底面直上は焼けて赤色に硬化しており、直上には焼土粒・塊を多量に含む赤褐色土が堆積し、その上には焼土粒を多量に含む黒褐色土が堆積していた。煙道部に焼土粒・炭化物粒を微量含む暗褐色土が堆積しており、約75度で立ち上がる。

遺物は、北側にややまとまって土器が出土した。覆土上層から出土したものが多く、本住居跡に確実に伴うと断定できるものはない。

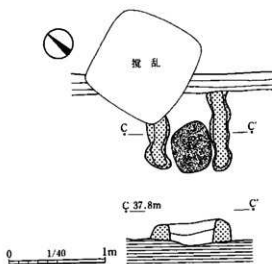
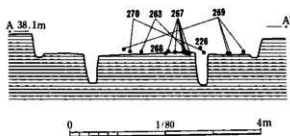
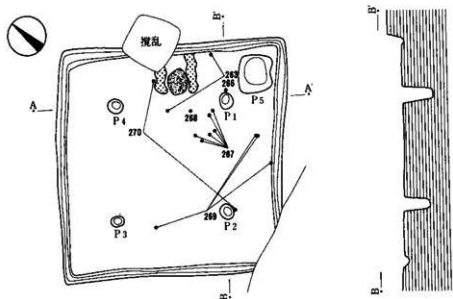
034号住居跡（第36図、図版11）

北区北西部、7D-08・09・17・18・19・28・29・38、7E-00・10・20に位置し、南に面する斜面に立地する。近現代の土坑状の攪乱に北東壁とカマドの一部を破壊され、南側コーナーは010号溝によって切られている。規模は北東壁で4.7m、北西壁で4.8mを測り、方形を呈する。主軸方位はN-53°-W。覆土は暗褐色土を主体とする。床面はハードローム層で、特にP1~P4を囲む部分一帯が堅く踏み締められていた。壁高は北東壁で33cm、南東壁で16cm、南西壁で19cm、北西壁で34cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝は検出部分では全周しており、最大幅40cm、深さ4cmを測る。ピットは5か所検出された。主柱穴はP1~P4で、径10~36cm、深さは約60cmを測り、ほぼ均一な掘り方である。柱間寸法はP1-P2・P2-P3・P4-P1が2.3m、P3-P4が2.4mを測り、配置はほぼ正方形を呈する。P5は東側コーナー下に位置する貯蔵穴で不整形を呈し、規模は最大長辺の北西辺で約80cm、深さ約60cmを測る。カマドは北東壁中央に位置する。左袖壁付近は攪乱によって、破壊されていた。主軸方位はN-53°-Wで、北東壁にほぼ直交して構築されており、住居跡のそれと同じである。壁外への掘り込みはなく、右袖部は壁面に取りついていない。全長約80cm、幅約90cmを測る。焚口から燃焼部にかけては浅く掘り込まれている。袖部は山砂を用いて構築されており、長さ約80cm、高さは約25cm遺存していた。燃焼部の底面は赤色に硬化しており、直上には焼土粒を含む黒褐色土、その上には焼土を含む暗褐色土が堆積していた。

遺物は、住居跡西側から土器がまとまって出土した。床面直上から出土したものがほとんどで、本住居跡に伴うものと考えられる。

035号住居跡（第37図）

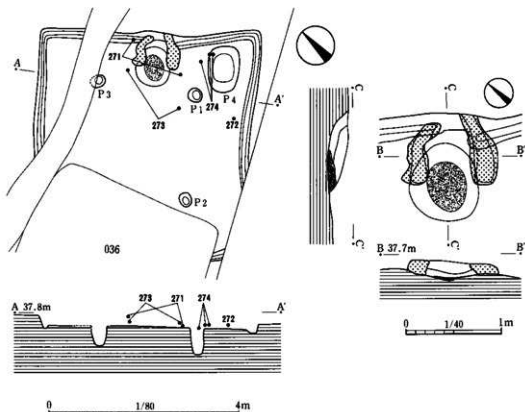
北区北西部、7E-11・21・22・31・32・33・41・42に位置し、南東に面する斜面に立地する。南側コーナーは調査区域外に及んでおり調査できず、西側1/3は036号住居跡、北東壁と北西壁の一部が東西方向に走る010号溝によって切られていた。規模は北東壁で4.6mを測り、方形を



第36図 034号住居跡・カマド実測図

呈する。主軸方位はN-43°-E。覆土は暗褐色土を主体とする。床面はハードローム層で全体に軟弱であった。壁高は北東壁で13cm、南東壁で14cm、北西壁で24cmを測り、約75度で立ち上がる。周溝は検出部分ではカマド内を除いて全周しており、最大幅20cm、深さ5cmを測る。ピットは4か所検出された。主柱穴はP1~P3で、径約30cm、深さは約40~58cmを測る。柱間寸法はP1-P2が2.2m、P2-P3が3.0mを測り、配置は西側の1か所が未検出のため不明である。P4は東側コーナー下に位置する貯蔵穴で、縦長の隅丸方形を呈し、規模は長軸約1.0m、短軸約70cm、深さ50cmを測る。カマドは北東壁ほぼ中央に位置する。主軸方位はN-43°-Eで、住居跡のそれと同じである。壁外への掘り込みはなく、左袖部は壁面に取りついていない。規模は全長約1.1m、幅約1.0mを測る。焚口から燃焼部にかけて径約80cm、深さ最大12cm、不整形円形に掘り込まれていた。袖部は暗褐色土を含む山砂を構築材としていた。左袖部は壁面から約10cm離れて構築されており、長さ約60cm、高さは約15cm遺存しており、右袖部は壁からの長さ約70cm、高さは約10cm遺存していた。焚口~燃焼部の底面は赤色に硬化しており、直上には焼土が堆積しており、ほかは暗褐色土が主体であった。煙道部は約50度で立ち上がる。

遺物は住居跡北東側、カマド周辺から土師器片がまばらに出土した。覆土下層から出土した

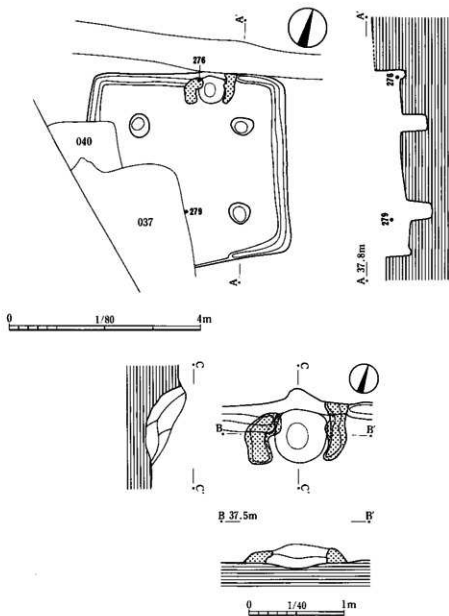


第37図 035号住居跡・カマド実測図

ものが多く、一括遺物と考えられる。

036号住居跡（第38図）

北区北西部、7D-38・39・48・49、7E-30・31・40・41・51に位置し、南東に面する斜面に立地する。南西側1/3は037号住居跡・040号住居跡に、また東西方向に走る010号溝に北壁とカマド煙道部の上面が切られていた。規模は北壁で4.0m、東壁で3.5mを測り、方形を呈する。主軸方位はN-48°-E。覆土は暗褐色土を主体とする。床面はハードローム層で、全体に堅緻



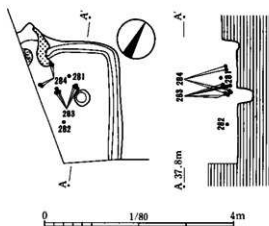
第38図 036号住居跡・カマド実測図

であった。壁高は北壁で58cm、東壁で51cm、西壁で45cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。周溝は検出部分ではカマド内と南壁の一部を除いて施されており、最大幅40cm、深さ6cmを測る。ピットは主柱穴が3か所検出された。P1～P3は径約45cm、深さは約43～58cmを測る。柱間寸法はP1-P2が1.8m、P3-P1が2.2mを測り、配置は南西側の1か所が未検出のため不明である。カマドは北壁中央から東寄りに位置する。壁外への掘り込みは上面が溝跡によって削平されていたが、確認面で約15cmを測る。主軸方位はN-48°-Eで、住居跡のそれと同じである。規模は全長約80cm、幅約1.1mを測る。焚口から燃焼部にかけて径約60cm、深さ約5cm楕円形に掘り込まれている。袖部は暗褐色土・ローム塊を含む山砂を用いて構築されており、左袖部は壁からの長さ約50cm、高さは約10cm遺存していた。右袖部は壁からの長さ約60cm、高さは約15cm遺存していた。燃焼部の直上には焼砂粒を多量に含み、炭化物粒を少量含む暗褐色土が堆積していた。それ以外は山砂を含む暗褐色土が堆積していた。煙道部は約50度で立ち上がる。

出土遺物は少なく、カマド中から出土した、土師器坏(276)のほかは確実に本住居跡に伴うと考えられるものはない。

037号住居跡(第39図)

北区北東部、7D-49・59、7E-40・50に位置する。ほとんどが調査区域外に及んでおり、北側約1/4しか調査することができなかった。規模は全辺検出された壁面がないため不明だが、カマドを北西壁の中心とすれば、一辺約1.8mの住居跡と考えることができる。主軸方位はN-30°-W。覆土は暗褐色土を主体とする。床面はハードローム層で、全体的に軟弱であった。壁高は北西壁、北東壁とも36cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝は検出部分ではカマド内を除き全周している。最大幅36cm、深さ約7cmを測る。ピットは1か所検出された。P1は径約33cm、深さ7cmを測る比較的しっかりとした掘り方で、主柱穴と考えられるものである。柱間寸法及び配置は不明である。カマドは北西壁に位置する。南西側約1/2は調査区域外に及んでおり、主



第39図 037号住居跡実測図

軸方位は不明。壁外に約40cm掘り込み、全長約90cmを測る。右袖部は壁から約80cm、床面からは約70cmの高さで遺存し、暗褐色土を含む山砂を主材としている。燃焼部底面は赤色に硬化しており、直上には焼砂粒・炭化物を多量に含む暗褐色土が堆積していた。煙道部は約45度で立ち上がる。

遺物は、カマド東側手前を中心としてまばらに土器が出土した。覆土上層ないしは中層から出土したものが多く、本住居跡に伴う可能性は低い。

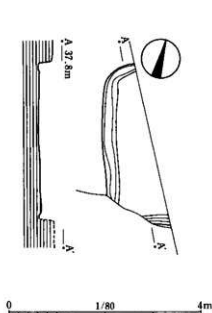
039号住居跡（第40図）

北区北部、7E-03・13・14に位置する。南に面する斜面に立地する。北東側は調査区域外にかかっており調査できず、南西コーナーは溝跡に切られていた。規模は全辺調査された壁面がないため不明だが、南西壁は約3.0m前後を測ると推測され、方形を呈すると考えられる。主軸方位はカマドが検出されないため不明だが、南西壁はN-19°-W方向を向いている。覆土はローム塊を含む暗褐色土が主体であった。床面はハードローム層で堅緻であった。壁高は北西壁で25cm、南西壁で40cmを測る。周溝は未検出部分を除いて全周しており、最大幅30cm、深さ8cmを測る。ピットは検出されなかった。

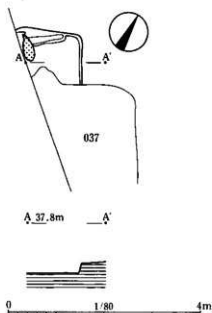
遺物は、土師器がまばらに出土した。坏（285）は覆土中から出土したものである。

040号住居跡（第41図）

北区北東部、7D-48・49に位置する。ほとんどが調査区域外に及んでおり、南東側は037号住居跡に切れ、北側コーナーを中心とした部分しか調査することができなかった。規模は全



第40図 039号住居跡実測図



第41図 040号住居跡実測図

辺検出された壁面がないため不明。主軸方位は北東壁はN-30°-W方向に向いている。覆土は暗褐色土を主体とする。床面はハードルーム層で全体的に軟弱であった。壁高は北西壁が70cm、北東壁とも20cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝は北西壁に部分的に検出され、最大幅20cm、深さ約2cmを測る。カマドは北西壁に位置する。南西側約1/3は調査区域外に及んでおり、右袖部を中心とする部分を検出した。主軸方位は不明。検出部分で壁外に約20cm掘り込む。右袖部は壁から約50cm、床面からは約15cmの高さで遺存し、山砂を主材としている。燃焼部底面直上には焼土粒を多量に含む暗褐色土が堆積していた。

遺物は、覆土中からわずかに出土したが、全て細片で図示できるものはなかった。

2. 遺物

001号住居跡（第42・43・62図、図版18・39）

本住居跡では土師器坏3点、鉢1点、壺8点、土製支脚1点を図示した。土師器坏(1~3)は、口縁部と体部との境に稜を有さず内傾するもの(1)、ほぼ直立するもの(2)、口縁部と体部との境に稜を有し弱く外反するもの(3)があり、1・2には内外面赤色塗彩が施されるが、1は見込に⊖状の赤彩が施されている。4は鉢で体部と口縁部の境に稜を有し、内外面赤彩がなされている。5・6は器高が低い壺で口縁部が肥厚し、6は口唇部で丸く凸帯状に巡っている。7は体部下半から欠損しているが、6と同様の器形である可能性が高い。8~10は球胴と長胴の中間の楕円形の胴部をもつ壺で、9はやや内傾気味に立ち上がり口唇部は外反する。10の胴部は下膨れの形態をとり、器内が厚く胎土も粗雑である。11・12は壺の底部で、11は球形を呈すると思われる。体部外面はひじょうに荒れている。

002号住居跡（第43~45図、図版19・20・21）

出土遺物は多く、土師器坏18点、高坏2点、壺9点、甗2点を図示した。土師器坏(13~30)は、体部と口縁部との境に稜を有さず、口唇部が内傾するもの(13・14)、体部と口縁部との境に明確な稜を形成し、口縁部が内側に屈曲するもの(15~24)、体部と口縁部との境に稜を有し、直線的に外傾するもの(25~29)、体部と口縁部との境がなく、やや外反する短い口縁部をもつもの(30)がある。23・30を除く坏には内外面赤色塗彩が施され、14は見込に⊖状の赤彩がなされている。16は底部に赤色料が不規則な点状に附着している。15は底部中央に焼成前の線刻がなされている。25は底部に鋭利なものを研磨した痕と思われる焼成後の削痕が認められ、体部内面の器面も荒れている。29は口縁部の中位に段を有する。31・32は高坏で、両方とも胴部は欠損しており、赤彩がなされている。31は体部と口縁部との境に明確な稜を形成し、外反する口縁部をもつ。32の口縁部は弱く内傾する。33~44は壺で、33・34は口径に比して胴部が球形に張る壺で、34は胴部下位で屈曲する。35・36は小形の壺である。37は広口で直立する口縁部を持ち、球形の胴部には25の坏と同様な焼成後の削痕が認められる。38~44は底部破片であ

る。42・43は甕で、42は胴がやや張る形態のものであるが、最大径は口縁部に有する。

004号住居跡（第45・46・62図、図版22・23・39）

出土遺物は多く、土師器環10点、高坏2点、甕6点、須恵器蓋2点、土製勾玉1点、土製支脚1点を図示した。土師器環(44~53)は、半球形の体部に直立する口縁部が付されるもの(44)、口縁部が「く」の字形に内側に屈曲するもの(45・46)、体部と口縁部の境に稜を有し、口縁部が外傾するもの(47~51)、浅い体部に外傾気味の短い口縁部をもつもの(52・53)がある。44・47には赤彩がなされており、45・49には口縁部外面~体部内面、51~53には体部内面にそれぞれヘラミガキが加えられている。また、49は漆仕上げ、51は内面黒色処理が施されている。54・55は高坏で、54の口縁部は外方に大きく開く大型のもので、外面は赤彩、内面はヘラミガキが加えられ、黒色処理がなされている。55は口縁部を欠損するが、体部との境には稜を有し、内面にはヘラミガキが施されている。56・57は須恵器蓋で、56は体部外面中位より上は回転ヘラケズリが施され、沈線を有する。口唇部はやや内側につままれている。胎土は小石を含む粗雑なものである。57は口縁部と体部との境が屈曲し、屈曲点より上位には回転ヘラケズリがなされている。また、内面には巻き上げ痕が認められる。58~63は甕で、58~60は胴の張らない小・中型のもの、61は球形の胴部のもの、62・63は最大径を胴部中位に有する中胴の甕である。

005号住居跡（第46・47図、図版22・23・24）

出土遺物は多く、土師器環11点、高坏4点、鉢2点、甕3点を図示した。土師器環(64~74)は、口縁部が短く直立するもの(64)、体部と口縁部の境に稜を有し内傾するもの(65~68・70~71)、体部と口縁部の境に弱い稜を有し、外傾するもの(69)、体部と口縁部の境に稜を有し、外傾するもの(72)、体部と口縁部との境を下位約1/3に有し、口縁部は内湾しながら立ち上がるもの(73)、平底で口縁部が内傾するもの(74)がある。そのうち64・66・68・72は、内外面赤彩がなされている。65・69~71・73は口縁部~体部内面にヘラミガキが加えられて、65・70・71・73は漆仕上げがなされている。75・77~79は高坏である。75は体部と口縁部との境に稜を有し、口縁部が大きく開くもので、外面は赤彩、内面はヘラミガキが加えられ、黒色処理がなされている。77・78は脚柱部、79は脚端部の破片であり、内面に巻き上げ痕が明瞭に観察される。80・81は鉢で、80は上外方に開く体部に外反気味に開く口縁部をもつものであり、81は体部と口縁部との境に稜を有し、口縁部は内側に「く」の字形に屈曲し、後外反するものである。82~84は甕で、82・83とも小形と考えられる。84は底部破片である。

006号住居跡（第47図、図版23・24）

本住居跡は土師器環1点、須恵器蓋1点、坏1点を図示した。85は土師器環で、平底の底部から弧状に開く体部をもつもので、内面は丁寧なヘラミガキがなされている。86はかえりを有する須恵器蓋で、体部上半3/4に回転ヘラケズリが施され、つまみは中央部が突出するリング状を呈する。かえりは口唇部より下方に突出しない短いものである。87は口径10.5cmを測る小

振りの須恵器環で、底部はヘラ切り後、やや雑な回転ヘラケズリが施されている。

007号住居跡（第47図、図版23・24）

本住居跡では、土師器環3点、鉢1点、高坏1点、甕1点を図示した。土師器環（88～91）は、体部と口縁部との境に稜を有し、口縁部が内傾するもの（88）、外傾するもの（89・90）がある。89は内面にヘラミガキが加えられ、91は内外面赤彩がなされている。91は鉢で、底部は平底、体部と口縁部との境には弱い稜を有する。92は高坏の脚柱部の破片、93は甕の底部破片である。

008号住居跡（第47・48図、図版23・24・25）

本住居跡では、土師器環5点、高坏1点、甕3点を図示した。土師器環（94～98）は全て内外面赤彩がなされており、体部と口縁部との境がなく口縁部が直立するもの（94・95）、体部と口縁部との境に稜を有し口縁部は直立気味に立ち上がり、その後外傾するもの（96～98）がある。96・97は口縁部の立ち上がり器高の1/2以上を占めている。99は高坏の脚柱部である。100・101は胴部に最大径を有する甕で、102は球形を呈する甕である。

009号住居跡（第48図、図版24・25）

本住居跡では土師器環1点、高坏2点、甕2点、甗1点を図示した。103は弧状の体部から口縁部が短く直立する土師器環で、内外面に横方向のヘラミガキを加え、漆仕上げを行なっている。104は体部と口縁部との境に稜を有する高坏で、内面黒色処理、外面赤彩がなされている。105は高坏の脚柱部で、脚部と体部との境に段を有する。106・107は小形の甕である。108は甗の開口部破片である。

010号住居跡（第48・62図、図版24・25・39）

本住居跡では、土師器環2点、高坏3点、ミニチュア土器1点、甕1点、土製支脚1点を図示した。土師器環（109・110）は赤彩が施され、口縁部が内傾気味に直立するもの（1）、体部と口縁部との境に稜を有し、一旦直立して立ち上がり、その後内湾しながら外方に開くもの（110）がある。111～113は土師器高坏であり、3点とも赤彩がなされている。111は口縁部と体部との境に弱い稜を有し、口縁部が逆「ハ」の字形に開くものである。112は口縁部が内傾気味に直立する。113は脚部の破片で、脚柱部と脚端部との境が強く屈曲するものである。114はミニチュア土器の底部破片である。甕（115）は口縁部が外傾気味に直立するもので、胴部外面には指頭痕が顕著に認められる。

012号住居跡（第48・49・62図、図版24・25・39）

本住居跡では、土師器環6点、高坏2点、甕4点、甗2点、土製支脚1点を図示した。土師器環（116～121）は、口縁部が内傾するもの（116・117）、外反するもの（118～120）、ほぼ平底で、体部と短い口縁部との境に沈線状の稜を有するもの（121）があり、それぞれ形態差が著しい。なお、116の底部には木葉痕が認められ、121以外は全て赤彩がなされている。122・123

は高坏で、122の口縁部は外傾する。124～127は甕である。124は口縁部が強く外反するもので、胴部が張るものと考えられる。125は長胴形を呈する。126は胴部中位で「く」字形に屈曲して張るもので、胴部はそろばん玉形を呈し、口縁部は中位まで直立し、後外傾する。127も胴部が張る形態の甕である。128・129は甕である。128は口縁部～胴部が直線的なもので、口縁部内面は肥厚し、口唇部は折り返し状になっている。129は口縁部が内傾して、外反する「く」字形を呈するもので、最大径を胴部上位にもつ。

013号住居跡（第49・50図、図版25・26）

本住居跡では、土師器坏4点、鉢1点、甕3点、甗1点を図示した。土師器坏（130～133）は、口縁部が内傾するもの（130）、体部と口縁部との境に稜を有し、内傾するもの（131）、体部と口縁部との境に稜を有し、直線的に外傾するもの（132・133）、体部と口縁部との境に稜を有し、外傾しながら立ち上がるもの（132・133）がある。131～133はヘラミガキが加えられ、漆仕上げがなされている。134は鉢で、口縁部は内傾気味に直立する。136は器肉が厚く胴の張る甕、135は長胴形の小形甕である。137は胴の張る甕の底部で、内面は荒れており調整技法は不明である。138は最大径を口縁部に有する甕で、大形のものである。

014号住居跡（第50図、図版26）

出土遺物は少なく、土師器甕1点のみを図示した。139は「く」の字形に胴が張る甕で、外面はヘラケズリ後丁寧にナデられている。

016号住居跡（第50・64図、図版26・39）

出土遺物は少なく、土師器坏1点、刀子1点のみか図示できなかった。140は内外面赤彩が施されており、体部と口縁部との境に稜を有し口縁部は内傾気味に立ち上がり、その後屈曲し、外方に伸びるものである。

017号住居跡（第50～53・62図、図版26・27・28・29・39）

本住居跡では土師器坏4点、高坏4点、鉢2点、甕13点、甗1点、土製支脚1点を図示した。土師器坏（141～144）は、口縁部が短く内傾するもの（141）、半球形のもの（142）、体部と口縁部との境に稜を有し、内傾気味に直立するもの（143）、内傾するもの（144）がある。145～148は高坏である。145は坏部破片で、内面はヘラミガキ、黒色処理がなされ、外面は赤彩がなされる。146～148は脚部で、146・147は端部がふんばる形態のもので、内面黒色処理、外面赤彩がなされており、148は内面に巻き上げ痕が明瞭に観察される。149・150は鉢である、149は最大径を体部上半にもち口縁部が直立するもの。150は口縁部が外反するもので、底部中央に焼成後の穿孔がなされている。151～163は甕である。151～153は口径に比して胴が張る球胴形の甕である。154は中胴形の甕、155・156は胴部と口縁部の境が強くナデられ、段をもつ甕で、156は特に顕著である。158は長胴の甕で、胴部と口縁部との境に稜がなく、口縁部はラッパ状に開いている。159～161は小形の甕で、159は口縁部が折返し状になっており、その直下までヘラケズ

りがなされている。162・163は底部破片である。164は甗で、最大径を口縁部に有し、砲弾形を呈する。

018号住居跡（第53図、図版28・29）

出土遺物は少なく、須恵器蓋1点しか図示できなかつた。165は頂部付近の破片で、外面は手持ちヘラケズリがなされ、胎土は長石粒・雲母粒を多量に含むものである。

019号住居跡（第53・54・62図、図版28・29・39）

本住居跡では、土師器坏7点、高坏2点、鉢1点、甕7点、甗1点、土製支脚1点を図示した。土師器坏（166～172）は、口縁部が短く内傾するもの（166・167）、体部と口縁部との境に稜を有し、内傾するもの（168～170）、直立するもの（171）、外反するもの（172）がある。167は赤彩、166・169・170・171・172はヘラミガキが加えられ、166・169・172は漆仕上げがなされる。173・174は高坏で、両方とも口縁部は直立し、内面ヘラミガキ・黒色処理、外面赤彩がなされる。175の鉢は平底で、口縁部が直立するものである。176は長胴の甕、177は中胴の胴部に口縁部が短く直立するもので、壺と呼ぶべきものかもしれない。178は胴の張る甕、179は小形の甕である。180～182は甕の底部破片である。183は開口部端部を欠く甗で、口縁部は外反する。

020号住居跡（第54・55図、図版29・30・31）

本住居跡では須恵器高坏1点、土師器鉢1点、甕5点、甗2点を図示した。184は須恵器高坏の脚部破片で、薄手なものである。土師器鉢は平底で丸みをもった体部に外傾する口縁部をもつもので、焼成が甘く、遺存状態は不良である。186～190は甕で、186は胴部が張る球胴形のもの。188・189は胴部が丸みをもったやや小形のものである。189・190は底部破片である。191・192は甗で、191は胴部と口縁部との境に稜を有し、砲弾形を呈し、最大径は口縁部に有する。192も最大径を口縁部に有するが、胴部がやや張る形態のものである。

023号住居跡（第55図、図版30・31）

本住居跡では、土師器3点、甕1点、甗1点を図示した。土師器坏（193～195）は3点とも赤彩され、口縁部が外反気味に直立するもの（193）、明確な稜を形成し外反するもの（194）、直線的に外傾するもの（195）がある。土師器甕（196）は胴が張り、口縁部中位に段を有する。197の甗は、比較的薄手で、逆「ハ」の字形を呈する。

024号住居跡（第55・56図、図版30・31・32）

出土遺物は多く、土師器坏8点、高坏1点、ミニチュア土器1点、手捏ね土器1点、壺1点、甕5点、鉢1点を、甗1点図示した。土師器坏（197～205）は、全て内外面赤色塗彩が施され、口縁部が短く直立する半球形のもの（198）、口縁部が内傾気味に直立するもの（199）、体部と口縁部との境に稜を有し、内傾気味に立ち上がり、その後直立するもの（200）、体部と口縁部との境に稜を有し外反するもの（201～255）がある。204は見込に臼状の赤彩が施されている。205

は口径が16.3cmとほかのものよりも大形である。206は高坏で赤彩され、「ハ」の字形に開く脚端部に半球形の体部をもち、体部と口縁部の境がくびれて外傾しながら立ち上がるものである。207はミニチュア土器で、口縁部～体部はナデで整えられ、口唇部は丸く肥厚する。内外面赤彩がなされている。209は小形の壺で、口唇部直下までヘラケズリが加えられ、やや粗雑な作りである。210～214は土師器甕で、胴部が球形を呈するものである。215は鉢で、215は「く」の字状に張る胴部に短く直立する口縁部をもつもの。216はかなり大形のもので、体部の上位が張り、口縁部は外反する。

025号住居跡（第57・58図、図版32・33・34）

出土遺物は多く、土師器坏7点、高坏3点、埴1点、鉢1点、甕8点を図示した。土師器坏（217～223）は、体部が扁平で口縁部が短く直立するもの（217）、器高が高く体部が深みをもち、口縁部が内傾するもの（218～219）、体部と口縁部との境に稜を有し、直立気味に立ち上がるもの（220）、体部と口縁部との境に稜を有し、直立気味に立ち上がり、その後外反するもの（221～223）がある。全て赤彩がなされるが、222・223は見込に㊦状の赤彩が施されている。224～226は高坏で、224は脚部を欠くが大形で、口縁部の開きが極端に大きいことから高坏と判断したものである。225は「ハ」の字状の脚端部をもち、口縁部は外傾気味に直立する。226は厚手の体部で、口縁部が外方に屈曲するものである。227は埴の口縁部で、赤彩がなされ、体部と口縁部の境は「く」の字形に屈曲し、粘土紐の巻き上げ痕が観察される。228は鉢で、体部は丸味をもち、口縁部は外反気味に直立する。229～234は甕で、229の口縁部は外傾気味に直立し、230は体部と口縁部の境が凹線状に「く」字形にくびれている。231は長胴の甕となるであろう。232・234は胴の丸く張る甕である。234は底部破片である。

026号住居跡（第58・63・64図、図版34・39）

本住居跡では、土師器甕2点、鉢1点、砥石1点、鎌1点を図示した。235・236は土師器甕で、235は口縁部が強く外反し胴が張るもので、口縁部内面～体部外面はナデの後、ヘラミガキが加えられている。胎土は砂を含まない緻密なものである。236は小形の甕で、粘土紐の巻き上げ痕が観察される。237は「ハ」字状を呈する鉢で、口縁部がやや外反する。

030号住居跡（第58・62図、図版34・39）

本住居跡では、土師器坏2点、高坏1点、壺1点、甕2点、土製支脚1点を図示した。土師器坏は体部と口縁部との境に稜を有し、口縁部が内傾し、体部内面にヘラミガキが加えられ内面黒色処理が施されるもの（238）、口縁部がほぼ直立し、内面にヘラミガキが加えられるもの（239）がある。240は高坏の坏部で、外面赤彩、内面ヘラミガキ及び黒色処理がなされている。241は小形の壺で、体部は外傾気味開き明確な稜を形成し、口縁部は外反気味に立ち上がる。口縁部には直径約8mmの焼成後の穿孔がなされており、その孔と口縁部の間は細い溝状に削れており、紐を通していた痕跡と思われる。また内面は赤彩が認められるが、赤色の塗料を入れて

いた可能性もある。242・243は甕で、胴がやや張る長胴と球胴の中間的な形態のものである。

032号住居跡（第58図、図版34）

出土遺物は少なく、土師器坏1点、甕1点を図示できたのみである。土師器坏（244）は口縁部を欠くが体部は半球形を呈する。245は小形の甕の底部破片である。

033号住居跡（第59図、図版34・35）

本住居跡では、土師器坏11点、高坏1点、鉢1点、須恵器蓋1点、甕3点を図示した。土師器坏（246～256）は体部が扁平で口縁部は短く直立するもの（246～248）、内傾気味に立ち上がるもの（249）、体部と口縁部との境に稜を有し内傾するもの（250・251）、器高に比して口縁部の占める割合が大きく、口縁部が内湾気味に外傾するもの（252～253）、体部と口縁部の境に稜を有し外傾するもの（254～256）がある。246・250～253は漆仕上げがなされ、特に251・252は器形を除いてひじょうによく似ており、同時に製作されたものと考えられる。255は見込に⊕状の赤彩が施されている。257は須恵器蓋で、上部は回転ヘラケズリが施される。258は高坏脚柱部の破片、259は体部が直立する鉢である。260～262は甕で、260は口縁部が外反する小形の甕、261は口縁部が直立して後、外下方に強く屈曲する甕である。262は口唇部が上外方につまみあげられ段を作出する甕で、胎土中に長石粒・雲母粒を多量に含むことから「常総型」甕と判断した。

034号住居跡（第59・60図、図版34・35・36）

本住居跡では土師器高坏3点、甕5点を図示した。高坏（263～265）は、263は脚端部が上方に反りかえり、体部下半で上外方に直立気味に開き口縁部が内傾気味に立ち上がり、内外面赤彩がなされる。264は逆「ハ」の字形を呈する高坏で、体部と口縁部との境に段を有する。265は脚端部破片で、粗いヘラミガキが施されている。266～270は甕で、266・267は小形、268・270は胴部が張る球胴の甕である。

035号住居跡（第60図、図版35・36）

本住居跡では、土師器坏1点、鉢1点、甕2点を図示した。土師器坏（271）は内外面赤彩され、扁平な体部から口縁部が内傾気味に直立するものである。272は鉢で、底部から直立気味に立ち上がる箱形を呈するものである。273・274は甕で、273は胴部がやや丸みを持ち、口縁部はほぼ直立するもので、274は球胴の甕になると思われる。

036号住居跡（第60・61図、図版35・36・37）

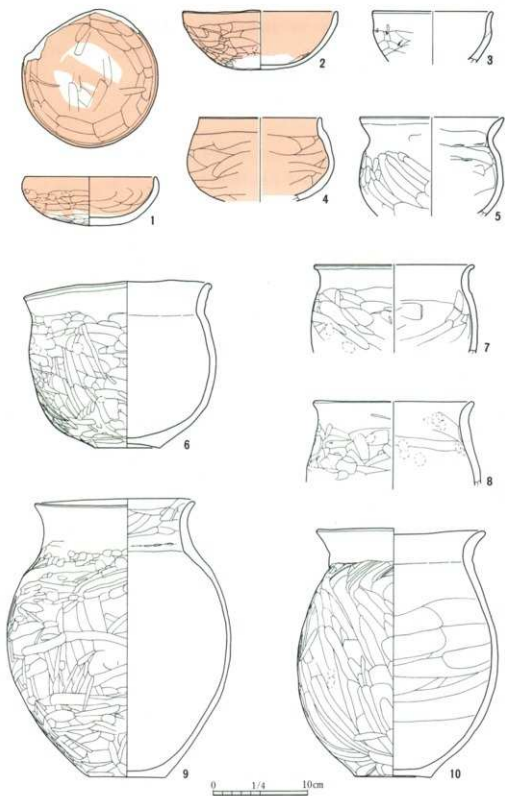
出土遺物は少なく、土師器坏3点、甕2点を図示した。土師器坏（275～277）は口縁部が内傾するもの（275）、体部の中位で屈曲し、外傾しながら開くもの（276・277）がある。275は赤彩される。278はやや薄手で口唇部に巻き上げ痕を残す甕、279は甕の底部～胴部下半破片である。

037号住居跡（第61図、図版37）

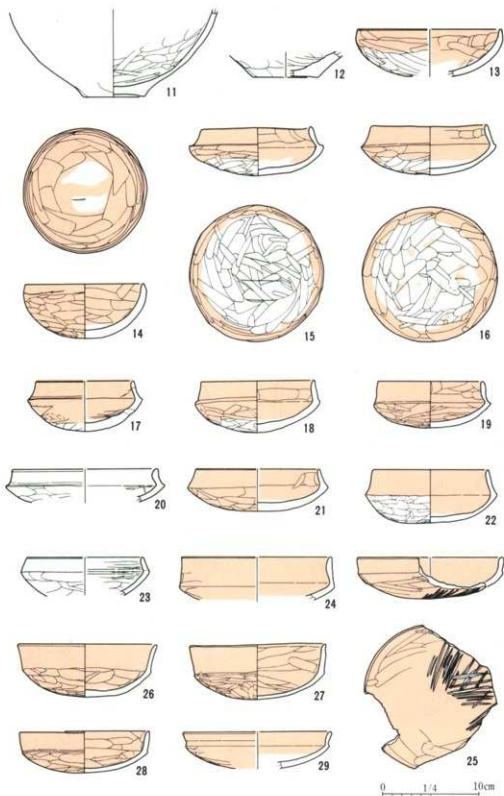
本住居跡では、土師器坏2点、須恵器坏1点、高坏1点、甕2点を図示した。土師器坏(280)は小形で半球形を呈する。須恵器坏(281)は底部は平底で、ヘラ切り後回転ヘラケズリが施される。282の高坏の脚柱部で、端部は擦れている。283・284は甕で、283は口縁部が外方に屈曲し、胴部下半に縦方向のヘラミガキが加えられる。284もヘラケズリ後、縦方向のヘラミガキが施され、両方とも「常総型」甕と捉えられる。

039号住居跡(第61図、図版37)

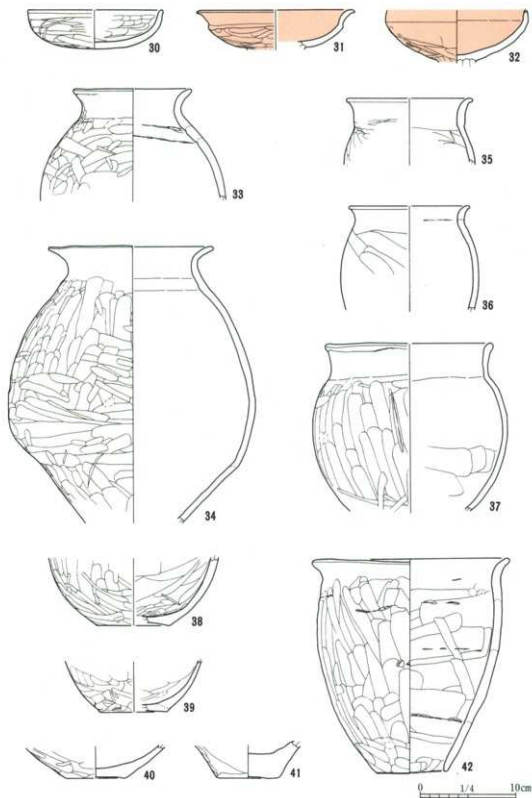
出土遺物は少なく、土師器坏1点のみしか図示できなかった。土師器坏(285)は体部が半球形で、口縁部は短く直立する。外面には巻き上げ痕が顕著に残されている。



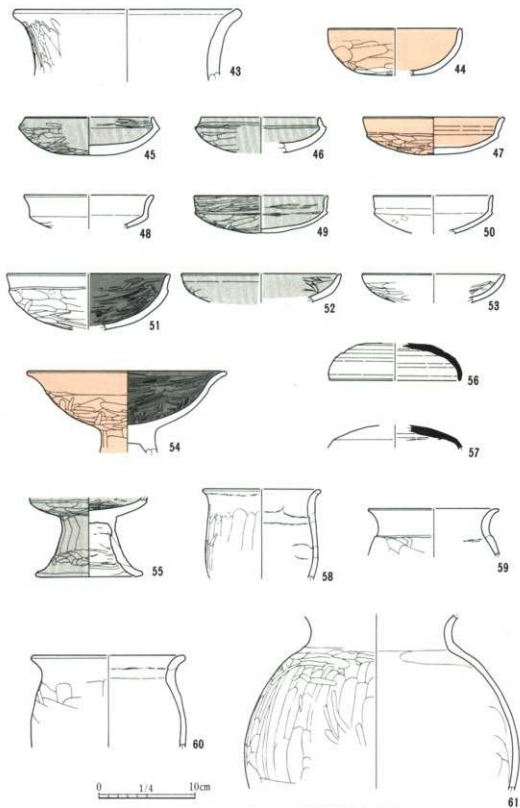
第42图 001(1~10)号住居跡出土土器



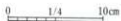
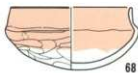
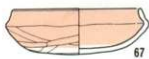
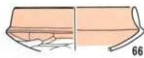
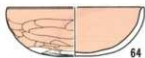
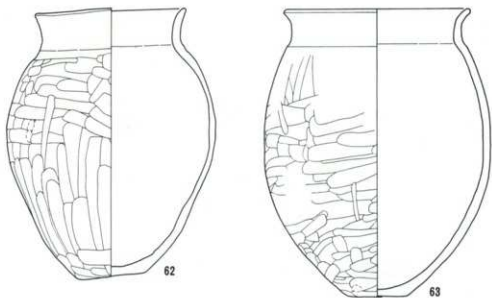
第43图 001(11~12)·002(13~25)号住居跡出土土器



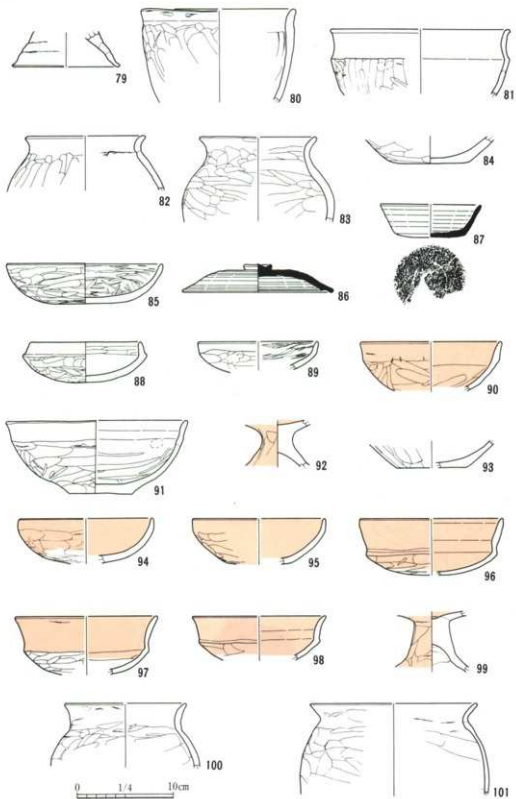
第44图 002(30~42)号住居跡出土土器



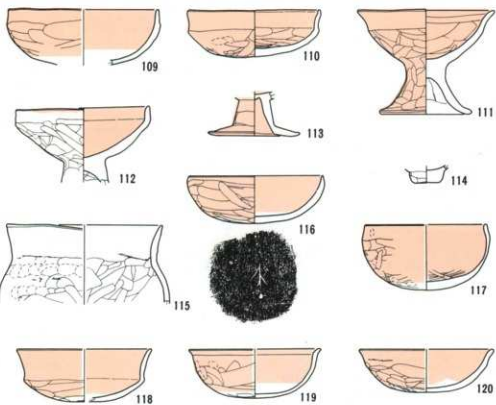
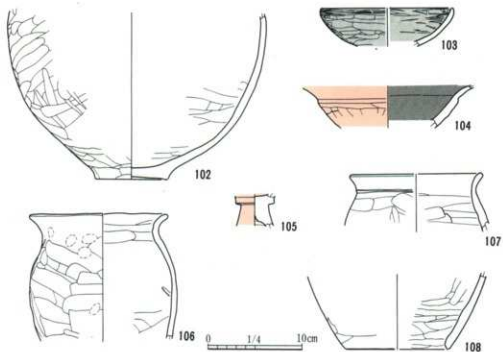
第45图 002(43)·004(44~61)号住居跡出土土器



第46图 004(62·63)·005(64~78)号住居跡出土土器



第47图 005(79~84)·006(85~87)·007(88~93)·008(94~101)号住居跡出土土器



第48图 008(102)·009(103~108)·010(109~115)·012(116~120)号住居跡出土土器



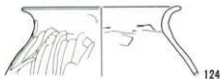
121



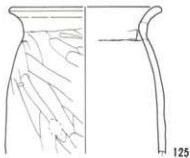
122



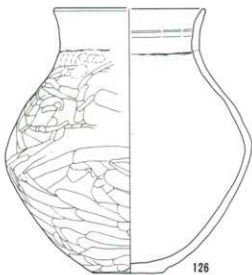
123



124



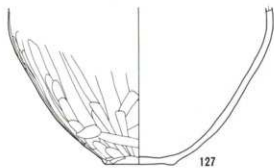
125



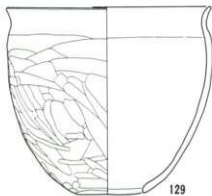
126



128



127



129



130



131

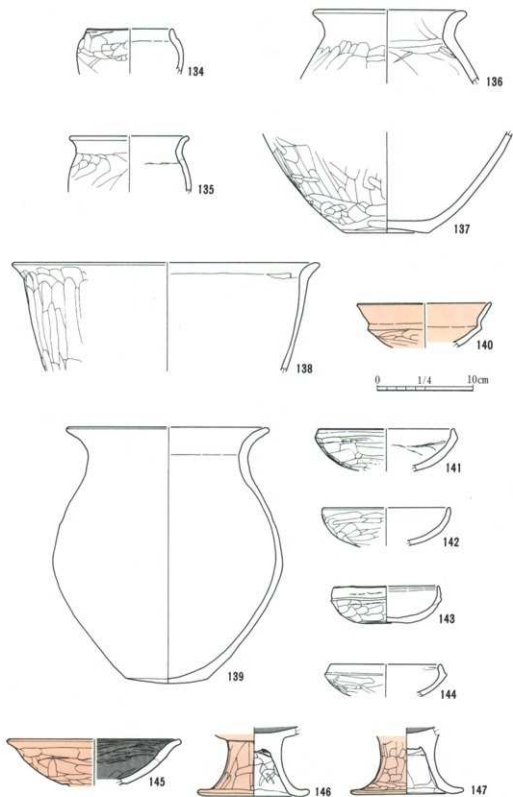


132

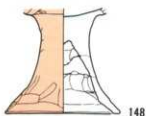


133

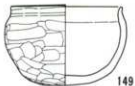
第49图 012(121~129)·013(130~133)号住居跡出土土器



第50图 013(134~138)·014(139)·016(140)017(141~147)号住居跡出土土器



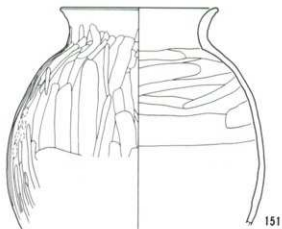
148



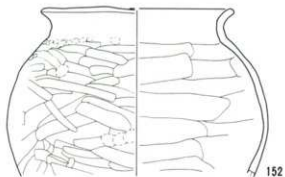
149



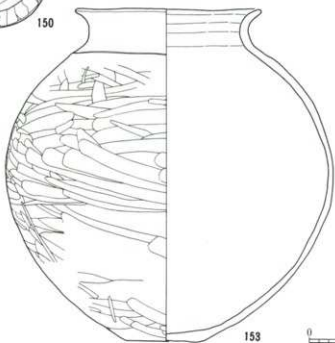
150



151



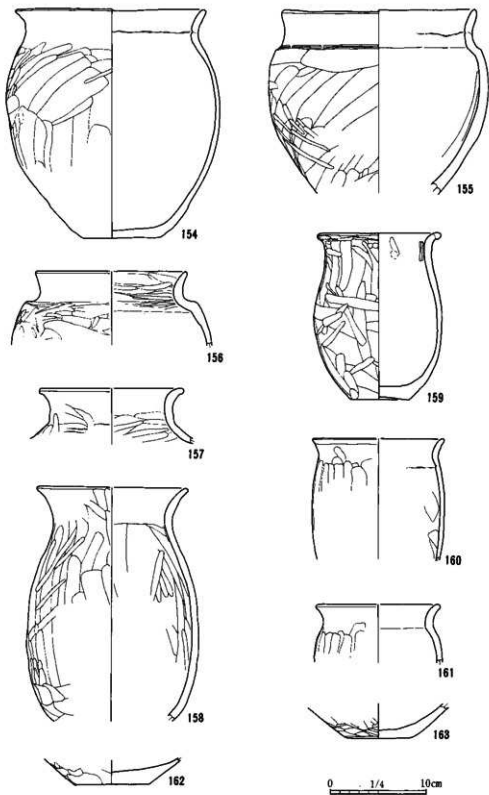
152



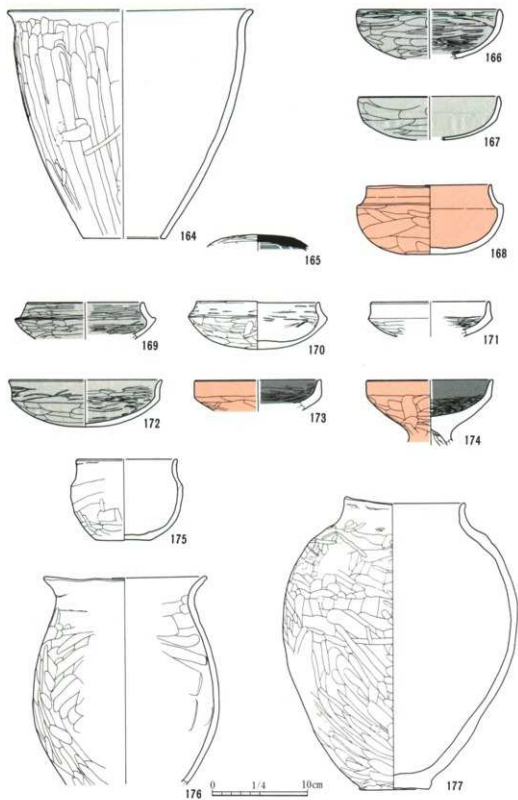
153

0 1/4 10cm

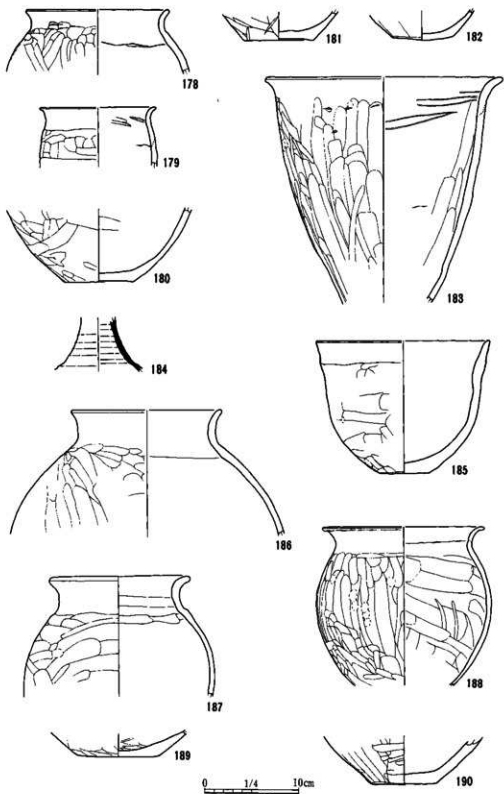
第51图 017(148~153)号住居跡出土土器



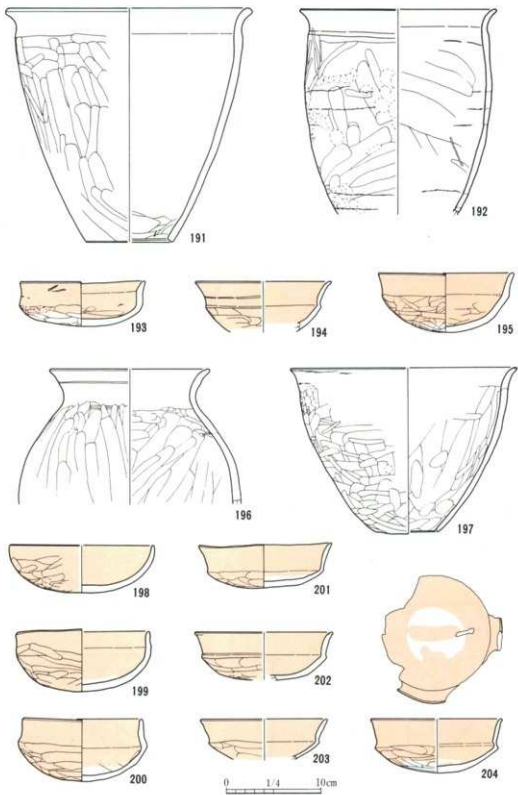
第52图 017(154~163)号住居跡出土土器



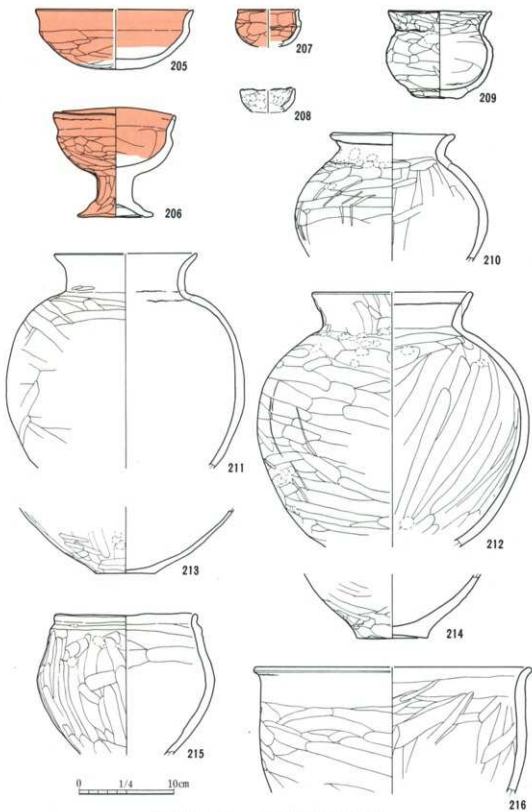
第53图 017(164)·018(165)·019(166~177)号住居跡出土土器



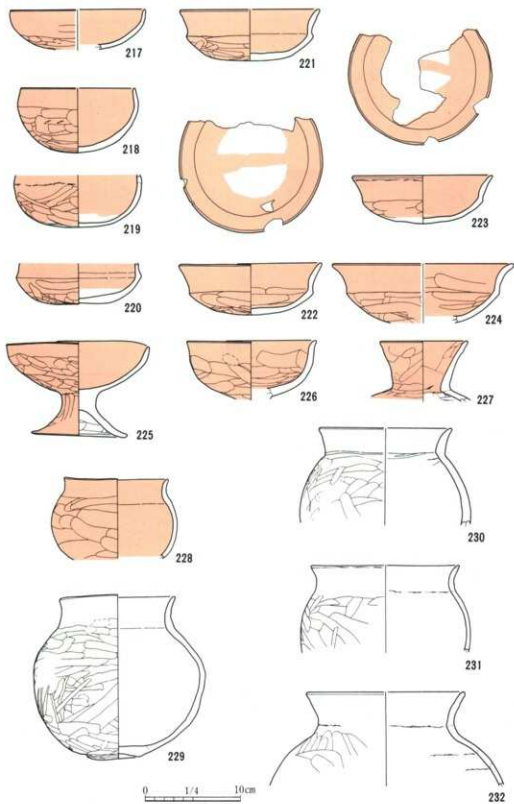
第54图 019(178~183)·020(184~190)号住居跡出土土器



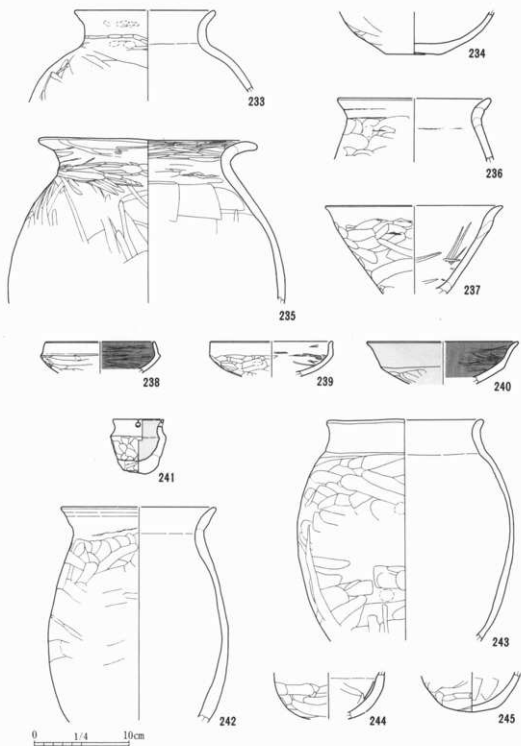
第55图 020(191·192)·023(193~197)·024(198~204)号住居跡出土土器



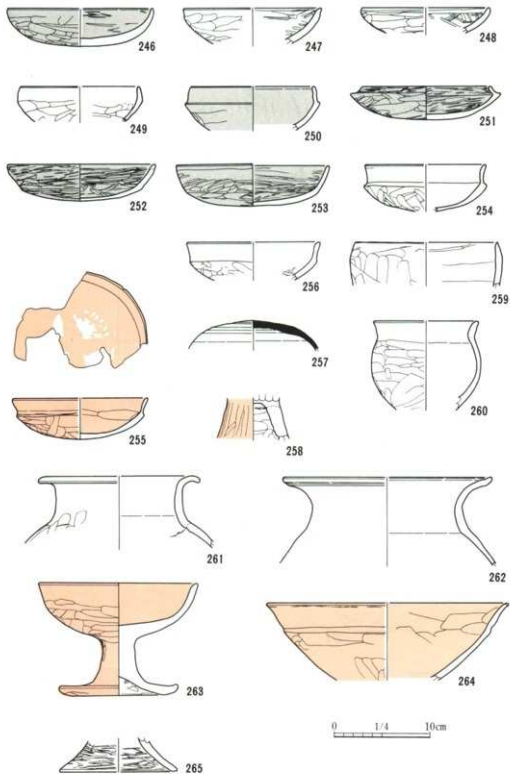
第56图 024(205~216)号住居跡出土土器



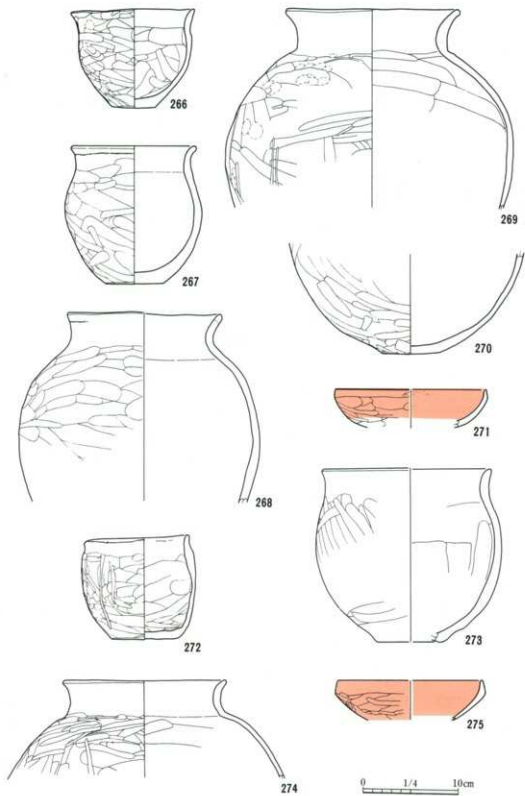
第57图 025(217~232)号住居跡出土土器



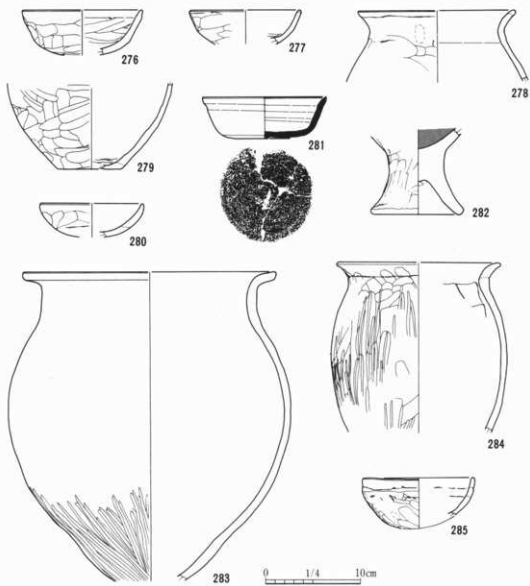
第58图 025(233·234)·026(235~237)·030(238~243)·032(244·245)号
住居跡出土土器



第59图 033(246~262)·034(263~265)号住居跡出土土器



第60图 034(266~270)·035(271~274)·036(275)号住居跡出土土器



第61图 036(276~279)·037(280~284)·039(285)号住居跡出土土器

第1表 古墳時代土器観察表

遺構番号	探目番号	種類・器種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・調整手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
001号 住居跡	1	土師器 環	13.6 — 5.1	5/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	石英粒	良好	暗赤褐色	赤彩○
	2	土師器 環	16.1 — 6.1	4/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラケズリ後ヘラナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩
	3	土師器 環	12.3 — —	2/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ	石英粒	不良	褐色	
	4	土師器 鉢	12.4 — —	2/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ		普通	暗赤褐色	赤彩
	5	土師器 壺	14.6 — —	2/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラナデ	砂 石英粒	良好	褐色	
	6	土師器 壺	19.2 6.9 16.9	5/6	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ後ナデ、胴部内面ヘラナデ、底部ヘラケズリ	砂 石英粒	普通	暗褐色	
	7	土師器 壺	16.3 — —	1/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	赤褐色	
	8	土師器 壺	16.3 — —	1/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	褐色	
	9	土師器 壺	16.2 7.9 29.0	5/6	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ後ナデ、胴部内面ヘラナデ、底部ヘラケズリ	石英粒	普通	暗褐色	
	10	土師器 壺	16.9 7.9 25.9	5/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗褐色	
	11	土師器 壺	— — 6.3	2/6	胴部内外面ヘラケズリ 底部ヘラケズリ		普通	明褐色	体部外面磨耗顯著
	12	土師器 壺	— — 6.9	—	胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	砂 石英粒	普通	暗褐色	
002号 住居跡	13	土師器 環	14.6 — —	3/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	石英粒	不良	黒褐色	赤彩
	14	土師器 環	12.2 — 5.5	6/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩○
	15	土師器 環	11.5 — 4.9	6/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	石英粒	良好	赤褐色	赤彩 底部焼成前線刻
	16	土師器 環	11.9 — 4.9	6/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩
	17	土師器 環	10.0 — 5.1	1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	石英粒	良好	赤褐色	赤彩
	18	土師器 環	11.8 — 4.3	6/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩
	19	土師器 環	10.8 — 4.7	5/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ	石英粒	良好	赤褐色	赤彩
	20	土師器 環	15.1 — —	—	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラミガキ		普通	暗赤褐色	赤彩
	21	土師器 環	12.8 — 4.3	4/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	石英粒	普通	黒褐色	赤彩
	22	土師器 環	11.9 — 5.5	5/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	石英粒	良好	赤褐色	赤彩
	23	土師器 環	12.0 — —	1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラミガキ	石英粒	普通	暗褐色	
	24	土師器 環	15.6 — —	—	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ		普通	赤褐色	赤彩

遺構番号	棟号 番号	種類・器種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・調整手法の特徴	土質	焼成	色調	備考
002号 住居跡	25	土師器 坏	14.9 — 4.2	4/6	口縁部コナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ		普通	暗赤褐色	赤彩 底部研磨痕
	26	土師器 坏	13.8 — 5.2	6/6	口縁部コナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ	石英粒 長石粒	良好	赤褐色	赤彩
	27	土師器 坏	14.1 — 5.5	6/6	口縁部コナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	石英粒 長石粒	良好	赤褐色	赤彩
	28	土師器 坏	13.2 — 4.4	6/6	口縁部コナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	石英粒	良好	赤褐色	赤彩
	29	土師器 坏	15.4 — —	2/6	口縁部コナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩
	30	土師器 坏	13.9 — 4.2	3/6	口縁部コナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	石英粒 長石粒	普通	暗褐色	
	31	土師器 高坏	15.9 — —	3/6	口縁部コナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	石英粒	良好	赤褐色	赤彩
	32	土師器 高坏	— — —	2/6	口縁部コナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ		普通	赤褐色	赤彩
	33	土師器 甕	12.1 — —	3/6	口縁部コナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒 長石粒	良好	黄褐色	
	34	土師器 甕	16.7 — —	4/6	口縁部コナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒 酸化鉄粒	不良	暗褐色	
	35	土師器 甕	12.5 — —	—	口縁部コナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗赤褐色	
	36	土師器 甕	12.2 — —	1/6	口縁部コナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ		普通	褐色	
	37	土師器 甕	17.0 — —	2/6	口縁部コナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗褐色	胴部研磨痕
	38	土師器 甕	— — 7.6	1/6	胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラケズリ 底部ヘラケズリ	石英粒	普通	暗褐色	
	39	土師器 甕	— — 6.8	—	胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗褐色	
	40	土師器 甕	— — 6.3	—	胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	良好	褐色	
	41	土師器 甕	— — 6.1	—	胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラケズリ	石英粒	不良	暗褐色	
	42	土師器 甕	20.1 7.1 22.3	3/6	口縁部コナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒 長石粒	普通	褐色	
	43	土師器 甕	23.1 — —	—	口縁部コナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒 酸化鉄粒	良好	褐色	
	004号 住居跡	44	土師器 坏	13.6 — 4.8	2/6	口縁部コナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗赤褐色
45		土師器 坏	13.2 — 4.0	4/6	口縁部～体部内面ヘラミガキ 体部外面ヘラケズリ	酸化鉄粒	普通	暗褐色	
46		土師器 坏	12.3 — —	—	口縁部コナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ	酸化鉄粒	普通	黒褐色	
47		土師器 坏	14.5 — 3.8	4/6	口縁部コナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩
48		土師器 坏	13.3 — —	—	口縁部コナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	普通	褐色	
49		土師器 坏	13.8 — 3.8	3/6	口縁部ヘラミガキ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	石英粒	普通	黒褐色	漆仕上げ

遺構番号	探洞 番号	種類・形状	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・調整手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考		
004号 住居跡	50	土師器 坏	12.3 — —	—	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ		酸化鉄粒	不良	褐色		
	51	土師器 坏	16.8 — 5.8	2/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ		石英粒	普通	暗褐色	内黒	
	52	土師器 坏	16.6 — —	—	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ			普通	暗赤褐色		
	53	土師器 坏	14.5 — —	—	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ			良好	褐色		
	54	土師器 高坏	20.4 — —	4/6	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラミガキ 脚部内面ヘラナデ		石英粒	普通	赤褐色	赤彩 内黒	
	55	土師器 高坏	10.9 — —	3/6	体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ 脚部内面ヘラナデ		石英粒	普通	暗褐色	漆仕上げ	
	56	須恵器 蓋	13.4 — 3.8	1/6	口縁部～体部内面ヨコナデ 体部外面回転ヘラケズリ		小石含む	良好	灰色		
	57	須恵器 蓋	— — —	1/6	体部外面回転ヘラケズリ 体部内面ヨコナデ		長石粒 小石含む	良好	明灰色		
	58	土師器 甕	12.0 — —	2/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ		石英粒 長石粒 酸化鉄粒	普通	茶褐色		
	59	土師器 甕	13.4 — —	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ		石英粒 酸化鉄粒	普通	茶褐色		
	60	土師器 甕	15.5 — —	1/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ		石英粒	普通	茶褐色		
	61	土師器 甕	— — —	2/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ		長石粒	普通	暗褐色		
	62	土師器 甕	15.4 — 5.3 27.4	3/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面～底部ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ		石英粒 長石粒 酸化鉄粒	普通	暗褐色		
	63	土師器 甕	19.0 — 6.1 29.4	5/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面～底部ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ		石英粒 酸化鉄粒	普通	暗褐色		
	005号 住居跡	64	土師器 坏	14.2 — 5.0	3/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ		石英粒	普通	暗赤褐色	赤彩
		65	土師器 坏	14.0 — —	2/6	口縁部体部内面ヘラミガキ 体部外面ヘラケズリ		石英粒	普通	黒褐色	漆仕上げ
		66	土師器 坏	12.5 — —	2/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ			普通	赤褐色	赤彩
		67	土師器 坏	13.3 — 4.6	5/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ		酸化鉄粒	普通	褐色	赤彩
		68	土師器 坏	12.7 — 6.4	5/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ		石英粒 酸化鉄粒	不良	暗赤褐色	
69		土師器 坏	10.8 — —	1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ			普通	暗赤褐色		
70		土師器 坏	12.6 — 4.6	3/6	口縁部体部内面ヘラミガキ 体部外面ヘラケズリ		酸化鉄粒	良好	暗赤褐色	漆仕上げ	
71		土師器 坏	10.9 — 4.5	3/6	口縁部体部内面ヘラミガキ 体部外面ヘラケズリ		酸化鉄粒	良好	暗褐色	漆仕上げ	
72		土師器 坏	14.3 — —	—	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ		石英粒	普通		赤彩	
73		土師器 坏	15.4 — 4.0	2/6	口縁部～体部内面ヘラミガキ 体部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ		酸化鉄粒	良好	暗褐色	漆仕上げ	
74		土師器 坏	9.2 — 5.4 4.1	6/6	口縁部ヨコナデ 体部外面～底部手持ちヘラケズリ 体部内面ヘラナデ		石英粒	普通	茶褐色		

遺構番号	層回 番号	種類・器種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成 色 調	備 考
005号 住居跡	75	土師器 高坏	17.5 — —	3/6	口縁部外面ヨコナデ 口縁部内面へラミガキ 体部外面ヘラケズリ	石英粒	良好 赤褐色	赤彩 内黒
	76	須恵器 甗	12.4 — 3.9	4/6	口縁部へ体部内面ヨコナデ 体部外面回転ヘラケズリ	長石粒 小白きむ	良好 灰 色	
	77	土師器 高坏	— — —	2/6	胴部内外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	石英粒	良好 赤褐色	赤彩 内黒
	78	土師器 高坏	— — —	2/6	胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラナデ 体部内面ヘラミガキ	石英粒	普通 赤褐色	赤彩 内黒
	79	土師器 高坏	10.8 — —	—	胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラナデ		普通 茶褐色	
	80	土師器 鉢	15.5 — —	—	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ		普通 赤褐色	
	81	土師器 鉢	18.4 — —	—	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	石英粒	普通 暗褐色	
	82	土師器 甗	12.1 — —	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	普通 褐色	
	83	土師器 甗	12.0 — —	—	口縁部ヨコナデ 胴部内外面ヘラケズリ	酸化鉄粒	普通 明褐色	
	84	土師器 甗	— — 5.6	—	胴部外面へ底部ヘラケズリ		普通 褐色	
006号 住居跡	85	土師器 坏	15.9 6.2 4.1	6/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	長石粒	良好 明褐色	
	86	須恵器 甗	2.7 14.6 2.8	2/6	口縁部へ体部内面ヨコナデ 後ヘラミガキ胴部回転ヘラケズリ つまみ貼り付け後ヨコナデ	砂石 長粒	普通 青灰色	
	87	須恵器 坏	10.5 4.1 3.3	3/6	体部内外面ヨコナデ 底部ヘラ切り後回転ヘラケズリ	砂石 長粒 石英粒	普通 青灰色	
007号 住居跡	88	土師器 坏	11.4 — 4.1	6/6	口縁部外面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 口縁部内面体部内面ナデ	石英粒 酸化鉄粒	良好 暗褐色	
	89	土師器 坏	12.4 — —	—	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ		普通 暗赤褐色	
	90	土師器 坏	14.4 — —	1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	石英粒 酸化鉄粒	良好 赤褐色	赤彩
	91	土師器 鉢	18.7 6.6 7.4	5/6	口縁部ヨコナデ 体部外面へ底部ヘラケズリ 体部内面ナデ	石英粒	不良 暗褐色	
	92	土師器 高坏	— — —	—	胴部内外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	石英粒	普通 赤褐色	赤彩
	93	土師器 甗	— — 7.1	—	胴部外面へ底部ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	砂 粒	普通 黒褐色	
	94	土師器 坏	13.8 — 4.6	2/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	砂石 長粒	良好 赤褐色	赤彩
008号 住居跡	95	土師器 坏	13.8 — 4.7	—	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	砂石 長粒	良好 赤褐色	赤彩
	96	土師器 坏	14.7 — 5.9	3/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	砂 粒	普通 赤褐色	赤彩
	97	土師器 坏	14.6 — 5.4	2/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	石英粒	普通 赤褐色	赤彩
	98	土師器 坏	13.8 — —	—	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	石英粒	普通 赤褐色	赤彩
	99	土師器 高坏	— — —	—	胴部内外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	石英粒	普通 赤褐色	赤彩

遺構番号	検出 番号	種類・形状	法量(cm) 径・高	遺存度	成形・調整手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	
008号 注同跡	100	土師器 壺	12.4 —	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラケズリ	石英粒 酸化鉄粒	普通	黒褐色		
	101	土師器 壺	17.1 —	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラケナデ	石英粒	普通	茶褐色		
	102	土師器 壺	7.4 —	3/6	胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラケナデ 底部ヘラケズリ	石英粒	普通	暗赤褐色		
009号 注同跡	103	土師器 坏	13.5 —	2/6	口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ		良好	暗褐色		
	104	土師器 高坏	— —	1/6	口縁部ヨコナデ 体部内面ヘラミガキ 体部外面ヘラケズリ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩 内黒	
	105	土師器 高坏	— —	—	体部内面ナデ 胴部内外面ヘラケナデ		普通	褐色	赤彩	
	106	土師器 壺	14.1 —	3/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラケナデ	酸化鉄粒	普通	暗褐色		
	107	土師器 壺	13.4 —	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラケナデ	砂石 石英粒	普通	暗褐色		
	108	土師器 瓶	10.5 —	—	胴部内外面ヘラケズリ		普通	暗褐色		
	010号 注同跡	109	土師器 坏	15.6 5.7	2/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	砂石 石英粒	普通	赤褐色	赤彩
		110	土師器 坏	13.8 4.7	6/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラケナデ	石英粒 酸化鉄粒	良好	赤褐色	赤彩
111		土師器 高坏	14.1 9.2 10.7	3/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラケナデ	石英粒	普通	暗赤褐色	赤彩	
112		土師器 高坏	13.8 —	4/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ	石英粒	普通	暗褐色	赤彩	
113		土師器 高坏	— 7.6	3/6	胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラケズリ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩	
114		土師器 ミニチュア	— 2.4	—	体部内面ナデ 底部ヘラケズリ後ナデ	石英粒	普通	茶褐色		
115		土師器 壺	16.1 —	1/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラケズリ	石英粒	普通	暗褐色		
012号 注同跡		116	土師器 坏	14.1 4.2	4/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラケズリ		普通	暗赤褐色	赤彩 木炭痕
	117	土師器 坏	12.6 6.8	3/6	口縁部ヨコナデ 体部内外面ヘラケズリ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩	
	118	土師器 坏	14.0 5.5	2/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラケナデ	石英粒	普通	暗赤褐色	赤彩	
	119	土師器 坏	13.8 5.2	3/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラケナデ	石英粒	普通	暗赤褐色	赤彩	
	120	土師器 坏	13.9 4.5	3/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラケナデ	石英粒	普通	暗赤褐色	赤彩	
	121	土師器 坏	12.8 3.3	1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	酸化鉄粒	普通	褐色		
	122	土師器 高坏	14.4 —	3/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラケナデ	石英粒 長石	普通	暗赤褐色	赤彩	
	123	土師器 高坏	— 8.6	—	胴部内外面ヘラケナデ		普通	赤褐色	赤彩	
	124	土師器 壺	16.0 —	1/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラケナデ	石英粒 酸化鉄粒	普通	暗褐色		

遺構番号	埋戻 番号	種類・器種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・調整手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
012号 住居跡	125	土師器 甕	16.0 —	1/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	普通	暗褐色	
	126	土師器 甕	15.4 7.2 27.2	4/6	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ後ナデ、胴部内面ヘラナデ、底部ヘラケズリ	石英粒	普通	明褐色	
	127	土師器 甕	7.1	2/6	胴部外面へ底部ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ		普通	明褐色	
	128	土師器 甕	22.5 —	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	普通	明褐色	
	129	土師器 甕	21.1 6.7 19.1	6/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	普通	暗褐色	
013号 住居跡	130	土師器 坏	11.1 5.6	3/6	口縁部ヨコナデ 体部内外面ヘラケズリ	砂 粒	普通	暗褐色	
	131	土師器 坏	13.0 —	—	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	酸化鉄粒	不良	褐色	漆仕上げ
	132	土師器 坏	13.7 3.9	3/6	口縁部へ体部内面ヘラミガキ 体部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ		普通	暗褐色	漆仕上げ
	133	土師器 坏	12.9 3.3	2/6	口縁部内面へ体部内面ヘラミガキ 体部外面ヘラケズリ後ナデ	酸化鉄粒	普通	暗褐色	漆仕上げ
	134	土師器 鉢	8.7 —	1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ		不良	茶褐色	
	135	土師器 甕	12.0 —	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒 長石粒	普通	茶褐色	
	136	土師器 甕	15.0 —	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	明褐色	
	137	土師器 甕	8.7 —	1/6	胴部へ底部外面ヘラケズリ		普通	暗褐色	
	138	土師器 甕	31.8 —	—	胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	褐色	
	014号 住居跡	139	土師器 甕	26.0 8.6 26.3	4/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラナデ		普通	茶褐色
016号 住居跡	140	土師器 坏	13.7 —	1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ		普通	暗赤褐色	赤彩
017号 住居跡	141	土師器 坏	14.0 —	3/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	酸化鉄粒	不良	暗茶褐色	
	142	土師器 坏	13.0 —	3/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	酸化鉄粒	普通	褐色	
	143	土師器 坏	10.8 4.1 3.7	—	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	石英粒	普通	褐色	
	144	土師器 坏	11.9 —	1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	石英粒	普通	暗褐色	
	145	土師器 高坏	— —	3/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラミガキ	石英粒	不良	赤褐色	赤彩 内裏
	146	土師器 高坏	— 8.9	2/6	体部内面ヘラミガキ 胴部内外面ヘラケズリ 胴部ヨコナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩 内裏
	147	土師器 高坏	— 9.7	2/6	胴部内外面ヘラケズリ 胴部ヨコナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩 内裏
	148	土師器 高坏	— 11.9	2/6	胴部内外面ヘラケズリ 胴部ヨコナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩
	149	土師器 鉢	11.5 4.1 8.2	6/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	酸化鉄粒 長石粒	普通	褐色	

遺構番号	棟号	種類・器種	法量(cm) □・型・高	遺存度	成形・調整手法の特徴	粘土	焼成	色調	備考
017号 住居跡	150	土師器 鉢	11.3 3.5 7.3	6/6	□縁部ヨコナデ 体部外面下端～底部ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	普通	茶褐色	底部焼成後穿孔
	151	土師器 壺	16.2 —	4/6	□縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗褐色	
	152	土師器 壺	19.5 —	2/6	□縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒 長石粒	普通	茶褐色	
	153	土師器 壺	19.0 7.8 34.6	4/6	□縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ 底部ヘラケズリ	石英粒	普通	茶褐色	
	154	土師器 壺	19.7 8.0 23.5	5/6	□縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	不良	暗褐色	
	155	土師器 壺	20.0 —	3/6	□縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ		普通	暗褐色	
	156	土師器 壺	15.5 —	1/6	□縁部外面ヨコナデ □縁部内面～胴部内面ヘラミガキ	石英粒	普通	暗褐色	
	157	土師器 壺	14.6 —	1/6	□縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	普通	暗褐色	
	158	土師器 壺	15.3 —	2/6	□縁部外面～胴部外面ヘラケズリ □縁部内面ヨコナデ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	茶褐色	
	159	土師器 壺	12.4 6.1 17.0	4/6	□縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗褐色	
	160	土師器 壺	13.4 —	1/6	□縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	茶褐色	
	161	土師器 壺	12.6 —	1/6	□縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	茶褐色	
	162	土師器 壺	8.0 —	—	胴部外面ヘラケズリ後ナデ 底部ヘラケズリ	石英粒	普通	褐色	
	163	土師器 壺	6.2 —	—	胴部外面～底部ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	良好	明褐色	
164	土師器 瓶	24.9 8.5 23.6	5/6	□縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ		普通	黄褐色		
018号 住居跡	165	須恵器 蓋	— —	1/6	体部外面手持ちヘラケズリ 体部内面ヨコナデ	長石粒 雲母粒	普通	白灰色	
019号 住居跡	166	土師器 杯	14.5 —	4/6	□縁部～体部内面ヘラミガキ 体部外面ヘラケズリ	石英粒	普通	暗褐色	漆仕上げ
	167	土師器 杯	14.5 —	2/6	□縁部～体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	砂 粒	普通	暗褐色	漆仕上げ
	168	土師器 杯	12.8 7.1	5/6	□縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ		不良	暗赤褐色	赤彩
	169	土師器 杯	11.8 —	1/6	□縁部～体部内外面ヘラミガキ		普通	暗赤褐色	漆仕上げ
	170	土師器 杯	12.8 4.8	6/6	□縁部～体部内面ヘラミガキ 体部外面ヘラケズリ	石英粒 長石粒	普通	褐色	
	171	土師器 杯	12.2 —	2/6	□縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	長石粒	良好	褐色	
	172	土師器 杯	13.0 —	2/6	□縁部外面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラミガキ	石英粒	普通	褐色	漆仕上げ
	173	土師器 高杯	13.0 —	1/6	□縁部外面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	石英粒	普通	暗赤褐色	赤彩 内黒
174	土師器 高杯	13.0 —	3/6	□縁部外面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラミガキ、胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗赤褐色	赤彩 内黒	

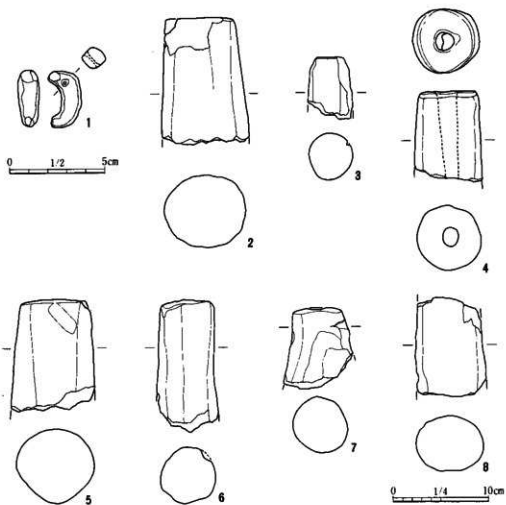
遺構番号	補正 番号	種類・器種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・調整手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	
019号 住居跡	175	土師器 鉢	10.3 5.8 8.3	4/6	口縁部ヨコナデ 底部外面へ底部を持ちヘラケズリ 底部内面ヘラナデ	石英粒 酸化鉄粒	不具	暗赤褐色		
	176	土師器 甕	16.6 — —	5/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面へ底部ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	砂 粒	普通	黒褐色		
	177	土師器 甕	12.4 7.1 29.7	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	普通	赤褐色		
	178	土師器 甕	14.1 — —	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	普通	暗褐色		
	179	土師器 甕	11.9 — —	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ナデ	酸化鉄粒	普通	暗褐色		
	180	土師器 甕	7.2 — —	2/6	胴部外面へ底部ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	赤褐色		
	181	土師器 甕	7.4 — —	1/6	胴部外面へ底部ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	普通	赤褐色		
	182	土師器 甕	6.0 — —	1/6	胴部外面へ底部ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗褐色		
	183	土師器 甕	24.4 — —	5/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	茶褐色		
020号 住居跡	184	須恵器 高坏	— — —	1/6	胴部内外面ヨコナデ	長石粒	普通	白灰色		
	185	土師器 鉢	17.8 5.1 13.5	2/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面へ底部ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	不具	黒褐色		
	186	土師器 甕	15.5 — —	1/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒 酸化鉄粒	普通	褐色		
	187	土師器 甕	14.3 — —	2/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄	良好	明褐色		
	188	土師器 甕	16.1 — —	3/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗赤褐色		
	189	土師器 甕	7.3 — —	—	胴部外面へ底部ヘラケズリ 胴部内面ナデ	石英粒	普通	暗褐色		
	190	土師器 甕	6.5 — —	—	胴部外面へ底部ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	茶褐色		
	191	土師器 甕	25.1 9.0 24.0	1/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒 長石粒 酸化鉄粒	普通	褐色		
	192	土師器 甕	20.1 — —	2/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラナデ	石英粒 酸化鉄粒	普通	褐色		
	023号 住居跡	193	土師器 坏	16.5 — —	5/6	口縁部ヨコナデ 底部内外面ヘラケズリ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩
		194	土師器 坏	14.1 — —	1/6	口縁部ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ 底部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗赤褐色	赤彩
195		土師器 坏	13.9 — 6.2	5/6	口縁部ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ 底部内面ヘラナデ	石英粒 酸化鉄粒	普通	赤褐色	赤彩	
196		土師器 甕	16.5 — —	2/6	口縁部ヨコナデ 胴部内外面ヘラケズリ	石英粒 酸化鉄粒	普通	暗褐色		
197		土師器 甕	23.5 6.4 17.0	3/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒 酸化鉄粒	普通	赤褐色		
024号 住居跡		198	土師器 坏	14.9 — 4.9	2/6	口縁部ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ 底部内面ヘラナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩
	199	土師器 坏	13.7 — 6.5	5/6	口縁部ヨコナデ 底部外面ヘラケズリ後ナデ 底部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗赤褐色	赤彩	

遺構番号	跡目 番号	種類・器種	法量(cm)		遺存度	成形・調整手法の特徴	胎土	焼成	色	質	備考	
			口・底・高									
024号 住居跡	200	土師器 坏	12.3 — 6.8		6/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩		
	201	土師器 坏	13.8 — 4.6		5/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	砂 石 英 粒 酸化鉄粒	普通	赤褐色	赤彩		
	202	土師器 坏	14.3 — 4.8		2/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	石英粒 酸化鉄粒	普通	赤褐色	赤彩		
	203	土師器 坏	13.0 — —		1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	砂 粒	普通	赤褐色	赤彩		
	204	土師器 坏	13.5 — 4.8		4/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	砂 石 英 粒	普通	赤褐色	赤彩	○	
	205	土師器 坏	16.3 — 6.2		3/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ	砂 粒	普通	赤褐色	赤彩		
	206	土師器 高坏	12.6 7.8 11.3		6/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩		
	207	土師器 ミユチユア	6.2 — —		1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩		
	208	土師器 手捏ね	5.1 — —		2/6	体部内外面ナデ・指頭押圧		普通	褐色			
	209	土師器 甕	10.5 9.0 4.1		6/6	胴部外面ヘラケズリ	石英粒	普通	暗褐色			
	210	土師器 甕	12.6 — —		2/6	口縁部ヨコナデ 胴部内外面ヘラケズリ	砂 石 英 粒 酸化鉄粒	普通	暗茶褐色			
	211	土師器 甕	14.8 — —		2/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラナデ	石英粒 酸化鉄粒	普通	暗褐色			
	212	土師器 甕	16.4 — —		2/6	口縁部外面ヘラケズリ後ナデ 口縁部内面ヨコナデ 胴部内面ヘラケズリ	酸化鉄粒	普通	褐色			
	213	土師器 甕	6.2 — —		—	胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒 酸化鉄粒	普通	暗褐色			
	214	土師器 甕	7.4 — —		—	胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗褐色			
	215	土師器 鉢	14.5 — —		3/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	砂 石 英 粒 酸化鉄粒	普通	赤褐色			
	216	土師器 瓶	28.5 — —		2/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	砂 石 英 粒 酸化鉄粒	普通	褐色			
	025号 住居跡	217	土師器 坏	14.2 — —		2/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ	石英粒	普通	暗赤褐色	赤彩	
		218	土師器 坏	11.8 — 6.6		4/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩	
		219	土師器 坏	— — —		4/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	砂 粒	普通	暗赤褐色	赤彩	
		220	土師器 坏	— — —		4/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ	酸化鉄粒	普通	赤褐色	赤彩	
		221	土師器 坏	14.4 — 5.3		4/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩	
		222	土師器 坏	14.7 — 5.3		5/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩	○
		223	土師器 坏	14.3 — 5.0		4/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗赤褐色	赤彩	○
224		土師器 高坏	18.7 — —		2/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	石英粒	良好	赤褐色	赤彩		

遺構番号	拝固番号	種類・器種	法量(cm)		遺存度	成形・調整手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
			口-底	高						
025号 住居跡	225	土師器 高坏	14.6 9.0 9.7	—	6/6	口縁部ココナデ、体部外面～胴部外面へラケズリ後ナデ、体部内面へラナデ、胴部内面へラナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩
	226	土師器 高坏	13.3 —	—	3/6	口縁部ココナデ、体部外面へラケズリ後ナデ、体部内面ナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩
	227	土師器 甗	8.9 —	—	2/6	口縁部ココナデ、体部外面へラケズリ後ナデ、体部内面ナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩
	228	土師器 鉢	10.6 —	—	3/6	口縁部ココナデ、体部外面へラケズリ後ナデ、体部内面へラナデ	砂粒	普通	赤褐色	赤彩
	229	土師器 甗	11.7 4.5 17.1	—	5/6	口縁部ココナデ、胴部外面～底部へラケズリ、胴部内面へラナデ	石英粒	普通	暗赤褐色	
	230	土師器 甗	13.4 —	—	1/6	口縁部ココナデ、胴部外面へラケズリ後ナデ、胴部内面へラナデ	砂粒	良好	褐色	
	231	土師器 甗	15.3 —	—	1/6	口縁部ココナデ、胴部外面へラケズリ、胴部内面へラナデ	石英粒 酸化鉄粒	普通	暗褐色	
	232	土師器 甗	14.5 —	—	1/6	口縁部ココナデ、胴部外面へラケズリ後ナデ、胴部内面ナデ	砂長石粒	不良	暗褐色	
	233	土師器 甗	14.5 —	—	2/6	口縁部ココナデ、胴部外面へラケズリ後ナデ、胴部内面へラナデ	酸化鉄粒	良好	茶褐色	
	234	土師器 甗	— 5.7	—	—	胴部外面～底部へラケズリ、胴部内面へラナデ	石英粒 長石粒 酸化鉄粒	普通	暗褐色	
026号 住居跡	235	土師器 甗	21.5 —	—	2/6	口縁部～胴部外面へラミガキ、胴部内面へラナデ	石英粒 酸化鉄粒	良好	明褐色	
	236	土師器 甗	15.7 —	—	—	口縁部ココナデ、胴部外面へラケズリ、胴部内面へラナデ	石英粒	良好	褐色	
	237	土師器 鉢	18.9 —	—	2/6	口縁部ココナデ、体部外面へラケズリ後ナデ、体部内面へラミガキ	石英粒	普通	茶褐色	
030号 住居跡	238	土師器 坏	11.2 —	—	1/6	口縁部ココナデ、体部外面へラケズリ、体部内面へラミガキ	—	普通	暗褐色	内黒
	239	土師器 坏	12.7 —	—	1/6	口縁部ココナデ、体部外面へラケズリ、体部内面へラミガキ	砂粒 酸化鉄粒	良好	褐色	
	240	土師器 高坏	15.5 —	—	1/6	口縁部ココナデ、体部外面へラケズリ後ナデ、体部内面へラミガキ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩 内黒
	241	土師器 甗	4.9 — 5.5	—	3/6	口縁部ココナデ、体部外面へラケズリ、体部内面ナデ	—	普通	暗褐色	内面赤彩 口縁部焼成後穿孔
	242	土師器 甗	15.8 —	—	2/6	口縁部ココナデ、胴部外面へラケズリ後ナデ、胴部内面へラナデ	石英粒	不良	暗褐色	
	243	土師器 甗	16.1 —	—	2/6	口縁部ココナデ、胴部外面へラケズリ、胴部内面へラナデ	酸化鉄粒	普通	暗褐色	
032号 住居跡	244	土師器 坏	— —	—	2/6	口縁部ココナデ、体部外面へラケズリ、体部内面へラナデ	石英粒	普通	茶褐色	
	245	土師器 甗	— —	—	2/6	胴部外面～底部へラケズリ、胴部内面へラナデ	砂粒	普通	暗褐色	
033号 住居跡	246	土師器 坏	15.0 — 3.8	—	3/6	口縁部ココナデ、体部外面へラケズリ、体部内面へラミガキ	石英粒 長石粒	普通	暗褐色	漆仕上げ
	247	土師器 坏	14.3 —	—	1/6	口縁部ココナデ、体部外面へラケズリ、体部内面へラミガキ	酸化鉄粒	良好	褐色	
	248	土師器 坏	13.3 —	—	2/6	口縁部ココナデ、体部外面へラケズリ、体部内面へラミガキ	—	普通	暗褐色	
	249	土師器 坏	12.3 —	—	1/6	口縁部ココナデ、体部外面へラケズリ、体部内面ナデ	石英粒	普通	褐色	

遺構番号	埋(番号)	種類・形種	法量(cm)		遺存度	成形・調整手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	
			1・底-高	—							
033号 住居跡	250	土師器 坏	12.8 —	—	2・6	口縁部～体部内面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ		普通	黒色	漆仕上げ	
	251	土師器 坏	13.2 3.5	—	5・6	口縁部ヨコナデ 体部内外面ヘラミガキ		不良	暗褐色	漆仕上げ	
	252	土師器 坏	15.2 3.8	—	5・6	口縁部ヨコナデ 体部内外面ヘラミガキ		不良	暗褐色	漆仕上げ	
	253	土師器 坏	15.8 4.3	—	5/6	口縁部ヨコナデ 体部内外面ヘラミガキ		不良	暗褐色	漆仕上げ	
	254	土師器 坏	12.3 —	—	2・6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ		酸化鉄粒	普通	茶褐色	
	255	土師器 坏	13.9 5.2	—	2・6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩子	
	256	土師器 坏	13.6 —	—	2・6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ		酸化鉄粒	普通	褐色	
	257	須恵器 甕	— —	—	2・6	体部外面回転ヘラケズリ 体部内面ヨコナデ	小石含む	良好	白灰色		
	258	土師器 高坏	— —	—	—	胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラナデ	石英粒 酸化鉄粒	普通	明褐色	赤彩	
	259	土師器 鉢	14.7 —	—	1・6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗茶褐色		
	260	土師器 甕	10.5 —	—	3/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒 酸化鉄粒	良好	明褐色		
	261	土師器 甕	15.0 —	—	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗褐色		
	262	土師器 甕	21.5 —	—	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ナデ 胴部内面ヘラナデ	長石粒 雲母粒	普通	黄褐色	常規型	
	034号 住居跡	263	土師器 高坏	16.3 9.6 11.6	—	5/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	石英粒	不良	赤褐色	赤彩
		264	土師器 高坏	24.9 —	—	1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩
		265	土師器 高坏	12.0 —	—	—	胴部内外面ヘラミガキ		酸化鉄粒	普通	褐色
		266	土師器 甕	12.6 4.6 10.2	—	6/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	良好	褐色	
		267	土師器 甕	12.7 5.9 14.2	—	5/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラナデ		酸化鉄粒	普通	赤褐色
268		土師器 甕	15.9 —	—	3/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラナデ		酸化鉄粒	普通	明褐色	
269		土師器 甕	17.8 —	—	3/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラナデ		酸化鉄粒	普通	褐色	
270		土師器 甕	5.8 —	—	2/6	胴部外面～底部ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ		普通	明褐色		
035号 住居跡		271	土師器 坏	15.6 —	—	2/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩
		272	土師器 鉢	10.8 6.0 10.4	—	6/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	石英粒	普通	明褐色	
	273	土師器 甕	17.3 6.8 17.9	—	4/6	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ後ナデ、胴部内面ヘラナデ、底部ヘラケズリ		普通	暗褐色		
	274	土師器 甕	16.7 —	—	2/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ		酸化鉄粒	良好	暗褐色	

遺構番号	埋回番号	種類・器種	法寸(cm)		遺存度	成形・調整手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
			L・底・高	—						
036号住居跡	275	土師器 坏	15.0	—	1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩
	276	土師器 坏	12.4	—	3/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	石英粒	普通	明褐色	
	277	土師器 坏	11.4	—	1/6	口縁部～体部内面ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ		普通	褐色	
	278	土師器 壺	16.2	—	1/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	褐色	
	279	土師器 壺	6.7	—	2/6	胴部外面～底部ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒 貝石粒	普通	暗褐色	
037号住居跡	280	土師器 坏	10.5	—	3/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	石英粒 酸化鉄粒	普通	明褐色	
	281	須恵器 坏	12.8 4.2	—	6/6	口縁部～体部内面ヨコナデ 底部ヘタ切り後回転ヘラケズリ	砂粒	普通	青灰色	
	282	土師器 高坏	8.7	—	2/6	胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ナデ	石英粒	良好	褐色	内黒
	283	土師器 甕	26.0	—	2/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面下半部縦位ヘラミガキ 胴部内面ヘラナデ	石英粒 貝石粒	不良	褐色	常総型
	284	土師器 壺	16.5	—	4/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗褐色	常総型
039号住居跡	285	土師器 坏	11.4	—	4/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	不良	明褐色	



第62图 001(2)·004(1·3)·010(4)·012(5)·017(6)·019(7)·030(8)号
住居跡出土土製品



第63图 026号住居跡出土土製品



第64図 016(1)・026(2)号住居跡出土鉄製品

第2表 古墳時代土製品計測表

遺構番号	挿図番号	種類	計測値(cm) ()は遺存部	重量(g)	備考
001号住居跡	2	支脚	長さ(12.8) 幅(8.6)	180.0	
004号住居跡	1	勾玉	長さ2.4 幅1.2	4.6	
	3	支脚	長さ(6.4) 幅(4.4)	126.0	
010号住居跡	4	支脚	長さ(9.2) 幅(6.8)	462.0	縁羽口に類似
012号住居跡	5	支脚	長さ(11.2) 幅(8.2)	485.0	
017号住居跡	6	支脚	長さ(13.6) 幅(6.0)	522.0	
019号住居跡	7	支脚	長さ(8.0) 幅(5.8)	264.0	
030号住居跡	8	支脚	長さ(10.0) 幅(6.8)	324.0	

第3表 古墳時代石製品計測表

遺構番号	挿図番号	種類	石材	計測値(cm) ()は遺存部	重量(g)	備考
026号住居跡	1	砥石	砂岩	長さ(7.2) 厚さ(4.0)	214.0	錆付着

第4表 古墳時代鉄製品計測表

遺構番号	挿図番号	種類	計測値(cm) ()は遺存部	備考
016号住居跡	1	刀子	長さ(6.6) 幅(2.0) 厚さ(0.6)	木質付着
026号住居跡	2	鎌	長さ(5.6) 幅(2.0) 厚さ(0.2)	

第5節 奈良・平安時代

1. 遺構

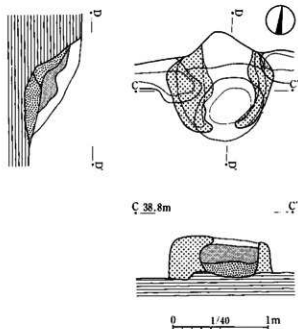
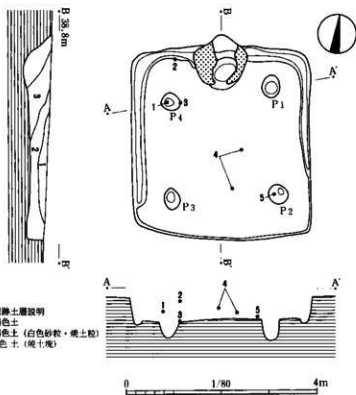
003号住居跡（第65図、図版11）

南区南部、12G-18・19・28・29・38・39、12H-10・20・30に位置し、南に面する斜面に立地する。所々攪乱を受けているものの遺存状態は比較的良好であった。規模は北壁・東壁・南壁で3.6m、西壁で3.5mを測り、ほぼ正方形を呈する。主軸方位はN-16°-E。覆土はローム粒を含む暗褐色土・暗茶褐色土が主体であった。床面はハードローム層で、中央部を主体に堅緻で、ほぼ平坦であった。壁高は北壁で60cm、東壁で56cm、南壁で35cm、西壁で50cmを測り、約81度で立ち上がる。周溝はカマド燃焼部内と東壁1/3～南西コーナーには施されていない。最大幅40cm、深さ4cmを測る。ピットは主柱穴が4か所検出された。P1～P4は径36～48cm、深さはP1が41cm、P2が42cm、P3が47cm、P4が33cmを測る。柱間寸法はP1-P2・P3-P4が2.0m、P2-P3が2.4m、P4-P1が2.2mを測る。配置は不整形を呈する。覆土はローム塊を含む茶褐色土が主体で、柱痕は検出されなかった。カマドは北壁中央に位置する。攪乱を受けていたが、袖部は比較的良好な遺存状態であった。主軸方位はN-16°-Wで、住居跡のそれと同じ。壁外には約30cm掘り込み、全長約1.1m、幅約1.1mを測る。底面の掘り込みは径約70cm、深さ約10cmを測る。両袖部は壁面から焚口に向けてすぼまるように伸び、左袖部は燃焼部付近でオーバーハングしていた。壁面からの長さ90cm、床面からの高さ約40cmを測る。構築材は山砂を主体とする。燃焼部～煙道部直上には焼土粒・塊を多量に含む暗褐色土、その上には山砂主体の黄褐色土が堆積しており、天井部の崩壊したものと思われる。煙道部は約70度で立ち上がる。

遺物は、覆土中からまばらに出土した。P4際から出土した土師質土器片(3)は床面直上からの出土であり、本住居跡に伴うと考えられるものである。北壁際から出土した片(2)、中央部覆土上層中から出土した須恵器片(4)は流れ込みの可能性が高い。

011号住居跡（第66図、図版12）

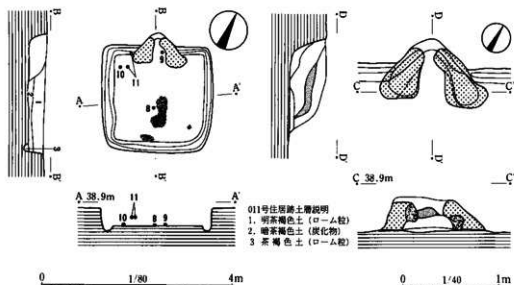
南区中央部、11H-81・90・91・92、12H-01に位置する。ほぼ平坦面に立地する。所々に攪乱を受けていたほかは、遺存状態は比較的良好であった。規模は北西壁が2.2m、北東壁・南東壁が2.0m、南西壁が2.1mを測り、ほぼ正方形を呈する。主軸方位はN-25°-E。覆土は主として2層に分かれ、上層にローム粒を含む明茶褐色土、下層には炭化物粒を含む暗茶褐色土が堆積しており、自然堆積と考えられる。また、中央部付近床面に密着して炭化物粒を含む焼土及び炭化材が検出されたが、量的に少ないことから焼失住居とは考え難い。床面はハードローム層でほぼ平坦であった。壁高は約36cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝はカマド内を除いて全周し、最大幅約30cm、深さ約10cmを測る。ピットは検出されなかった。カマドは北西壁



第65図 003号住居跡・カマド実測図

中央に位置する。遺存状態は良好であった。主軸方位はN-30°-Eで、住居跡のそれより東に振れている。壁外へは約30cm三角形に掘り込み、全長約70cm、幅約1.1mを測る。底面の掘り込みは認められなかった。袖部は壁からの長さ50cm、底面からの高さ約30cm遺存していた。構築材は黄褐色の砂質粘土を主体とし、内側は熱を受け赤化していた。カマド内の覆土は焚口直上に炭化物を含む黒褐色土、そのほかは焼土を含む茶褐色土が主体であった。また、中層には天井部に関わると思われる焼けて赤化した山砂が堆積していた。煙道部は約70度で立ち上がる。

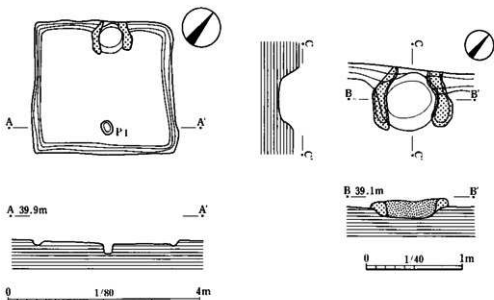
遺物は、住居跡北西側からまばらに土器が出土した。カマド内から出土した土師器甕(9)、中央部の須恵器蓋(8)、カマド左側の土師器甕(11)は床面直上から出土したもので、本住居跡に伴うものと考えられる。



第66図 011号住居跡・カマド実測図

022号住居跡 (第67図、図版12)

北区中央部、4C-45・46・54・55・56・65・66に位置する。南に面する緩斜面に立地する。遺存状態は良好であった。規模は北西壁で2.8m、北東壁・南西壁で2.7m、南東壁で3.0mを測り、やや横長の方形を呈する。主軸方位はN-45°-W。覆土は暗褐色土を主体とする。床面はハードローム層で、ほぼ平坦であった。壁高は北西壁で約14cm、北東壁で4cm、南東壁5cmを測り、約60度で立ち上がる。周溝はカマド内を除いて全周し、最大幅約20cm、深さ約6cmを測る。ピットは南東壁下にP1が1か所検出された。規模は径約25cm、深さ約20cmを測り、出入口施設に伴う柱穴と考えられる。カマドは北西壁ほぼ中央に位置する。遺存状態は比較的良好であった。主軸方位はN-45°-Eで、住居跡のそれと同じである。壁外への掘り込みはなく、全



第67図 022号住居跡・カマド実測図

長約70cm、幅約80cmを測る。底面の掘り込みは焚口～燃焼部に施され、深さは最大20cmを測る。袖部は壁からの長さ70cm、底面からの高さ約10cm遺存していた。構築材は山砂を主体とする。カマド内の覆土は焼砂粒・炭化物粒・山砂を多量に含む暗赤褐色土が主体であった。煙道部は約60度で立ち上がる。

遺物は覆土中からまばらに土師器片が出土したが、細片が多く図示できるものはなかった。

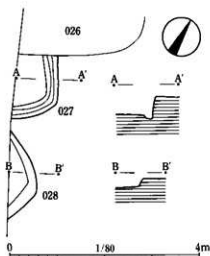
027号住居跡 (第68図)

北区北東部、4B-09・19に位置する。北西側は026号住居跡に切られ、そのほかもほとんどが調査区域外に及んでおり、東側コーナーを中心とするわずかな部分しか調査することができなかった。規模は全辺検出された壁面がないため不明。主軸方位はカマドが検出されないため不明だが、北東壁はN-55°-W方向に向いている。床面はハードローム層で軟弱であった。壁高は北東壁・南東壁とも45cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝は検出部分では全て施されており、最大幅27cm、深さ約5cmを測る。ピットは検出されなかった。

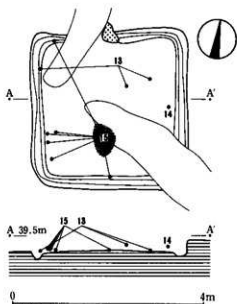
遺物は、覆土中から土師器片が少量出土したのみで、図示できるものはなかった。

028号住居跡 (第68図)

北区北東部、4B-19、4C-10・20に位置する。ほとんどが調査区域外に及んでおり、東側コーナーを中心とする僅かな部分を検出したのみである。規模は全辺検出された壁面がないため不明。主軸方位もカマドが検出されないため不明だが、南東壁はN-15°-E方向に向いている。床面はハードローム層で軟弱であった。壁高は北東壁が約15cm、南東壁が約30cmを測り、約50度で立ち上がる。周溝は検出部分では施されていない。ピットは検出されなかった。



第68図 027・028号住居跡実測図



第69図 029号住居跡実測図

遺物は、覆土中から土師器片が少量出土したのみで、図示できるものはなかった。

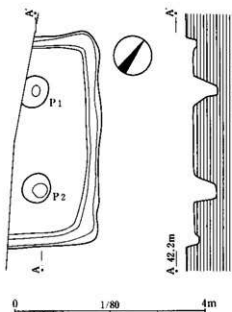
029号住居跡（第69図、図版12）

北区中央やや南寄り、3C-91・92、4C-00・01・02に位置し、ほぼ平坦面に立地する。溝跡によって、所々に大きく攪乱を受け、遺存状態は不良であった。規模は北壁で3.1m、西壁で3.0mを測り、正方形を呈すると推測される。主軸方位はN-6°-W。覆土はローム粒・塊を含む暗褐色土を主体とし、床面はハードローム層で、特に硬く締まった部分は検出されなかった。壁高は北壁で38cm、東壁で36cm、南壁で21cm、西壁で18cmを測り、東壁はほぼ直角に立ち上がる。周溝はカマド内を除いて全周していると考えられ、最大幅40cm、深さ24cmを測る。ピットは検出されなかった。カマドは北壁中央やや西寄りに位置し、左側約半分は溝によって破壊されていた。主軸方位はN-6°-Wで、住居跡のそれと同じ。壁外への掘り込みは検出部分で約20cmを測る。袖部は山砂を構築材としており、壁からの現存長約40cm、床面からの高さ15cm遺存していた。燃焼部底面直上には焼砂粒を多量に含む暗褐色土が堆積していた。

遺物は、住居跡全体からまばらに出土したが、図示したものは床面直上ないし覆土下層中から出土したもので、一括遺物と考えられる。

038号住居跡（第70図）

北区北部、4C-41・42・51・52・53・62に位置する。ほぼ平坦面に立地する。南西側約1/2は調査区域外にかかっており、調査できなかった。規模は北東壁で4.3mを測る。主軸方位はカマドが検出されないため不明だが、北東壁はN-36°-W方向を向いている。覆土は暗褐色土が主



第70図 038号住居跡実測図

体で自然堆積と考えられる。床面はハードローム層で、全体に軟弱である。壁高は北東壁で30cm、南東壁で15cmを測る。周溝は未検出部分を除いて全周しており、最大幅45cm、深さ10cmを測る。ピットは支柱穴が2か所検出された。P1は南西側を全て検出できなかったが、径60cm、深さ50cmを測る。P2は径60cm、深さ45cmを測る。P1-P2の柱間寸法は2.0mを測る。配置は北東側の支柱穴が未検出のため不明であるが、P1-P2ラインは北東壁に平行している。

遺物は、覆土中から土師器の小片がまばらに出土しが、図示できるものはなかった。

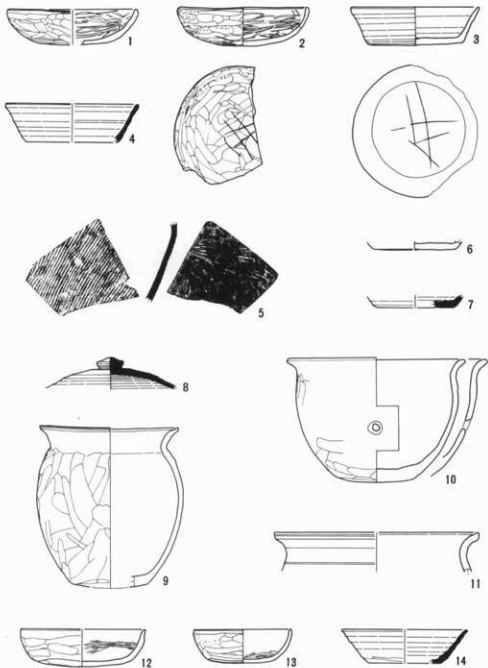
2. 遺物

003号住居跡（第71図、図版38）

本住居跡では、土師器坏2点、土師質土器坏1点、須恵器坏1点、甕1点を図示した。土師器坏（1・2）は丸底の扁平なもので、内面には横方向のヘラミガキが加えられる。2は底部に焼成後の線刻がなされている。3は盤状坏タイプの土師質土器坏で、底部はヘラ切り後、回転ヘラケズリが施される。また2の坏と同様に底部に焼成後の線刻がなされている。4は箱形の須恵器坏、5は須恵器甕の胴部破片で、外面は平行叩き目、内面には同心円状の叩き目が施される。

011号住居跡（第71図、図版38）

本住居跡では、土師質土器坏1点、須恵器坏1点、蓋1点、土師器甕3点を図示した。土師質土器坏（6）は底部破片で、赤彩が施される。7は須恵器坏で、体部下端～底部には手持ち



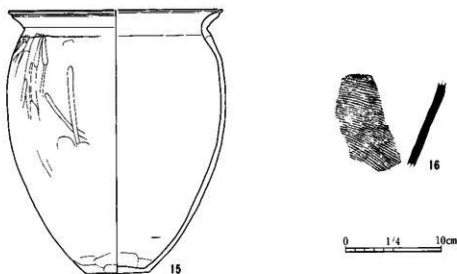
第71図 003(1~5)・011(6~11)・029(12~14)号住居跡出土土器

ヘラケズリが施される。8は擬宝珠形つまみが付く須恵器蓋で、上半は回転ヘラケズリが施される。9~10は土師器壺で、10はヘルメットを逆にしたような形態を呈し、器外面は荒れている。胴部中央には焼成後の穿孔がなされている。9・11は口唇部がつまみあげられており、

口縁帯を作出している。11は胎土中に長石粒・雲母粒を多量に含むことから、「常規型」甕と捉えられる。

029号住居跡 (第71・72図、図版38)

本住居跡では、土師器環2点、甕2点、須恵器環1点、甕1点を図示した。12・13の土師器環は底部が平底に近いものである。14の須恵器環は体部下端～底部に手持ちヘラケズリが施される。15は土師器甕で、口縁部はつまみあげられ、胴部外面はヘラケズリ後、部分的にナゲが加えられる。



第72図 029(15・16)号住居跡出土土器

第5表 奈良・平安時代土器観察表

遺構番号	探検番号	種類・器種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・調整手法の特徴	胎上	焼成	色調	備考
003号 住居跡	1	土師器 環	13.5 3.6	4/6	口縁部ヨコナゲ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	石英粒 酸化鉄粒	普通	明褐色	
	2	土師器 環	13.4 3.9	3/6	口縁部ヨコナゲ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	酸化鉄粒	普通	明褐色	底部焼成後縁割
	3	土師質上器 環	13.3 9.4 3.9	5/6	口縁部～体部内面ヨコナゲ 底部へつ切り後回転ヘラケズリ	長石粒	良好	赤褐色	赤彩 底部焼成後縁割
	4	須恵器 環	13.7 9.5 3.9	1/6	口縁部～体部内面ヨコナゲ	砂 粒	普通	灰色	
	5	須恵器 甕	—	—	胴部外面平行叩き目 胴部内面同心円状叩き後ナゲ		良好	灰色	
011号 住居跡	6	土師質土師器 環	5.1	—	体部下端～底部手持ちヘラケズリ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩
	7	須恵器 環	7.8	—	体部下端～底部手持ちヘラケズリ	長石粒	良好	青灰色	

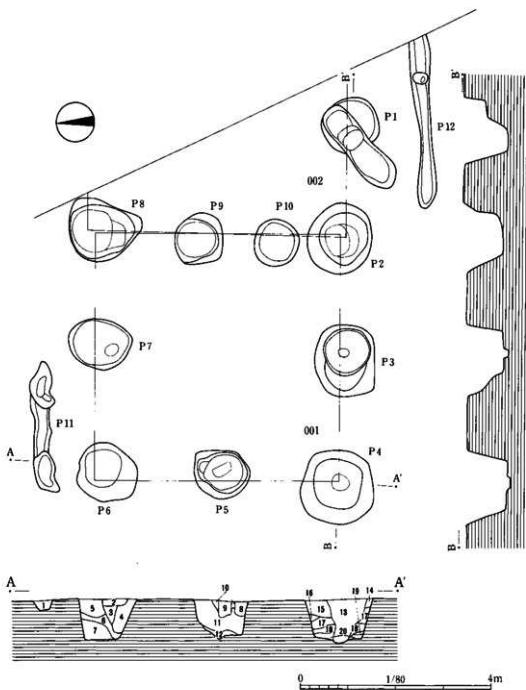
遺構番号	採区番号	種類・器種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・調整手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
011号 住居跡	8	須恵器 甕	—	4/6	体外外裏回転ヘラケズリ 体内内面ヨコナデ	砂 粒	良好	白灰色	湖西窯産
	9	土師器 甕	—	4/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	普通	暗褐色	
	10	土師器 甕	18.3 8.0 12.8	6/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	不良	褐色	体部焼成後穿孔
	11	土師器 甕	21.0	—	口縁部ヨコナデ	石灰石 長母 石長 母	普通	明褐色	常規型
029号 住居跡	12	土師器 環	13.0 — 3.9	3/6	口縁部ヨコナデ 体外外面～底部手持ちヘラケズリ 体内内面ヘラミガキ	酸化鉄粒	普通	暗褐色	
	13	土師器 環	10.0 — 3.5	5/6	口縁部ヨコナデ 体外外面～底部手持ちヘラケズリ 体内内面ヘラミガキ	酸化鉄粒	普通	赤褐色	
	14	須恵器 環	12.8 7.6 3.5	1/6	体外内外面ヨコナデ 体部下底～底部手持ちヘラケズリ		普通	灰褐色	
	15	土師器 甕	22.2 6.7 27.1	2/6	口縁部ヨコナデ 体外外面ヘラケズリ後ナデ 体内内面ヘラナデ	砂 粒	普通	赤褐色	
	16	須恵器 甕	—	—	胴部外縁位平行叩き目 胴部内面ナデ	長石 母 石長 母	普通	暗灰色	

第6節 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は北区で3棟検出されているが、古墳時代以降の所産であることは間違いないが、明確な所属時期は不明である。

001・002号掘立柱建物跡（第73図・図版13）

北区北部、2B-76・77・78・79・86・87・88・89・96・97・98・99、2C-70・80・90、3B-06・07・08・09・16・17、3C-00・01・10・11に位置する。柱穴の配置から考えると1棟ではなく、2棟の掘立柱建物跡が重複していると考えられる。東側の001号掘立柱建物跡は東側柱列（P8～P2）は3柱間（5.4m）、西側柱列（P6～P4）は2柱間（5.0m）を呈し、東側と西側で対応せず、P9・P10はほかの柱穴より浅いため、002号掘立柱建物跡の柱穴と判断し、P1を南側柱列の続きの柱穴と捉え、東西方向を桁行とする掘立柱建物跡と考えられる。東側は調査区域外に及んでおり、桁行の柱間数を知り得ないが、P5に対応する梁行中間柱穴が調査区際に検出されていないため、桁行は3柱間以上になると思われる。西側梁行の主軸方位はN-6°-E。桁行の柱間寸法はP1-P2・P2-P3が2.4m、P3-P4が2.7m。P6-P7が2.6m、P7-P8が2.3mを測る。梁行の柱間寸法はP4-P5・P5-P6とも2.5mを測る。柱穴の配置はほぼ整然としている。柱穴は不整形円形～方形を呈し、径1.0～2.5m、深さは80～90cmを測る。土層断面の観察によれば柱底が認められたのはP4のみであり、ほかの覆土はローム粒・塊を多量に含む暗褐色土・黒褐色土を主体とし、柱の抜き取りが行なわれたとみられる。また、P1を切っている溝状の土坑は柱の抜き取り穴と考えられる。P1・P8の底央付近には柱穴のあ



001・002号掘立柱建物跡土層説明

- | | |
|------------------------|-----------------------|
| 1. 黒褐色土 (ローム粒少量) | 11. 暗褐色土 (ローム粒) |
| 2. 暗褐色土 (ローム粒・黄褐色山砂) | 12. 暗黄褐色土 (ローム粒・暗褐色土) |
| 3. 濃暗褐色土 (ローム粒・黄褐色山砂) | 13. 黒褐色土 (ローム粒) |
| 4. 暗褐色土 (ローム粒・黄褐色山砂少量) | 14. 暗褐色土 |
| 5. 暗褐色土 (ローム粒) | 15. 暗褐色土 (ローム粒多量) |
| 6. 黒褐色土 (ローム粒) | 16. 黒褐色土 (ローム粒) |
| 7. 暗黄褐色土 (ローム粒主体) | 17. 濃暗褐色土 (ローム粒) |
| 8. 暗黄褐色土 (ローム粒主体) | 18. 暗黄褐色土 (ローム粒・塊主体) |
| 9. 暗褐色土 (ローム粒・黄褐色山砂少量) | 19. 黒褐色土 (ローム粒) |
| 10. 暗褐色土 (黄褐色山砂多量) | 20. 暗褐色土 (ローム粒・塊少量) |

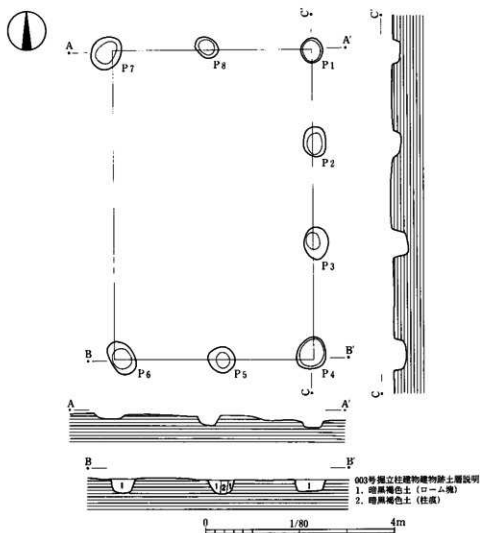
第73図 001・002号掘立柱建物跡実測図

たりが認められた。P11は雨落ち溝と考えられる。

東側の002号掘立柱建物跡の柱穴は、先述したP9・P10のほかは001号掘立柱建物跡の柱穴と重複していると考えられ、調査時の所見ではP1・P2・P8がそれに相当する。東側は調査区域外に及んでおり、全列検出されたのは西側柱列（P8～P2）のみである。西側柱列の主軸方位はN-4°-E。柱間寸法はP2-P10が1.4m、P10-P9が1.7m、P9-P8が2.2mを測る。P9・P10の規模は径約1m、深さ約60cmを測り、覆土はローム粒・塊を含む暗褐色土・黒褐色土を主体とし、柱の抜き取りが行なわれたと考えられる。また、P12は南側柱列に平行することから、雨落ち溝と考えられる。

003号掘立柱建物跡（第74図、図版13）

調査区南部、5H-28・29・38・39・48・49・58・59・68・69、5D-20・30・40・50・60

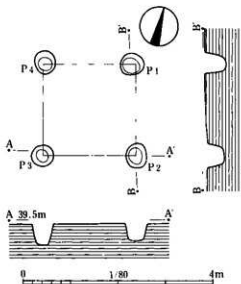


第74図 003号掘立柱建物跡実測図

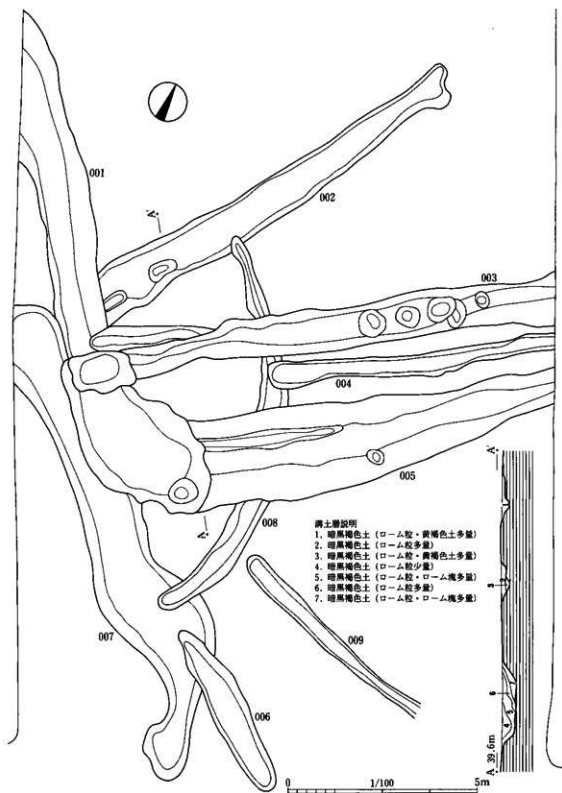
に位置し、南に面する緩斜面に立地する。所々攪乱を受け、遺存状態は不良であった。P7は018号住居跡、P1・P2は019号住居跡を切っている。西側柱列の中間の2穴は攪乱によって失われているが、側柱式の梁行2柱間(約4.1m)×桁行3柱間(6.2m)を呈すると思われ、面積は25.4㎡。桁行主軸方位はN-2°-W。桁行の柱間寸法はP1-P2が1.9m、P2-P3が2.0m、P3-P4が2.3m。梁行の柱間寸法はP4-P5が1.9m、P5-P6・P7-P8が2.1m、P8-P1が2.2mを測る。柱穴の配置はほぼ整然としており、平面形は矩形を呈する。柱穴は不整円形ないしは楕円形を呈し、径40~70cm、深さは10~30cmを測り、大きさはほぼ均一であるが、深さは北側の方が浅い傾向を示す。柱穴の据え方は検出されなかった。覆土はローム塊を含む暗黒褐色土を主体とし、P5からは柱痕が検出された。柱痕から復元すると柱材のおおよその太さは15cmと推測される。

004号掘立柱建物跡 (第75図、図版13)

調査区南部、3C-82・83・92・93に位置し、南に面する緩斜面に立地する。溝によって一部を破壊されているほかは遺存状態は良好であった。1柱間×1柱間を呈し、面積は約0.9㎡。主軸方位はN-17°-W。柱間寸法はP1-P2が1.85m、P2-P3が1.95m、P3-P4が1.84m、P4-P1が1.8mを測る。柱穴の配置はほぼ整然としており、正方形を呈する。柱穴は不整円形を呈し、径40~50cm、深さは36~45cmを測り、ほぼ均一であると言える。柱穴の底面中央からは径約20cmのあたりが観察された。覆土は記録を欠くため不明である。



第75図 004号掘立柱建物跡実測図



第76图 001-002-003-004-005-006-007-008-009号沟穴剖面图

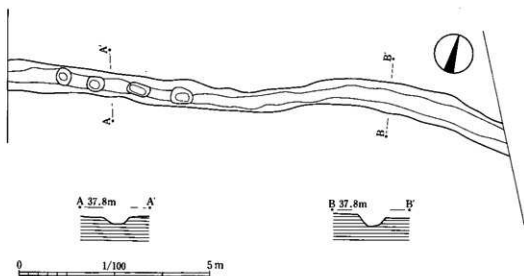
第7節 溝

001・002・003・004・005・006・007・008・009号溝（第76図）

北区北部、3B・3Cに位置し、ほぼ平坦面に立地する。調査区内から北西方向に走る溝(006・007・008・009号溝)と北東方向に走る溝(002・003・004・005号溝)が集中しており、周囲に存在する住居跡を切っている。幅40cm～2.0m、深さは20～40cmを測り、浅いものが多い。また、溝内にピットを有するものもある。覆土はローム粒・塊を含む暗黒褐色土を主体とするが、いずれも締まりがあり、埋め戻しが行なわれたと推測される。機能としては排水溝、道路等が考えられるが、即断はできない。出土遺物はほとんどなく、時期決定の決め手に欠けるが、本遺跡で検出された住居跡と同時期に存在していた可能性は低いと考えられる。

010号溝（第77図）

北区南部、7D・7Eに位置し、南に面する緩斜面に立地する。南北方向に走る溝で、周囲に存在する034・035・036・039号住居跡を切っている。幅50～80cm、深さ約20cmを測り、西側には底面に4か所ピットが穿たれている。覆土は記録を欠くため不明。遺物もほとんど出土せず、時期決定の決め手に欠ける。



第77図 010号溝実測図

第 2 章

小池新林遺跡

昭和54年度調査
小色新石器集落



第2章 小池新林遺跡

第1節 調査の方法と概要

小池新林遺跡は、西方約500mに南北に流れる木戸川の支流によって開析された南西方向に半島状に突き出した舌状台地に立地する。また、台地の付け根付近は芝山町市街地となっている。本遺跡は、昭和54年に調査された地点（奥田 1985）の南側と北西側にあたり、本来は同一の台地上に位置する同一の遺跡であるが、事業の進捗に伴い地点を分けて別年度に調査することとなった。

調査対象となったのは昭和54年調査区を挟んだ北側の緩斜面部と南側緩斜面部の2地点500m²であり、芝山町小池字三田977-1ほかに所在する。発掘調査は昭和62年11月1日から12月22日まで実施した。昭和54年の調査では道路中心杭を基準にしてグリッドを設定したが、今回もそれを踏襲し、道路中心杭の両側10mと中心杭間の20×20mを大グリッドとし、大グリッドは調査区域の北から南に向かって1～7、西から東にA・Bとし、これを組合せてA1、A2、A3と呼称した。さらにその中を第79図に示したように2m四方の小グリッドに分割して00～99

00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
10	11								
20		22							
30			33						
40				44					
50					55				
60						66			
70							77		
80								88	
90									99

0 1/500 20m

第79図 小グリッド分割図

の番号を付け、これに先の大グリッドの名称を組合せてA1-00、A1-01などと呼称した。なお、A2-05グリッドの北西隅の点の座標は公共座標X=-34.278473、Y=52.618197、A6-05グリッドの北西隅の点の座標は公共座標X=-32.523846、Y=51.967842にそれぞれ対応する。

発掘調査は、上層については昭和54年調査区と連続して遺構が検出されることが予想されたことと、東側の隣接する箇所が芝山町文化センター建設に伴い三田遺跡として調査され（福岡1989）（第78図）、こちらとも連続する遺構が検出されることが予想されたため、確認調査を行わず全域本調査範囲とし、表土除去を行なった。その結果、調査区のほぼ全域から遺構が検出され、遺構の調査を行った。上層遺構の調査後、下層の確認調査を対象面積の4%、20m²行ったが、先土器時代の遺物は検出されなかった。

検出された遺構のうち、昭和54年の調査区及び三田遺跡において検出されている同一の遺構については、調査と記録の正確性を期すため既調査部分まで拡張して調査を行った。なお、遺構番号については昭和54年調査と連続し、三田遺跡とは同一の遺構であっても異なる遺構番号を付している。

第2節 縄文・弥生時代

1. 遺構

001号土坑 (第80図)

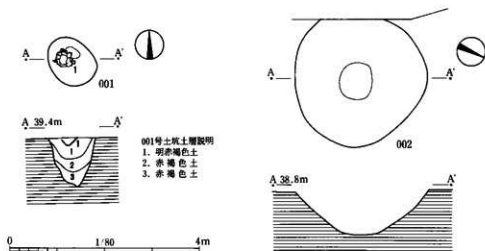
調査区中央部A 5-75に位置する。開口部は長径45cm、短径55cm、底面は長径15cm、短径10cmで楕円形を呈し、深さは60cmである。覆土はローム粒を多く含んでおり、人為的埋没であろう。

遺物は、上部から縄文後期末の深鉢型土器の胴部下半部が検出された。

002号土坑 (第80図)

調査区北西部A 1-01・02・11・12に位置する。開口部は直径1.40m、底面は直径30cmの円形、深さは90cmである。全体にゆるやかな褶り鉢形を呈する。

遺物は、縄文後期後半の土器片が一点検出された。



第80図 001・002号土坑実測図

2. 遺物

遺構出土土器

001号土坑 (第81図、図版43)

1は極端に小さい底面をなし、強く外反して立ち上がる底部である。RL縄文が施文され、底部近くは縦ミガキがなされている。内面には擦痕が残されている。加曾利B式の新段階ないし曾谷式と思われる。

002号土坑 (第81図、図版43)

2は口縁部縄文施文のもので、端部に刻文帯を有し、加曾利B式の新しい段階の波状口縁の

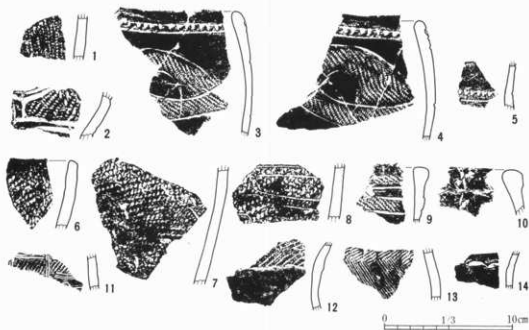
深鉢形土器であろう。



第81図 001(1)・002(2)号土壌出土土器

グリッド出土縄文・弥生土器 (第82図、図版43)

1はRLの縄文をもつもので、燃糸文系土器である。2は縄文を地文に沈線を伴う隆起線を配するもので、加曾利E式のキャリバー形土器の口縁部である。3～5は入組文様の磨消縄文(RL)の配されたもので、口縁部が内傾し、頸部がくびれる瓢形を呈するものと考えられる。口縁部上端と頸部には三角形キザミ目からなる刻文帯が巡る。これらは曾谷式であろう。6・7はLR縄文施文、8は縄文に加え沈線を有しており、加曾利B式の粗製土器であろう。9は沈線を添えて形成した隆起帯上にRL縄文を施文しており、後期安行式にならう。10は内湾する紐線文を



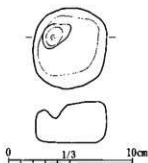
第82図 グリッド出土縄文・弥生土器

有するもので、安行Ⅲ式の粗製土器である。

11～14は北関東の影響の濃い弥生時代後期の土器である。11は櫛歯状沈線による区画をなすもので、区画内には縄文も充填されている。12は折り返し口縁にLRの付加条的な縄文を有している。胎土中には石英・長石粒が顕著に認められる。13は肩の部分で、無節の縄文と細かいRの燃糸文が羽状施文されている。14は無節縄文原体の結節部による綾縹文のみられるものである。

縄文時代石器 (第83図、図版43)

1はグリッドから出土したもので、安山岩製の磨石である。側縁に敲打痕状の磨痕が認められる。長さ6.0cm、幅6.0cm、厚さ3.1cm、重量223.5gを測る。



第83図 縄文時代石器

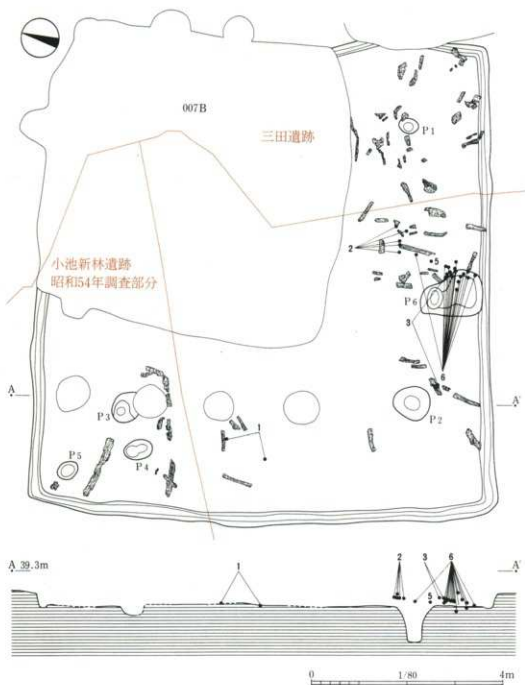
第3節 古墳時代

1. 遺構

007A号住居跡 (第84図、図版40)

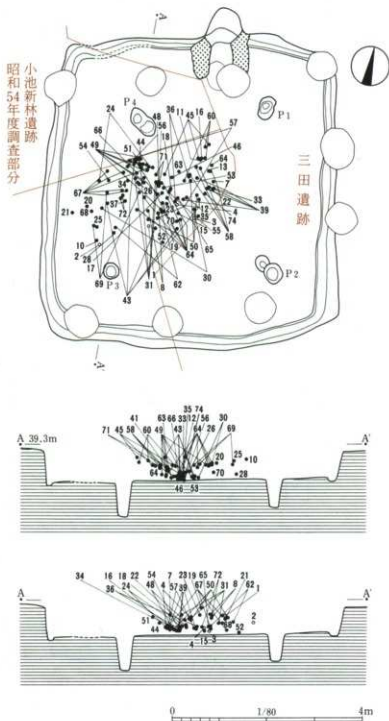
調査区北部、A5-06・07・08・16・17・18・25・26・27・35・36・37・38・45・46・47・48・49・56・57・58・59、B5-40・50に位置し、平坦面に立地する。本住居跡の東側約2/5は三田遺跡の調査区(080号住居址)、北西側1/5は昭和54年の成田松尾線の調査区に属しており、それぞれ今回の調査部分とつなげて図示した。北東側1/3は007B号住居跡に切られており、004号掘立柱建物跡にも部分的に重複していた。耕作による攪乱を受け、遺存状態は不良であった。規模は南東壁で9.5m、南西壁で9.9mを測り、正方形を呈すると考えられる。カマド・炉などが検出されないうえに主軸方位は不明だが、南西壁はN-19°-W方向に向いている。床面上には炭化材が集中しており、火災住居である可能性が高い。覆土は大きく2層に分かれ、上層は明褐色土、下層は炭化物を含む赤褐色土が堆積していた。床面はハードルーム層で全体に軟弱であった。壁高は北西壁・南東壁で32cm、南西壁で23cmを測り、約75度で立ち上がる。周溝は未調査部分を除いて全周し、最大幅32cm、深さ15cmを測る。ピットは全部で6か所検出された。

P1～P3が支柱穴と考えられ、P1は径約30cm、深さ約72cm、P2は径約80cm、深さ約80cmを測り、P3は南東側が003号掘立柱建物跡の柱跡によって破壊されているが、径約60cm、深さ20cmを測り、やや不均一な掘り方である。柱間寸法はP1-P2が5.7m、P2-P3が6.1mを測る。配置は北東側の1か所が検出されないため不明である。P4は南東壁中央下に位置する貯蔵穴で



第84図 007A号住居跡実測図

ある。周溝を挟るように構築されており、開口部では琵琶形状を呈し、長軸1.3m、短軸1m、深さ30cmを測る。両側は張り出し状になっており、底面はピット状に掘り込まれている。覆土



第85図 007B号住居跡実測図

はローム塊を含む赤褐色土を主体とする。P5はP3の西側約1mに位置するビットで、最大径約60cm、深さ約10cmを測る。P6は北西コーナー下に位置するビットで、径約50cm、深さ約5cmを測る。P5・P6ともその機能は不明である。

遺物は、P4周辺を主体に覆土下層～床面にかけてまばらに出土した。床面直上から出土した土師器環(1)・土師器甕(6)は本住居跡に伴うものと考えられる。

007B号住居跡(第85図、図版40)

調査区南部、A5-08・09・18・19・27・28・29・37・38・39・48・49、B5-10・11・20・21・30・31・40に位置し、ほぼ平坦面に立地する。本住居跡の北東側約1/2は三田遺跡の調査区(081号住居址)、北西側1/4は昭和54年の成田松尾線の調査区に属しており、それぞれ今回の調査部分とつなげて図示した。部分的に004号掘立柱建物跡に破壊されていたが、そのほかは遺存状態は良好であった。規模は北壁で5.6m、東壁5.4m、南壁・西壁で6.0mを測り、不整形を呈する。主軸方位はN-15°-E。覆土は炭化物粒を含む赤褐色土・暗赤褐色土が主体で、自然堆積と考えられる。床面はハードローム層で、ほぼ平坦であった。壁高は北壁が68cm、東壁72cm、南壁・西壁で60cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝はカマド内を除いて全周し、最大幅36cm、深さ約12cmを測る。ビットは主柱穴が4か所検出された。主柱穴はP1～P4で、規模は径30～50cm、深さはP1が60cm、P2が54cm、P3が55cm、P4が70cmを測る。その内P2・P4は掘り方が重複しており、内側の掘り方は柱の抜き取り穴と考えられる。柱間寸法はP1-P2が3.7m、P2-P3が3.4m、P3-P4が3.1m、P4-P1が2.6mを測る。配置は不整形を呈する。カマドは北壁中央からやや東寄りに位置する。詳細は『三田遺跡発掘調査報告書』に掲載したい。

遺物は、狭小な調査範囲にかかわらず、覆土全層中から多量に出土した。遺存状態の良好なものは少なく、ほとんどが流入ないしは投棄されたものと思われる。

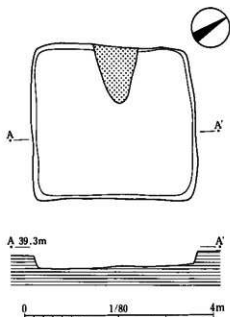
012号住居跡(第86図)

調査区北部、A5-84・85・86・94・95・96、A6-05に位置する。平坦面に立地する。耕作による攪乱を受け、遺存状態は不良であった。規模は北西壁で3.2m、北東壁で3.0m、南東壁で3.3m、南西壁で3.1mを測り、不整形な方形を呈する。主軸方位はN-62°-E。覆土は黒褐色土が主体であった。床面は全体的に軟弱であった。壁高は約25cmを測り、約70度で立ち上がる。周溝及びビットは検出されなかった。カマドは北西壁のほぼ中央に位置し、攪乱によって袖部は遺存しておらず、焼土を含む暗赤褐色土の堆積のみみられたのみである。壁外・底面の掘り込み、火床面も認められなかった。

遺物は覆土中からわずかに出土したが、ほとんどが細片であった。

013号住居跡(第87図、図版40)

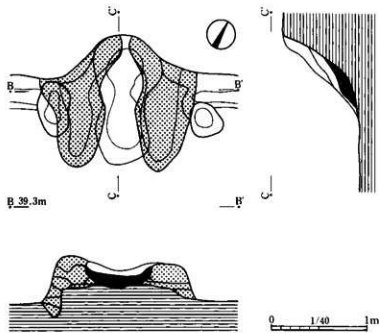
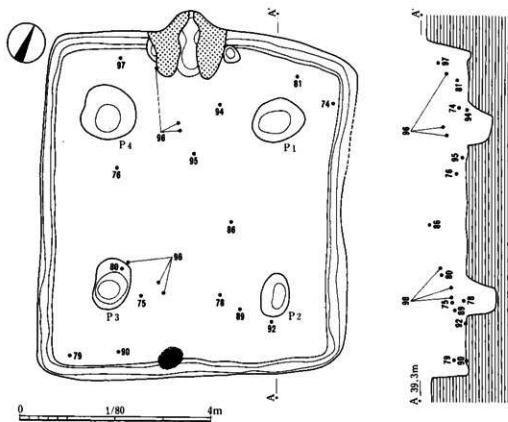
調査区南部、A5-83・84・85・86・93・94・95・96、A6-03・04・05・06・13・14・15・16に位置する。ほぼ平坦面に立地する。012号住居跡と重複し、北側覆土上面及び北東壁の一部



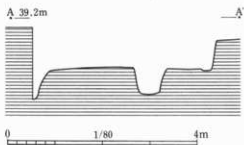
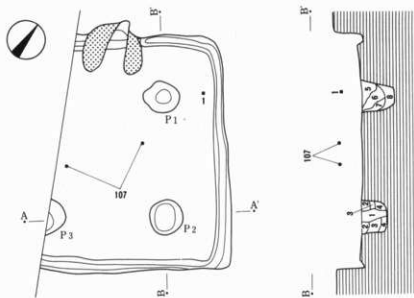
第86図 012号住居跡実測図

は破壊されていた。そのほかは遺存状態は良好であった。規模は北西壁で6.4m、北東壁で6.0m、南東壁で6.2m、南西壁で6.8mを測り、縦長の方形を呈する。主軸方位はN-24'-W。覆土はローム粒・塊を含む赤褐色土・暗赤褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。床面はローム土を主体とする黄褐色土によって約10cmの厚さの貼床がなされていた。壁高は北西壁が92cm、北東壁が約1m、南東壁・南西壁で80cmを測り、約75度で立ち上がる。周溝はカマド内を除いて全周し、最大幅48cm、深さ約5cmを測る。ピットは主柱穴が4か所検出された。P1~P4は規模は径60cm~1.2m、深さはP1が52cm、P2が64cm、P3が55cm、P4が80cmとややばらつきがみられる。柱間寸法は各柱間間とも3.6mを測り、配置は正方形を呈する。カマドは北西壁中央からやや南西寄りに位置する。遺存状態は良好である。主軸方位はN-22'-Wで、住居跡のそれよりやや東に振れている。壁外へは約80cm掘り込み、全長約1.4m、幅約1.6mを測る。底面の掘り込みは焚口から煙道下部に施されており、床面からの深さは最大10cmを測る。袖部は壁面の掘り込みの側面から燃焼部と一旦くびれて直線的に伸びており、長さ約1.0m、床面からの高さ約35cmを測る。構築材は砂質粘土を主材とする。両袖下、周溝との境部分には径約40cm、深さ約30cmのピットが穿たれており、その中に袖材が入り込んでいることから、カマド構築に際して掘り込んだものと思われる。両袖部の内側は被熱して赤化していた。燃焼部~煙道部底面直上には焼土が、その上には焼土・炭化物粒を含む灰褐色土が堆積していた。煙道部は段をなし、約60度で立ち上がる。

遺物は全体から土器が出土したが、覆土中のものが多く本住居跡に確実に伴うと考えられる

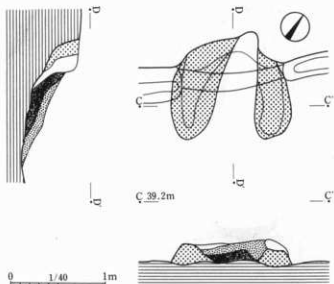


第87図 013号住居跡・カマド実測図



014号住居跡土層説明

1. 赤褐色土
2. 赤褐色土 (ローム塊少量)
3. 明赤褐色土 (ローム塊多量)
4. 赤褐色土 (ローム塊少量)
5. 明赤褐色土 (橙色スコリア粒)
6. 赤褐色土 (スコリア粒多量)
7. 明赤褐色土 (ローム塊多量)
8. 赤褐色土



第88図 014号住居跡・カマド実測図

ものは南東壁下床面直上から出土した須恵器高台付坏(90)、P2際から出土した須恵器平瓶(92)のみである。

014号住居跡(第88図、図版41)

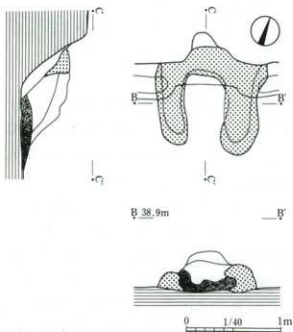
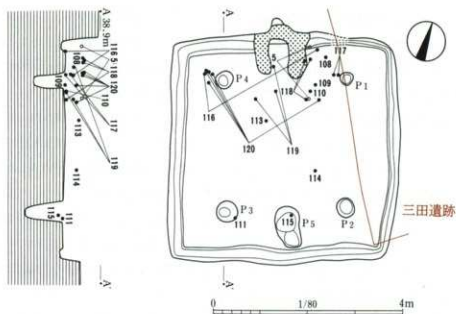
調査区中央部、A5-42・43・51・52・53・61・62・63・71・72・73に位置し、南側に面する緩斜面に立地する。南西側約1/3は調査区域外にかかっていたため調査できなかった。規模は北東壁で4.7mを測り、方形を呈すると推測される。主軸方位はN-38°-W。覆土は主として2層に分かれる。上層は黒色土を含む赤褐色土、下層はローム塊を少量含む暗赤褐色土が堆積しており、自然堆積と考えられる。床面は褐色土によって厚さ5cmほど貼床がなされていた。壁高は北西壁・南東壁で約60cm、北東壁で約62cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝は検出部分ではカマド内を除いて全周しており、最大幅48cm、深さ3cmを測る。ピットは全部は主柱穴が3か所検出された。P1~P3は径約70cm、深さ約50~70を測る。P3は北東側約1/2のみしか検出できなかった。P2の覆土は底面中央から径約20cmの柱状に赤褐色土が堆積しており、柱痕と考えられるものである。柱間寸法はP1-P2・P2-P3とも2.5mを測る。配置は北西側の1か所が検出されないため不明である。カマドは北西壁に位置する。遺存状態は比較的良好であった。主軸方位はN-23°-Wで、住居跡のそれに比してかなり東側に振れている。壁外には約35cm掘り込み、全長約1.1m、幅約1.3mを測る。袖部は壁から約1.0m、床面からの高さは約25cmを測る。構築材は山砂を主体とした赤褐色土であった。底面への掘り込みはほとんど認められなかった。燃烧部底面には約10cmの厚さで焼土が、その上には焼土を多く含む暗赤褐色土が堆積していた。煙道部は約70度で立ち上がる。

遺物は出土状態をほとんど図示できなかったが、覆土上層~床面直上にかけて土器、石製品が出土した。

016号住居跡(第89図、図版41)

調査区南部、A6-46・47・56・57・58・59・66・67・68・69・76・77・78に位置する。南に面する斜面に立地する。本住居跡跡の東側約1/6は三田遺跡の調査区(082号住居址)に属しており、今回の調査部分とつなげて図示した。遺存状態は良好であった。規模は北西壁で4.6m、北東壁・南西壁で4.4m、南東壁で4.5mを測り、ほぼ正方形を呈する。主軸方位はN-17°-W。覆土は主として2層に分かれ、上層が暗赤褐色土、下層がローム粒を含む暗褐色土で自然堆積と考えられる。床面はローム粒主体の暗黄褐色土によって貼床がなされていた。壁高は北西壁で76cm、北東壁57cm、南東壁で44cm、南西壁で67cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝はカマド内を除いて全周し、最大幅40cm、深さ約8cmを測る。ピットは5か所検出された。主柱穴はP1~P4で、規模は径28~45cm、深さはP1が52cm、P2が80cm、P3が66cm、P4が64cmを測る。柱間寸法はP1-P2・P2-P3が2.6m、P3-P4が2.7m、P4-P1が2.8mを測る。配置は不整方形を呈する。P7は南東壁下に位置する不整な楕円形を呈するピットで、長軸径約80cm、短

軸径約50cm、深さ15cmを測り、出入口部に伴う柱穴と考えられる。覆土はローム塊を含む赤褐色土が堆積していた。カマドは北西壁中央に位置する。遺存状態は良好である。主軸方位はN-25°-Eで、住居跡のそれよりやや西側に振れている。壁外へは約60cm掘り込み、全長約



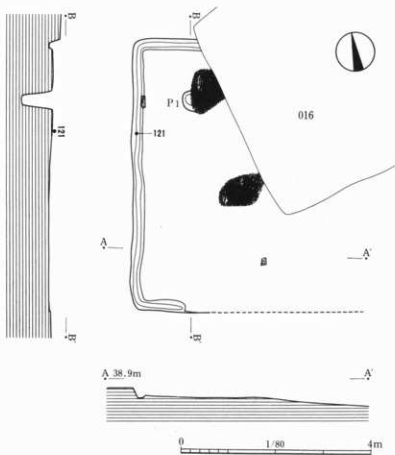
第89図 016号住居跡・カマド実測図

1.2m、幅約1.2mを測る。底面の掘り込みはとくに認められなかった。袖部は壁面の掘り込みの側面から主軸ラインに沿って直線的に伸びており、長さ約90cm、床面からの高さ約30cmを測る。懸け口と煙道部の間の天井部は遺存していた。構築材は砂質粘土を主材とする。焚口～燃燒部底面直上には焼土が堆積し、そのほかはローム塊を含む赤褐色土が主体であった。煙道部は約55度で立ち上がる。

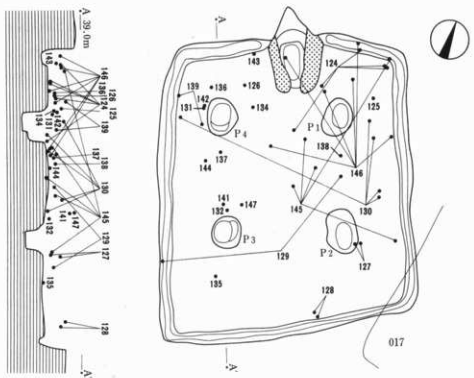
遺物は、カマド周辺にややまとまって土器、土製品が出土した。本住居跡に確実に伴うものと考えられるのはカマド右手前の土師器坏 (109) のみであり、カマド前の鉢 (118)・甌 (120) などは流れ込みもしくは投棄されたものである可能性が高い。

017号住居跡 (第90図)

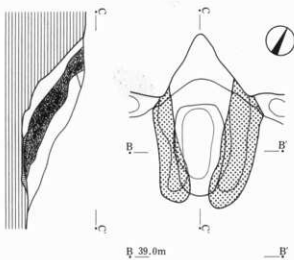
調査区中央やや南寄り、A6-46・55・56・64・65・66・74・75・76・77・86に位置し、南に面する斜面に立地する。北東側1/3は016号住居跡に切られ、斜面下方の南側は欠失していた。規模は全辺遺存の西壁で5.6mを測り、方形の住居跡であったと考えられる。主軸方位はカマドが検出されないので不明だが、西壁はN-12°-W方向である。覆土は攪乱によってほとんど遺



第90図 017号住居跡実測図



0 1/80 4m



B 39.0m

0 1/40 1m



第91図 018号住居跡・カマド実測図

存していなかったが、ローム塊を多く含む暗赤褐色土を主体とする。床面はハードローム層であるが、南東側はほとんど遺存していなかった。壁高は最大20cmを測る。周溝は南壁の途中で途切れている。最大幅28cm、深さ5cmを測る。ピットは1か所検出された。P1は径約40cm、深さ約60cmを測る。

遺物は、覆土中からわずかに土師器が出土した。西壁周溝内から出土した土師器坏(121)は本住居跡に伴うものと判断される。

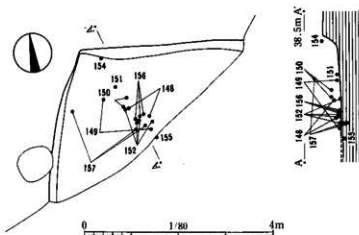
018号住居跡(第91図、図版41)

調査区南部、A6-33・34・35・42・43・44・45・52・53・54・55・62・63・64・65に位置する。南に面する斜面に立地する。南西コーナーを017号住居跡に切られているほかは、遺存状態は良好であった。規模は北西壁で4.8m、北東壁で5.2m、南東壁で5.4m、南西壁で6.0mを測り、方形を呈する。主軸方位はN-25°-E。覆土は炭化物粒、ローム塊を含む赤褐色土、暗赤褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。床面はハードローム層で、壁高は北西壁で72cm、北東壁で62cm、南東壁で56cm、南西壁で58cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝はカマド内を除いて全周し、最大幅37cm、深さ約5cmを測る。ピットは、しっかりと掘り方の支柱穴が4か所検出された。柱痕は検出されなかった。規模は径60cm~1.0m、深さはP1が37cm、P2が34cm、P3が37cm、P4が50cmを測る。柱間寸法はP1-P2が2.5m、P2-P3・P4-P1が2.6m、P3-P4が2.4mを測る。配置は不整形を呈し、カマドは北西壁中央やや東寄りに位置する。遺存状態は良好である。主軸方位はN-28°-Eで、住居跡のそれよりやや東側に振れている。壁外へは約70cm掘り込み、全長約1.8m、幅約1.2mを測る。底面の掘り込みは燃焼部に施されており、長軸径約90cm、短軸径約55cmを測る楕円形を呈し、床面からの深さは最大10cmを測る。袖部は、壁面の掘り込みの付け根から内湾しながら直線的に伸びており、長さ約1.2m、床面からの高さ約22cmを測る。構築材は焼土と山砂の混成土を主材とする。焚口から燃焼部底面直上には焼土が堆積し、そのほかは焼土と山砂を含む赤褐色土が主体であった。煙道部は約40度で立ち上がる。

遺物は、北東側にややまとまって土器が出土した。本住居跡に確実に伴うものと考えられるのは南西コーナー側の須恵器蓋(135)、カマド左手前の須恵器蓋(134)、西壁下の土師器甕(144)のみであり、それ以外の土器は伴うかどうか即断できない。

019号住居跡(第92図)

調査区南部、A6-73・76・77・78・83・84・85・86・87・88・93・94・95・96・97・98・99に位置する。南に面する斜面に立地する。攪乱と削平が著しく、北東コーナーは016号住居跡に切られていた。遺構確認時で斜面下方の南東側のほとんどの壁面及び覆土が失われており、壁面と床面の一部を検出したのみで、本来の規模は不明。主軸方位はカマドが検出されないため不明だが、西壁はN-20°-E方向に向いている。覆土はローム塊を少量含む暗赤褐色土が主体



第92図 019号住居跡実測図

である。床面はハードローム層で南東側はほとんど削平されていた。壁高は北西壁で72cm、北東壁で26cmを測る。周溝・ピットは検出されなかった。

遺物は覆土下層～床面直上にかけて出土し、148・150の土師器環、154の甕以外は本住居跡に確実に伴うものと考えられる。

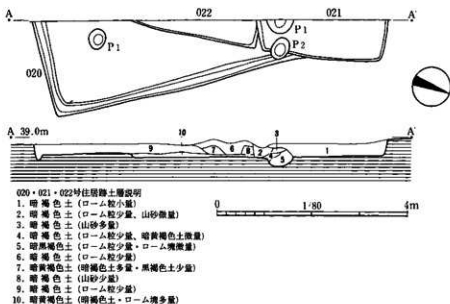
020号住居跡 (第93図)

調査区北西部、A 2-21・22・31・32・41・42・51・52に位置する。西側は調査区域外に及んでおり、北側は021号住居跡側に切られ、南東側コーナーを中心とする部分しか調査することができなかった。規模は全辺検出された壁面がないため不明。主軸方位もカマドが検出されないため不明だが、北東壁はN-31°-W方向に向いている。覆土は暗褐色土を主体とする。床面はローム塊を多量に含む暗黄褐色土によって貼床がなされており、全体に軟弱であった。壁高は南西壁で21cm、北東壁が20cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝は検出部分では全て施されており、最大幅26cm、深さ約10cmを測る。ピットは主柱穴が1か所検出された。P1は径約40cm、深さ35cmを測る。

遺物は、覆土中から土師器片が少量出土したのみで、図示できるものはなかった。

021号住居跡 (第93図)

調査区北西部、A 2-11・12・21・22に位置する。西側は調査区域外にかかっており調査できず、東壁を中心とする僅かな部分を検出したのみである。規模は全辺検出された東壁で2.5mを測る。主軸方位はカマドが検出されないため不明だが、東壁はN-13°-W方向に向いている。覆土はローム粒を含む暗褐色土を主体とする。床面はハードローム層で、比較的堅緻であった。壁高は北壁が約35cmを測り、約80度で立ち上がる。周溝は検出部分では施されていない。ピットは2か所検出された。P1は東側1/2は調査区域外に及んでいたが、径約55cm、深さ約18



第93図 020・021・022号住居跡実測図

cmを測る。P2は東壁南東側コーナー付近で検出されたピットで、東壁を切っていることから、本住居跡に伴う可能性は低いと思われる。規模は径40cm、深さ約25cmを測る。

遺物は土師器が少量出土したが、図示したもの環(157)甕(158)は覆土中から出土したものである。

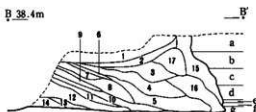
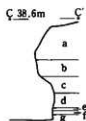
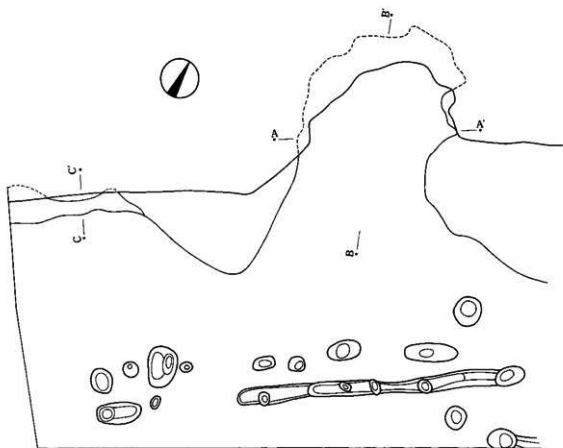
022号住居跡(第93図)

調査区北西部、A2-21・22・31・41に位置する。西側のほとんどが調査区域外に及んでおり、上面は020号住居跡に削平され、北側は021号住居跡に切られており、北東側コーナーを中心とする僅かな部分を検出したのみである。規模は全辺検出された壁面がないため不明。主軸方位はカマドが検出されないため不明だが、東壁はN-8°-W方向に向いている。覆土は全て020号住居跡の貼床によって埋められていた。床面はハードローム層で、比較的堅緻であった。壁高は東壁が約7cmを測り、約55度で立ち上がる。周溝は検出部分では施されていない。ピットは検出されなかった。

遺物は、土師器片が出土したが、細片がほとんどで図示できるものはなかった。

粘土採掘坑(第94図、図版42)

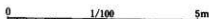
調査区南端の南側斜面に019号住居跡床面下調査時に検出されたもので、貼床下にハードローム層が検出されないことから掘り下げたところ、ローム粒・塊を含む赤褐色土が厚く堆積しており、床面下約1.5mで粘土層に達した。この性格を明らかにするために周囲を拡張したところ、同様な状況が見られ、南側斜面の標高37.5m付近にテラスを形成していることが判明した。このテラス面を追うように北側に拡張を行なったところ、ローム層以下の自然堆積の立ち上がり



- a. 明赤褐色土 (ハードローム層)
- b. 赤褐色土 (第2黒色帯立川層下層)
- c. にぶい赤褐色土 (武蔵野ローム層)
- d. 明赤褐色土 (東京バミスを含む)
- e. 明赤褐色土
- f. にぶい赤褐色土
- g. 灰褐色土 (粘土質層)

粘土採掘坑土層説明

- 1. 明赤褐色土 (ローム塊少量)
- 2. 赤褐色土 (ソフトローム多量)
- 3. 暗赤褐色土 (ソフトローム多量)
- 4. 明赤褐色土 (ソフトローム)
- 5. にぶい赤褐色土
- 6. にぶい赤褐色土
- 7. 明赤褐色土 (ハードローム多量)
- 8. にぶい赤褐色土 (ソフトローム多量)
- 9. 明赤褐色土 (ハードローム)
- 10. 明赤褐色土 (ハードローム)
- 11. にぶい赤褐色土
- 12. 明赤褐色土 (ソフトローム)
- 13. 灰褐色土 (粘土質)
- 14. にぶい褐色土 (粘土質)
- 15. 明赤褐色土 (ソフトローム多量)
- 16. 明赤褐色土 (ハードローム多量)
- 17. 明赤褐色土 (ハードローム)



第94図 粘土採掘坑実測図

が見られ、ほぼ019号住居跡の下部は瘤状に北側に突出していた。底面は上面よりオーバーハングしており、横に掘り進んだものと考えられる。また、その前面には、性格不明の東西方向に不規則に並ぶ深さ30～50cmのピット及び、布掘状の溝が検出された。底面は常総粘土層（下末吉ローム層）であり、層厚約20cmのうち、上面の約10cmが掘り込まれており、これを採掘することを目的とした粘土採掘坑であると考えられる。採掘方法は基本的に斜面部からの横坑によって採掘されたものと考えられる。覆土は先述したようにローム粒・塊を主体とするもので、埋め戻しがなされたものと思われる。よって、016・019号住居跡は埋め戻し土上に構築されており、それより古いと言える。

遺物は古墳時代後期の土師器片少量が出土しており、先述した切り合い関係からも本跡を古墳時代の所産と判断した。

2. 遺物

007A号住居跡（第95・107図、図版44・50）

本住居跡では、土師器環2点、須恵器環2点、土師器甕2点、不明鉄製品1点を図示した。土師器環（1・2）は、丸底で口縁部が内湾し、赤彩されている。須恵器環（3）は受部を有し、立ち上がりが高く端部には内傾する凹面がみられる。体部外面は1/2以上回転ヘラケズリが施され、内面はヨコナデで仕上げられている。4も須恵器環身の破片であるが、3と比べて、体部と口縁部の境が屈曲せず直線的で、受部の突出も小さい。5は甕の底部破片である。底部には木葉痕が残され、胴部下半にはわずかにハケ目が観察される。6は球胴の甕で、口縁部は中位までヘラケズリが施され、それより上位は外傾するものである。

007B号住居跡（第95～99・105・107図、図版44～46・50）

出土遺物はひじょうに多く、土師器環18点、手捏ね土器1点、高環13点、甕27点、壺4点、甌1点、須恵器蓋3点、坏1点、土玉2点、土製支脚2点、刀子1点を図示した。土師器環（1～51）は、体部と口縁部の境に稜を有し、口縁部が内傾するもの（7～10）、内傾するもの（13・23）、内傾気味に直立するもの（11・12・14～17）、体部の中位で屈曲し、外傾しながら立ち上がるもの（18・19）、体部の下位で屈曲することによって底部を形成し、口縁部が外傾気味に立ち上がるもの（21～24）がある。ヘラミガキが加えられるものが多いが、7・8・11・12・15・18・22・23は漆仕上げがなされ、9は内面黒色処理、20は内外面赤彩が施される。20は007A号住居跡から混入した可能性が高い。25・26は須恵器蓋で、25は口縁部が折り返し気味に内傾し、上部はヘラ切り後、回転ヘラケズリが施される。26は25より口径が小さく全体の1/2に回転ヘラケズリが施される。27は須恵器環身で、受部の立ち上がりが低い。28は須恵器蓋のつまみで、接合面で脱落したものである。中央がやや突出するリング状を呈する。29は平底の手捏ね土器で、外面に巻き上げ痕が観察される。30～41は土師器高坏で、30は体部と口縁部との境が

不明瞭で、内面にはヘラミガキが加えられる。31は体部と口縁部との境に稜を有し、内湾気味に立ち上がるものである。脚部の内面に赤彩痕が観察されるが外面にははっきりしない。32・33は扁平な体部に口縁部が外反するもので、内面ヘラミガキ、黒色処理、外面赤彩が施される。34は体部と口縁部の境に明確な稜を形成するもので、外面は赤彩される。35は口縁部が短いや小形のもので、内面ヘラミガキ、黒色処理、外面赤彩が施される。36は体部下半の破片である。37～42は脚部で、39以外は赤彩が施される。40は内面にシボリ目が観察される。43～59・61・64～71は壺で、43・44・51・52は長胴、45・46は中胴、47・48は大形の壺、49・50・58は小形の壺である。52～57は口縁部破片、61・64～66は底部破片である。67～71は「常総型」壺である。67は口唇部を上方向につまみあげるもので、段を有する。68は胴部破片で、縦位のヘラミガキが施される。69～71は底部破片である。59・60・62・63は壺で、59は口縁部が外傾気味に直立する、60は口縁部が外反するものである。62・63は体部下半～底部の破片である。72は甔の開口部破片である。

012号住居跡（第99図）

出土遺物は細片が多く、須恵器壺1点のみしか図示できなかった。73は外面平行叩き目、内面には同心円状叩き目がみられる。

013号住居跡（第99・100図、図版47）

本住居跡では土師器坏7点、盤2点、須恵器蓋7点、高台付坏2点、平瓶1点、甕1点、壺1点を図示した。74～80は土師器坏で、74は口縁部が外傾、75は内傾するもので、いずれも口径が小さい。76は丸底で扁平なもので、口縁部は弱い稜を形成して立ち上がる。内面には丁寧なヘラミガキが施される。77～79は扁平な半球形の坏、80は深身のものである。81・82は土師器盤で、81低い弧状の体部に口縁部が外傾気味に直立するもので、内外面赤彩がなされる。82はひじょうに扁平なもので、底部はほぼ平らで、内面にはヘラミガキが施される。83～89は須恵器蓋である。83・84は擬宝珠形つまみが付される蓋である。85～87は内面にかえりを有する蓋で、85のかえりは口縁部とほぼ同じ高さ、86・87のかえりは短いもので、いずれも口縁部より下には突出しない。88・89は端部が折返されるものである。90・91高台付坏である。90は口縁部直下に一条の弱い沈線が巡り、高台はふんばり気味、底部は高台より下方に突出するもので、底部はヘラ切り後、回転ヘラケズリが施される。91も底部が突出する可能性が高い。92は須恵器平瓶で、頸部を欠くが、頂部内面には閉塞粘土板の接合痕がみられ、外面には濃緑色の降灰釉がかかっている。93は甕の口縁部破片で、外面は段を有し、櫛描波状文が施されている。94は須恵器壺の胴部破片で、内面が擦れており転用された可能性が高い。95・96は土師器壺の口縁部、97・98は土師器壺の底部破片である。

014号住居跡（第100・101・106図、図版47・50）

本住居跡では、土師器坏1点、壺1点、須恵器蓋1点、坏3点、土師器壺3点、磨石1点、

敵石一点を図示した。土師器坏(99)は半球形のものである。100は土師器碗で、内面には丁寧なヘラミガキが施され、口縁部は外反する。形態から金属器を模したものと考えられる。101は須恵器蓋の端部破片で、かえりを有するものである。102~104は須恵器坏で、102は箱形、103はやや浅いもので、3個体とも雲母を含むよく似た胎土で、底部はヘラ切り後、回転ヘラケズリが施されている。105~107は壺で、105は球胴、106は上下に突出する口縁帯を有する口縁部~体部破片である。107は外面に縦位のヘラミガキが施されるもので、底部には木葉痕が残されている。106・107は胎土中に長石粒・雲母粒を多量に含むことから、「常総型」壺と判断される。

016号住居跡(第101・102・105図、図版47・48・50)

本住居跡では、土師器坏3点、高坏3点、ミニチュア土器1点、壺3点、鉢2点、甗1点、土製支脚1点を図示した。108~110は土師器坏で、108・109は半球形を呈するが下半部に横方向のヘラケズリによって稜を作出している。内外面ともヘラミガキが加えられ、漆仕上げがなされている。110は体部と口縁部との境に稜を有するもので、口縁部は直立気味に外反する。111~113は高坏である。111は脚端部を欠くもので、内面はヘラミガキ、黒色処理、外面は赤彩がなされる。112・113は脚部である。114はミニチュア土器で、体部~口縁部にかけて内側に屈曲し、内外面に赤彩がなされている。115~117は壺で、115は球胴、116も胴の張るものである。117は小形の壺である。118・119は鉢で、118はほぼ直立する体部に口縁部はやや外傾するものである。120は甗で、最大径を口縁部に有する砲弾形を呈するものである。

017号住居跡(第102図、図版48)

本住居跡では土師器坏1点、手捏ね土器1点、壺1点を図示した。121の坏は見込に㊦状の赤彩が施され、口縁部が内傾するものである。122の手捏ね土器は内外面指頭によるナデで調えられている。123は小形の壺である。

018号住居跡(第102・103図、図版49)

本住居跡では、土師器坏6点、盤1点、須恵器蓋7点、高台付坏2点、坏1点、瓶1点、壺1点、土師器壺5点を図示した。土師器坏は平底のもの(124)、器高が低く弧状を呈するもの(125~127)、砂を含まない精選された胎土で作られ、内面に暗文を有するもの(128・129)がある。128・129は畿内産土師器坏である。128はいわゆる坏Aで、胎土は砂をほとんど含まない緻密で精選されたものである。口縁端部の断面形は方形を呈し、体部外面には横方向のヘラミガキ、体部下端はヘラケズリ後ヘラミガキが施される。体部内面はヨコナデ後、放射2段暗文が施される。これを奈良国立文化財研究所の記述法に従えば、口縁部をよこなでし、底部をケズリ(b手法)、口縁部だけをヘラミガキする(1手法)、b1手法によって調整が行なわれている。129も坏Aであるが、128より器高が低いものである。内外面とも磨耗・剥落が著しく、図示した断面形、特に口縁端部は本来のものではない。胎土は128と同様に緻密なもので、外面の調整は不明、内面には放射暗文が施されている。130は盤で、底部は平底、内外面は丁寧なミガ

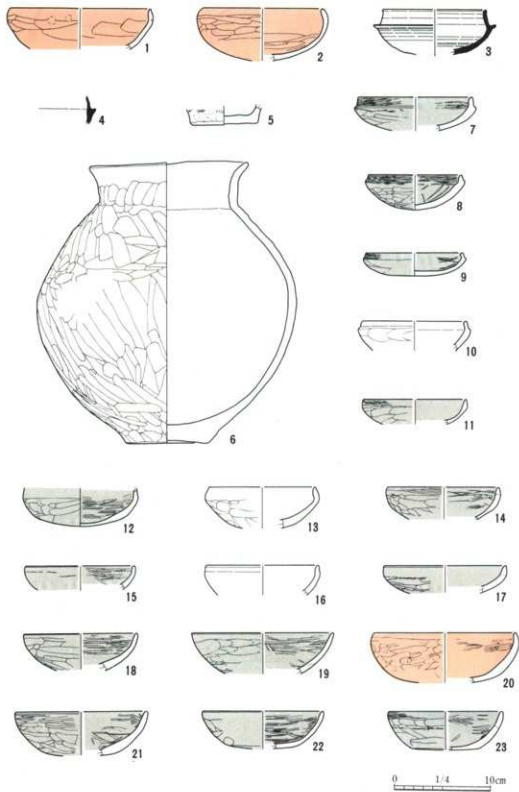
キが施されている。131～137は須恵器蓋で、131～133は短いかえりを有し、134～137は端部が折返されるものである。138・139は須恵器高台付坏で、138は底部と口縁部の境が屈曲し、口唇内面が肥厚する。139は底部と口縁部の境が強く屈曲し、底部はおそらく高台より下に突出するものと思われる。140は須恵器坏で、内外面の磨耗が著しい。141は須恵器瓶類の胴部下半で、外面下端は回転ヘラケズリが施される。142は甕の胴部破片で、外面に叩き目が施されている。143～145は土師器甕で、143～144・147は「常総型」甕、145・146は中胴の甕で、両者は同一個体になる可能性が高い。

019号住居跡（第103・104図、図版49）

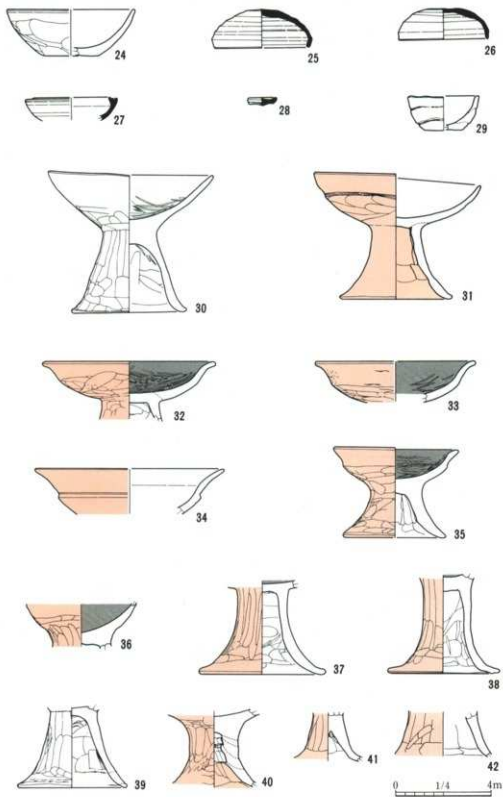
本住居跡では土師器坏5点、甕1点、甕3点を図示した。土師器坏（148～152）は、体部と口縁部の境に稜を有し、口縁部が内傾するもの（148）、直立するもの（149）、内湾しながら外傾するもの（150）、体部から内湾しながら開くもの（151）、体部は半球形を呈し、口縁部が内湾するもの（152）がある。149・152は内外面赤彩、150はヘラミガキ、漆仕上げがなされる。153は胴部が球形で、細くくびれた頸部をもつ甕で、内外面赤彩がなされる。154・155は甕の口縁部破片、156は底部破片である。

021号住居跡（第104図、図版49）

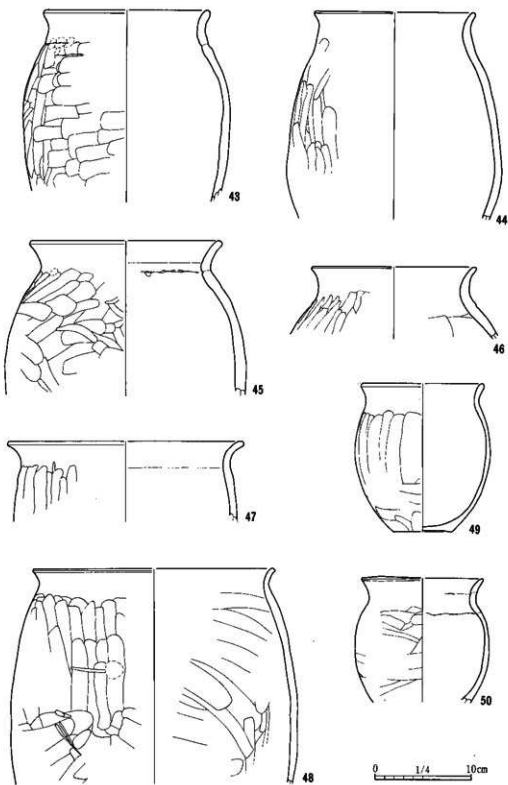
出土遺物は少なく、土師器坏1点、甕1点を図示した。157は体部と口縁部の境を有し、口縁部が内傾するもので、ヘラミガキが加えられ、漆仕上げがなされる。158は小形の甕である。



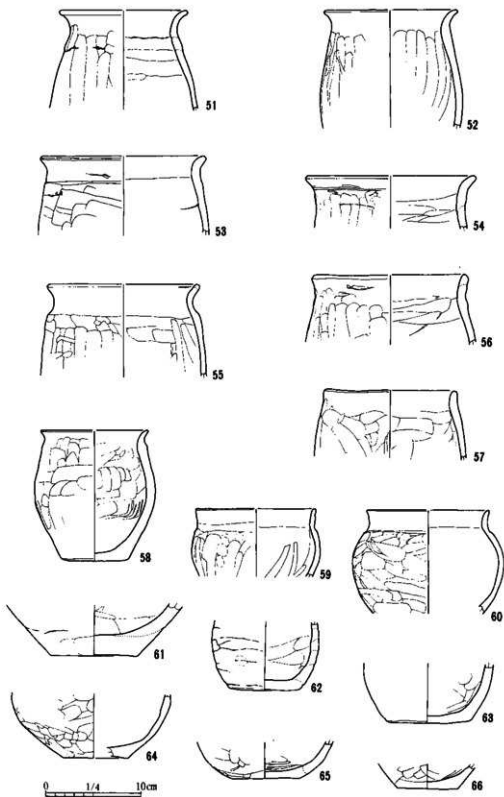
第95图 007A(1~6)·007B(7~23)号住居跡出土土器



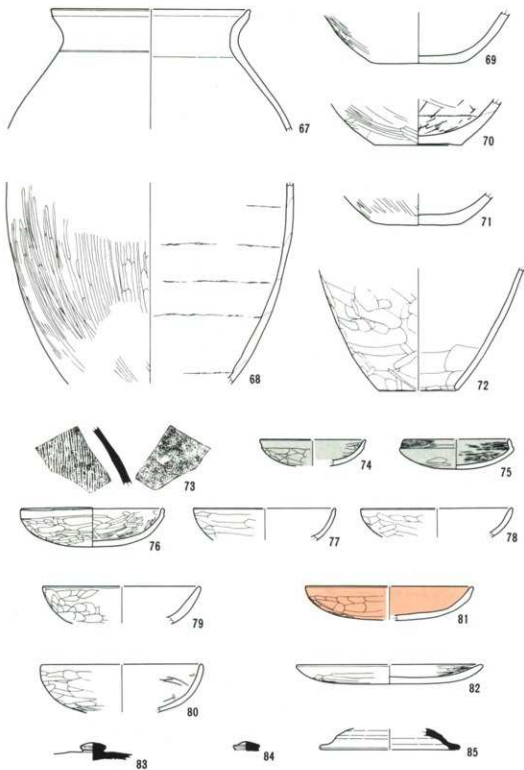
第96图 007B(24~42)号住居跡出土土器



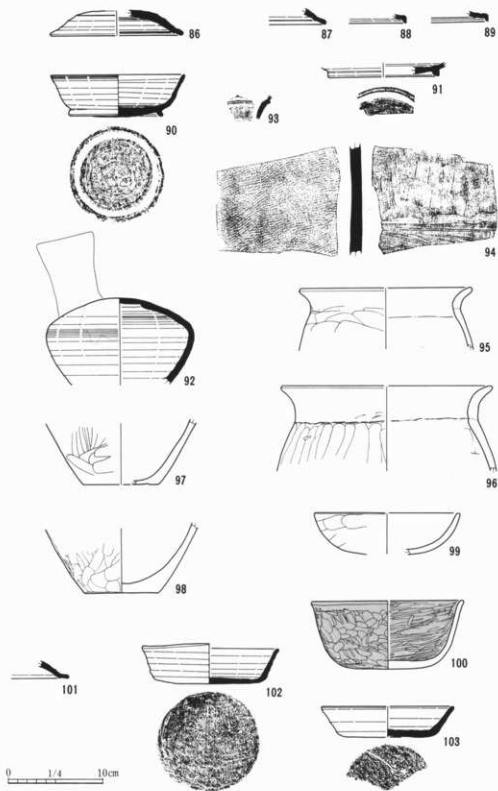
第97图 007B(43~50)号住居跡出土土器



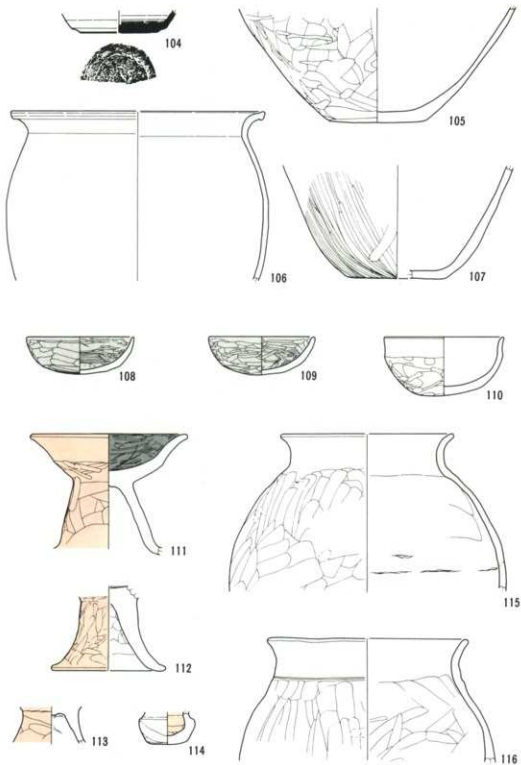
第98图 007B(51~66)号住居跡出土土器



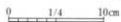
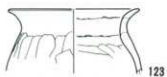
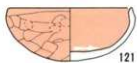
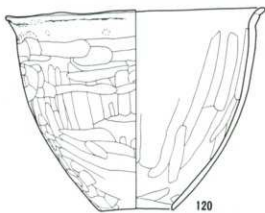
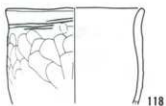
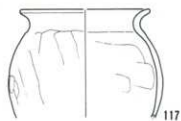
第99圖 007B(67~72)・012(73)・013(74~85)号住居跡出土土器



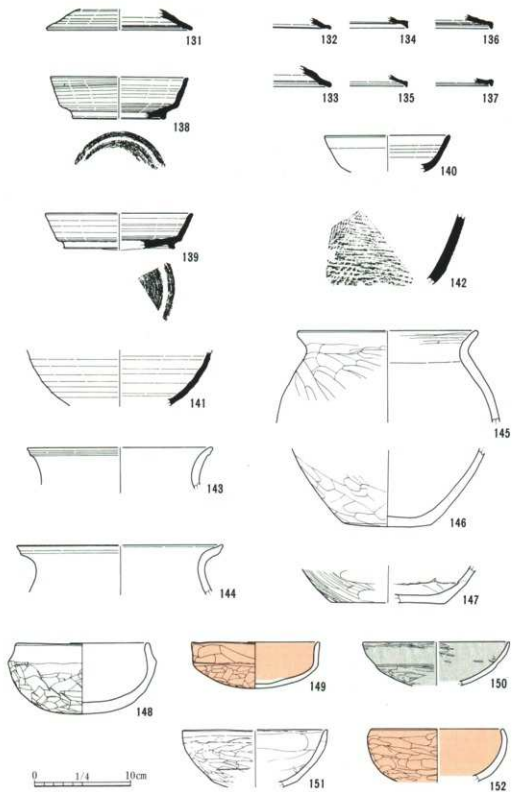
第100图 013(86~98)·014(99~103)号住居跡出土土器



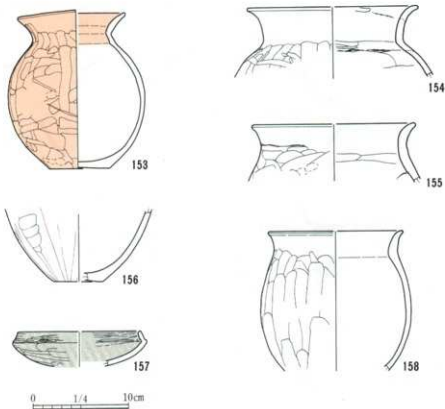
第101图 014(104~107)·016(108~116)号住居跡出土土器



第102图 016(117~120)·017(121~123)·018(124~130)号住居跡出土土器



第103图 018(131~147)·019(148~152)号住居跡出土土器



第104図 019(153~156)・021(157・158)号住居跡出土土器

第6表 古墳時代土器観察表

遺構番号	検出番号	種類・器種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・調整手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
007A号 住居跡	1	土師器 坏	14.7 — —	2/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ	砂 石英粒	普通	暗赤褐色	赤彩
	2	土師器 坏	12.5 — —	3/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ		普通	赤褐色	赤彩
	3	須恵器 坏	10.6 — —	1/6	口縁部へ体部内面ヨコナデ 底部回転ヘラケズリ		普通	暗灰色	
	4	須恵器 坏	— — —	—	体部内外面ヨコナデ		良好	灰色	
	5	土師器 甕	6.4 — —	1/6	胴部外面ハケメ調整後ナデ 胴部内面ヘラナデ	雲母粒 酸化鉄粒	普通	褐色	底部木葉痕
	6	土師器 甕	16.2 8.2 28.6	5/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗褐色	
007B号 住居跡	7	土師器 坏	7.0 — —	1/6	口縁部ヘラミガキ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	長石粒	普通	暗褐色	漆仕上げ
	8	土師器 坏	9.6 3.6	—	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	石英粒	普通	暗褐色	漆仕上げ

遺構番号	補正 番号	種類・器種	法量(cm) 口・底・高	遺存度	成形・調整手法の特徴	胎土	地成	色調	備考
007B号 住居跡	9	土師器 環	10.1 3.7 2.3	2/6	口縁部～体部内面ヘラミダキ 体部外面ヘラケズリ	砂 粒	普通	灰褐色	内黒
	10	土師器 環	10.6 — —	1/6	口縁部ココナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	石英粒 長石粒	普通	茶褐色	
	11	土師器 環	10.6 — —	1/6	口縁部～体部内面ヘラミダキ 体部外面ヘラケズリ	酸化鉄粒	不良	灰褐色	漆仕上げ
	12	土師器 環	— — —	3/6	体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミダキ	石英粒	不良	灰褐色	漆仕上げ
	13	土師器 環	11.0 — —	1/6	口縁部ココナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	雲母粒	良好	褐色	
	14	土師器 環	11.4 — —	1/6	口縁部ココナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミダキ	酸化鉄粒 石英粒	普通	暗茶褐色	
	15	土師器 環	11.3 — —	1/6	口縁部～体部内面ヘラミダキ 体部外面ヘラケズリ	石英粒	不良	灰褐色	漆仕上げ
	16	土師器 環	11.6 — —	—	口縁部ココナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	石英粒	不良	赤褐色	磨耗顕著
	17	土師器 環	12.6 — —	1/6	口縁部～体部内面ココナデ 体部外面ヘラケズリ	石英粒	普通	黄褐色	
	18	土師器 環	11.7 — —	1/6	口縁部～体部内面ヘラミダキ 体部外面ヘラケズリ	酸化鉄粒	普通	灰褐色	漆仕上げ
	19	土師器 環	14.7 — —	2/6	口縁部～体部内面ヘラミダキ 体部外面ヘラケズリ	酸化鉄粒	普通	灰褐色	
	20	土師器 環	14.7 — —	2/6	口縁部ココナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミダキ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩
	21	土師器 環	13.3 — —	1/6	体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミダキ	石英粒	普通	茶褐色	
	22	土師器 環	12.6 3.9	2/6	体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミダキ	酸化鉄粒	普通	灰褐色	漆仕上げ
	23	土師器 環	11.6 6.0 4.1	3/6	口縁部～体部内面ヘラミダキ 体部外面ヘラケズリ	酸化鉄粒	不良	灰褐色	漆仕上げ
	24	土師器 環	13.1 5.4 4.8	3/6	口縁部ココナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	砂 粒 酸化鉄粒	普通	茶褐色	
	25	須恵器 蓋	9.8 4.6	3/6	体部内外面ココナデ 体部上半ヘラ切り後回転ヘラケズリ		良好	青灰色	瀬西窯産
	26	須恵器 蓋	9.2 3.2	3/6	体部内外面ココナデ 体部上半ヘラ切り後回転ヘラケズリ	砂 粒	良好	青灰色	外産陸焼輪 瀬西窯産
	27	須恵器 環	7.9 — —	1/6	体部内外面ココナデ 体部下半回転ヘラケズリ	砂 粒	良好	青灰色	瀬西窯産
	28	須恵器 蓋	2.8 — 0.8	—	外面ココナデ 接合面ナデ	砂 粒	普通	白灰色	
	29	土師器 手捏ね	7.2 3.8 3.5	3/6	体部内外面ナデ		普通	赤褐色	漆仕上げ痕跡 顕著
	30	土師器 高環	17.1 11.4 14.0	5/6	体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラミダキ 脚部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	不良	明褐色	
	31	土師器 高環	17.2 11.1 12.7	3/6	口縁部～体部内面ココナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 脚部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	普通	褐色	赤彩
	32	土師器 高環	17.5 — —	3/6	口縁部ココナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミダキ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩 内黒
	33	土師器 高環	16.3 — —	2/6	口縁部ココナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミダキ	雲母粒	普通	褐色	赤彩 内黒

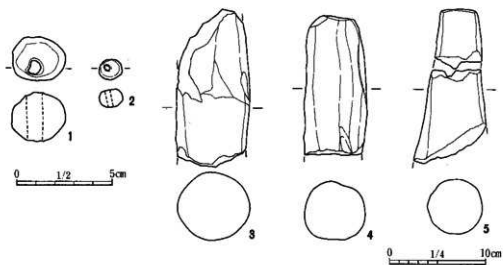
遺構番号	採回 番号	種類・器種	法量(cm) □・径・高	選存度	成形・調整手法の特徴	胎土	構成	色調	備考
007B号 住居跡	34	土師器 高坏	19.4 —	1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	砂粒	不良	暗褐色	赤影
	35	土師器 高坏	12.7 10.2 9.1	5/6	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラミガキ、脚部内面ヘラナデ	曹母粒 酸化鉄粒	普通	暗褐色	赤影 内黒
	36	土師器 高坏	—	2/6	体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ヘラミガキ	石英粒 酸化鉄粒	普通	赤褐色	赤影 内黒
	37	土師器 高坏	12.8	2/6	体部内面ヘラミガキ 脚部外面ヘラケズリ	石英粒	普通	赤褐色	赤影 内黒
	38	土師器 高坏	10.1	2/6	体部内面ヘラミガキ 脚部外面ヘラケズリ	酸化鉄粒	普通	赤褐色	赤影 内黒
	39	土師器 高坏	11.1	2/6	脚部内外面ヘラケズリ	酸化鉄粒	不良	褐色	
	40	土師器 高坏	—	2/6	脚部外面ヘラケズリ 脚部内面ナデ	長石粒	普通	赤褐色	赤影
	41	土師器 高坏	—	—	脚部内外面ヘラケズリ	砂粒	普通	赤褐色	赤影
	42	土師器 高坏	—	—	脚部外面ヘラケズリ後ナデ 脚部内面ヘラナデ		普通	赤褐色	
	43	土師器 甕	16.8 —	3/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	石英粒	普通	明褐色	
	44	土師器 甕	16.3 —	2/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	砂粒 長石粒	不良	暗褐色	
	45	土師器 甕	19.5 —	1/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	長石粒	普通	明褐色	
	46	土師器 甕	16.5 —	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	普通	明褐色	
	47	土師器 甕	24.0 —	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒 酸化鉄粒	普通	赤褐色	
	48	土師器 甕	24.8 —	1/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	普通	明褐色	
	49	土師器 甕	12.4 6.0 15.2	3/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面へ底部ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	普通	黒褐色	
	50	土師器 甕	12.4 —	2/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ		普通	暗褐色	
	51	土師器 甕	12.9 —	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄粒 長石粒 曹母粒	普通	灰褐色	
	52	土師器 甕	13.6 —	—	口縁部ヨコナデ 胴部内外面ヘラケズリ		普通	暗褐色	
	53	土師器 甕	16.9 —	2/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗褐色	
	54	土師器 甕	17.1 —	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗褐色	
	55	土師器 甕	15.3 —	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗茶褐色	
	56	土師器 甕	15.5 —	1/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	明褐色	
	57	土師器 甕	13.2 —	1/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	普通	暗褐色	
	58	土師器 甕	10.9 5.1 13.4	3/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面へ底部ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	普通	赤褐色	

遺構番号	種類・器種	法量 (cm) 口・底・高	遺存度	成形・調整手法の特徴	胎土	焼成色	備考	
007B号 住居跡	59	土師器 甕	12.5 —	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ		普通 暗茶褐色	
	60	土師器 甕	12.6 —	3/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	石英粒	普通 暗褐色	
	61	土師器 甕	8.9 —	—	胴部外面へ底面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ		普通 暗褐色	
	62	土師器 甕	5.0 —	2/6	胴部外面へ底面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	長石粒	普通 明褐色	底部大亀痕
	63	土師器 甕	5.0 —	2/6	胴部外面へ底面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	長石粒	普通 赤褐色	
	64	土師器 甕	6.7 —	2/6	胴部外面へ底面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	砂 粒	良好 明褐色	
	65	土師器 甕	7.2 —	—	胴部外面へ底面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通 暗赤褐色	
	66	土師器 甕	6.4 —	—	胴部外面へ底面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	長石 粒粒	普通 暗褐色	
	67	土師器 甕	20.6 —	2/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ナデ 胴部内面ヘラナデ	長石 粒粒	普通 暗褐色	常規型
	68	土師器 甕	— —	1/6	胴部外面下半部取位ヘラミガキ 胴部内面ヘラナデ	長石 粒粒	普通 暗褐色	常規型
	69	土師器 甕	8.0 —	—	胴部外面下半部取位ヘラミガキ 胴部内面ヘラナデ	長石 粒粒	普通 暗赤褐色	常規型
	70	土師器 甕	8.8 —	—	胴部外面下半部取位ヘラミガキ 胴部内面ヘラナデ	長石 粒粒	普通 暗赤褐色	常規型
	71	土師器 甕	5.7 —	—	胴部外面下半部取位ヘラミガキ	長石 粒粒	普通 褐色	常規型
	72	土師器 甕	8.1 —	1/6	胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	普通 褐色	
012号 住居跡	73	須恵器 甕	— —	—	胴部外面平行叩き 胴部内面同心円状叩き後ナデ	砂 粒	良好 白灰色	
013号 住居跡	74	土師器 甕	11.0 —	1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	雲母粒	普通 褐色	
	75	土師器 甕	11.0 3.0	2/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	酸化鉄粒	普通 褐色	
	76	土師器 甕	14.7 4.1	4/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	石英粒	普通 明褐色	
	77	土師器 甕	14.8 —	1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ		普通 褐色	
	78	土師器 甕	15.6 —	1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	酸化鉄粒	普通 明褐色	
	79	土師器 甕	16.3 —	1/6	体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	砂 粒	普通 暗褐色	
	80	土師器 甕	16.6 —	1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	酸化鉄粒	普通 褐色	
	81	土師器 甕	17.3 3.4	2/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	砂 粒	普通 赤褐色	赤彩
	82	土師器 甕	19.2 2.0	1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	砂 粒	普通 褐色	
	83	須恵器 甕	— —	1/6	体部内外面ヨコナデ		良好 白灰色	外面隣区輪 溝西側

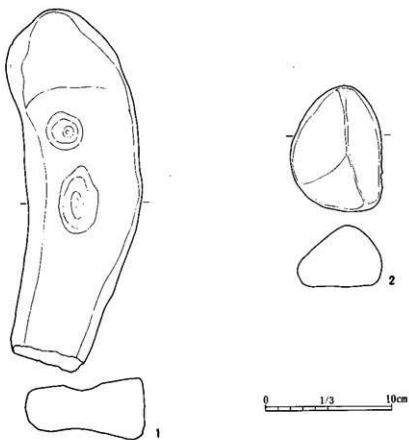
遺構番号	棟号 番号	種類・形種	法量[cm]	遺存度	成形・調整手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
			口・底・高						
013号 住居跡	84	須恵器 蓋	—	—	体部内外面ヨコナデ	砂 粒	普通	白灰色	
	85	須恵器 蓋	14.3	—	体部内外面ヨコナデ	曹 母 粒 酸化鉄粒	普通	暗褐色	
	86	須恵器 蓋	13.6	1/6	体部内外面ヨコナデ	砂 粒	普通	暗灰褐色	
	87	須恵器 蓋	—	—	体部内外面ヨコナデ	曹 母 粒 長石	不良	褐色	
	88	須恵器 蓋	—	—	体部内外面ヨコナデ		普通	淡灰色	湖西窯産
	89	須恵器 蓋	—	—	体部内外面ヨコナデ	砂 粒	普通	淡灰色	湖西窯産
	90	須恵器 高台付坏	13.9 9.5 4.3	6/6	体部内外面ヨコナデ 底部ヘラ切り後回転ヘラケズリ	砂 粒	普通	淡灰色	湖西窯産
	91	須恵器 高台付坏	—	—	体部内外面ヨコナデ	砂 粒	良好	灰褐色	湖西窯産
	92	須恵器 平瓶	—	2/6	体部内外面ヨコナデ		良好	白灰色	頸部欠損 外蓋降灰釉 湖西窯産
	93	須恵器 甕	—	—	口縁部ヨコナデ・縞線波状文		良好	白灰色	内面降灰釉
	94	須恵器 甕	—	—	胴部外面平行印き目 胴部内面ヘラナデ・ヘラケズリ		良好	灰色	
	95	土師器 甕	17.6	1/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石 英 粒 酸化鉄粒	普通	明褐色	
	96	土師器 甕	21.7	1/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石 英 粒 酸化鉄粒	普通	明褐色	
	97	土師器 甕	7.8	—	胴部外面下半部磨位ヘラミガキ 胴部内面ヘラナデ		普通	暗褐色	
98	土師器 甕	7.7	1/6	胴部外面～底部ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石 英 粒 酸化鉄粒	普通	暗褐色		
014号 住居跡	99	土師器 坏	14.9	1/6	体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	長 石 粒 酸化鉄粒	普通	褐色	
	100	土師器 甕	15.7 6.0 7.0	5/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	石 英 粒	普通	暗褐色	漆仕上げ
	101	須恵器 蓋	—	1/6	体部内外面ヨコナデ	曹 母 粒 長石	不良	白灰色	
	102	須恵器 坏	14.1 6.8 4.2	5/6	体部内外面ヨコナデ 底部手持ちヘラケズリ	曹 母 粒 長石	普通	暗褐色	
	103	須恵器 坏	13.6 8.0 3.2	—	体部内外面ヨコナデ 底部手持ちヘラケズリ	曹 母 粒 長石	普通	灰色	
	104	須恵器 坏	7.6	2/6	体部内外面ヨコナデ 底部ヘラ切り未調整	曹 母 粒 長石	普通	白灰色	
	105	土師器 甕	8.0	2/6	胴部外面～底部ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	酸化鉄粒	普通	明褐色	
	106	土師器 甕	26.2	1/6	口縁部ヨコナデ 胴部内外面ナデ	長 石 粒 石 英 粒	普通	茶褐色	常盤型
016号 住居跡	107	土師器 甕	9.1	—	胴部外面下半部磨位ヘラミガキ 胴部内面ヘラナデ	長 石 粒 石 英 粒	不良	暗褐色	常盤型 底部不集成
	108	土師器 坏	10.9 3.8	6/6	体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	酸化鉄粒	普通	暗褐色	漆仕上げ

遺構番号	押印 番号	種類・形種	法量 (cm) 口・底・高	遺存度	成形・調整手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
016号 住居跡	109	土師器 環	10.8 --- 3.9	6/6	体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ		普通	暗茶褐色	漆仕上げ
	110	土師器 環	12.2 --- 6.1	6/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ	石英粒	普通	黒褐色	
	111	土師器 高環	16.1 --- ---	5/6	体部外面へ脚部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ 脚部内面ナデ	酸化鉄粒	普通	赤褐色	赤彩 内黒
	112	土師器 高環	11.0 --- ---	2/6	脚部内外面ヘラケズリ		普通	赤褐色	赤彩
	113	土師器 高環	--- --- ---	1/6	脚部内外面ヘラケズリ	石英粒	普通	赤褐色	赤彩
	114	土師器 ミニチュア	2.0 --- 3.2	5/6	体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	石英粒	良好	明褐色	内面赤彩
	115	土師器 壺	17.5 --- ---	2/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ		普通	褐色	
	116	土師器 壺	20.5 --- ---	2/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	赤褐色	
	117	土師器 壺	13.1 --- ---	2/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ		普通	褐色	
	118	土師器 鉢	14.0 --- ---	2/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	暗茶褐色	
	119	土師器 鉢	5.7 --- ---	2/6	胴部外面へ底部ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ		普通	暗赤褐色	
	120	土師器 瓶	26.8 7.4 20.4	5/6	口縁部ヨコナデ 胴部内外面ヘラケズリ	酸化鉄粒	普通	褐色	
017号 住居跡	121	土師器 環	12.7 --- 5.5	6/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ後ナデ 体部内面ナデ	石英粒	普通	暗赤褐色	赤彩付
	122	土師器 子母ね	--- --- 2.5	3/6	体部内外面ナデ・指頭押圧	砂 粒	普通	暗褐色	
	123	土師器 壺	13.1 --- ---	1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	石英粒	普通	赤褐色	
018号 住居跡	124	土師器 環	16.0 10.3 4.8	2/6	体部外面へ底部手持ちヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	石英粒	普通	褐色	
	125	土師器 環	15.0 --- ---	1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ		普通	明褐色	
	126	土師器 環	15.5 --- ---	---	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	酸化鉄粒	普通	褐色	
	127	土師器 環	14.7 --- ---	1/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラミガキ	酸化鉄粒	普通	褐色	
	128	土師器 環	17.2 --- ---	1/6	体部外面横方向ヘラミガキ 体部内面2段斜位放射状精文 底部ヘラケズリ後ヘラミガキ		良好	明褐色	畿内産
	129	土師器 環	--- --- ---	---	体部内面斜位放射状精文	酸化鉄粒	普通	明褐色	畿内産 内外面に剥落跡
	130	土師器 壺	19.9 10.0 3.6	4/6	体部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ 体部内面ヘラミガキ	酸化鉄粒	普通	明褐色	
	131	須恵器 蓋	14.8 --- ---	---	体部内外面ヨコナデ	石英粒	普通	暗褐色	
	132	須恵器 蓋	--- --- ---	---	体部内外面ヨコナデ	費母粒	普通	灰褐色	
	133	須恵器 蓋	--- --- ---	---	体部内外面ヨコナデ		不良	褐色	

遺構番号	押込番号	種類・器種	法量(m)		遺存度	成形・調整手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
			□・底・高	—						
018号 住居跡	134	須恵器 蓋	—	—	—	体部内外面ヨコナデ		良好	白灰色	湖西窯産
	135	須恵器 蓋	—	—	—	体部内外面ヨコナデ	鉄分粒	良好	白灰色	湖西窯産
	136	須恵器 蓋	—	—	—	体部内外面ヨコナデ		普通	白灰色	湖西窯産
	137	須恵器 蓋	—	—	—	体部内外面ヨコナデ		普通	灰褐色	湖西窯産
	138	須恵器 高台付坏	14.2 9.3 4.3	—	2/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転ヘラケズリ		良好	白灰色	湖西窯産
	139	須恵器 高台付坏	15.1 11.2 3.6	—	1/6	体部内外面ヨコナデ 底部回転ヘラケズリ		良好	白灰色	湖西窯産
	140	須恵器 坏	12.8	—	1/6	体部内外面ヨコナデ		不良	灰褐色	
	141	須恵器 瓶	—	—	—	胴部下端回転ヘラケズリ		良好	灰色	内面降灰輪
	142	須恵器 甕	—	—	—	胴部外面平行引き目	鉄分粒	良好	白灰色	外面降灰輪
	143	土師器 甕	19.1	—	—	口縁部ヨコナデ	石英粒	良好	茶褐色	
	144	土師器 甕	21.3	—	—	口縁部ヨコナデ	長石英 石 曹母 粒 鉄 粒	良好	褐色	常規型
	145	土師器 甕	18.4	—	1/6	口縁部ヘラミガキ 胴部外面ヘラケズリ後ナデ 胴部内面ヘラナデ	石英粒	普通	明褐色	内面割落顕著
	146	土師器 甕	4.0	—	1/6	胴部外面へ底面ヘラケズリ	石英粒	普通	明褐色	内面割落顕著
	147	土師器 甕	11.7	—	—	胴部下端斜位ヘラミガキ	長石英 石 曹母 粒 鉄 粒	普通	褐色	常規型 底部木葉痕
019号 住居跡	148	土師器 坏	13.6 4.3 7.3	—	5/6	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	石英粒 鉄 酸化鉄 粒	良好	褐色	
	149	土師器 坏	13.2 — 4.7	—	5/6	口縁部ナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ヘラナデ	石英 石 曹母 粒 鉄 粒	普通	赤褐色	赤影
	150	土師器 坏	15.1	—	2/6	口縁部へ体部内面ヘラミガキ 体部外面ヘラケズリ	酸化鉄粒	普通	褐色	染仕上げ
	151	土師器 坏	15.0	—	—	口縁部ヨコナデ 体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ		普通	褐色	
	152	土師器 坏	13.5	—	—	体部外面ヘラケズリ 体部内面ナデ	石英粒	良好	赤褐色	赤影
	153	土師器 甕	11.0 4.3 16.2	—	4/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	長石英 石 曹母 粒 鉄 粒	良好	赤褐色	赤影
	154	土師器 甕	17.7	—	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	石英粒 鉄 酸化鉄 粒	良好	暗褐色	
	155	土師器 甕	16.7	—	—	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	長石英 石 曹母 粒 鉄 粒	良好	明褐色	
	156	土師器 甕	5.2	—	—	胴部外面へ底面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	長石 石 曹母 粒 鉄 粒	普通	暗茶褐色	
	022号 住居跡	157	土師器 坏	12.8	—	1/6	口縁部へ体部内面ヘラミガキ 体部外面ヘラケズリ	石英粒	普通	暗褐色
158		土師器 甕	14.0	—	3/6	口縁部ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	長石 石 曹母 粒 鉄 粒	普通	暗茶褐色	



第105图 007B(1~4)·016(5)号住居跡出土土製品



第106图 014号住居跡出土土製品



第107図 007A(1)・007B(2)号住居跡出土鉄製品

第7表 古墳時代土製品計測表

遺構番号	挿図番号	種類	計測値(cm) ()は遺存部	重量(g)	備考
007B号住居跡	1	土玉	長さ 2.2 幅 2.6	15.6	
	2	土玉	長さ 1.0 幅 1.2	1.0	
	3	支脚	長さ(12.0) 幅 (7.6)	120.1	3と同一個体の可能性あり
	4	支脚	長さ(14.0) 幅 (6.4)	155.1	4と同一個体の可能性あり
016号住居跡	5	支脚	長さ(15.2) 幅 (4.2)	468.0	

第8表 古墳時代石製品計測表

遺構番号	挿図番号	種類	石材	計測値(cm) ()は遺存部	重量(g)	備考
014号住居跡	1	磨石	砂岩	長さ(28.3) 幅 8.9 厚さ 4.8	1,860.2	両側縁に敲打痕
	2	敲石	砂岩	長さ 9.8 幅 6.8 厚さ 4.8	501.4	

第9表 古墳時代鉄製品計測表

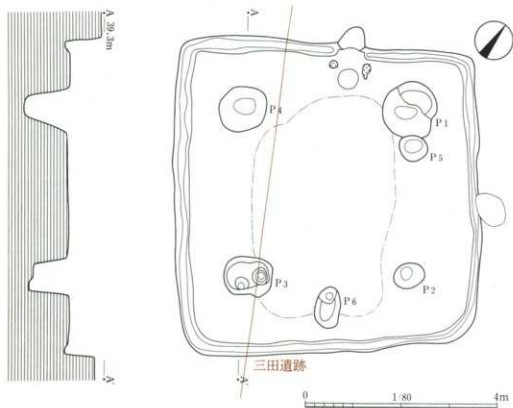
遺構番号	挿図番号	種類	計測値(cm) ()は遺存部	備考
007A号住居跡	1	不明	長さ(7.6) 幅 (0.6) 厚さ(0.4)	
007B号住居跡	2	刀子	長さ(6.8) 幅 (1.3) 厚さ(0.3)	木貫付着

第4節 奈良時代

1. 遺構

015号住居跡 (第108図、図版42)

調査区中央部南東寄り、A5-87・88・89・97・98・99、A6-07・08・09・17・18・19・28・29、B5-80・90、B6-00・01・10に位置する。本住居跡跡の東側約2/3は三田遺跡の調査区(078号住居跡)に属しており、今回の調査部分とつなげて図示した。遺存状態は良好であった。規模は北西壁で6.2m、北東壁で5.7m、南東壁で5.8m、南西壁で6.4mを測り、ほぼ正方形を呈する。主軸方位はN-38°-Wで、真北を向いている。覆土はローム塊を含む赤褐色土・暗赤褐色土が主体であった。床面は褐色土によって厚さ約10cm貼床がなされていた。壁高は北西壁で76cm、北東壁で67cm、南東壁で60cm、南西壁で69cmを測り、約85度で立ち上がる。周溝はカマド内を除いて全周しており、最大幅32cm、深さ12cmを測る。ピットは6か所検出された。主柱穴はP1~P4で、径50cm~1.2m、深さ約90cmを測る。柱間寸法はP1-P2・P4-P1が3.4m、



第108図 015号住居跡実測図

P2-P3が3.9m、P3-P4が3.8mを測り、配置はほぼ正方形を呈する。P5はP1の南東側に切って位置するピットで、径約50cm、深さ00cmを測り、P1に関わるものと考えられる。P6は南東北西壁下に位置する出入口施設に伴うピットで、不整な楕円形を呈し、規模は長軸径約80cm、短軸径約50cm、深さ約cmを測る。底面の北西側はピット状に浅く掘り込まれている。カマドは北西壁中央やや北東よりに位置する。詳細は『三田遺跡発掘調査報告書』に拠りたい。

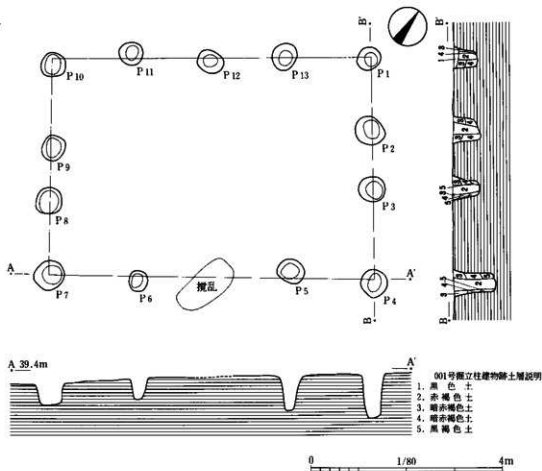
遺物は細片がほとんどで図示できるものはなかったが、三田遺跡078号住居址から奈良時代初頭の土器が出土している。

第5節 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は3棟検出されているが、古墳時代以降の所産であることは間違いないが遺物が検出されないことから明確な所属時期は不明である。

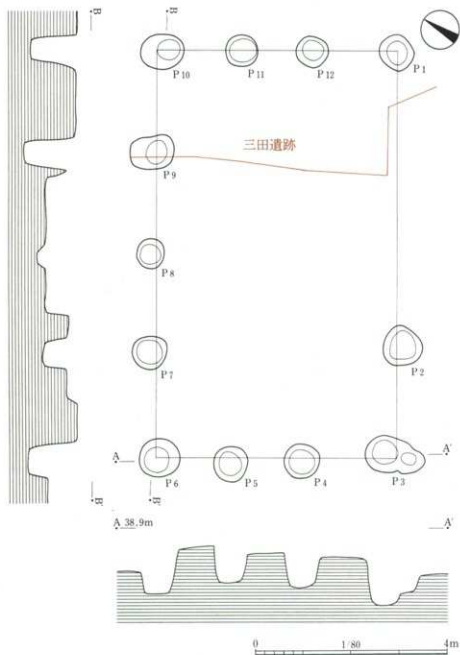
001号掘立柱建物跡 (第109図)

調査区北部、A 5-33・34・35・43・44・45・46・47・52・53・54・55・56・63・64・65・66に位置し、ほぼ平坦面に立地する。遺存状態は良好であったが、東側柱列の中間部に攪乱が



第109図 001号掘立柱建物跡実測図

入っており、西側柱列の対応する箇所には柱穴が存在することから、攪乱の位置に柱穴があったものと考えられる。側柱式の梁行3柱間(4.5m)×桁行4柱間(6.8m)を呈し、面積は30.6。梁行主軸方位はN-0°-W。西側梁行の中間柱穴は検出されていない。梁行の柱間寸法はP1-P2が1.05m、P2-P3が1m、P6-P7が2m。桁行の柱間寸法はP3-P4とP4-P5が1m、P5-P6が1.05m、P7-P8とP9-P1が1.1m、P8-P9が1.5mを測り、不均一である。柱穴の配置は桁行の柱列がやや不安定である以外は、ほぼ整然としており、平面形は方形を呈する。柱穴は不整形円形を呈し、径70cm~1m、深さは28~45cmを測り、大きさ・深さともあまり均一でない。柱穴の据え方は検出されなかったが、P2・P3・P4・P9の底面中央付近には柱穴のあたりが認められた。覆土は断面観察を行なった柱穴(P1~P2・P9)では柱痕と考えられる締まりのある赤褐色土が筒状に堆積しており、その周囲には暗褐色土・黒褐色土が堆積していた。柱痕から復元推定すると柱材のおおよその太さは17~20cmと推測される。



第110図 003号掘立柱建物跡実測図

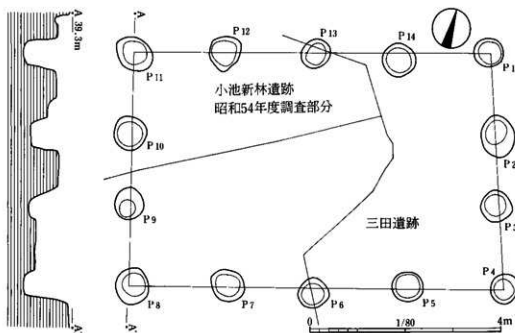
003号掘立柱建物跡 (第110図)

調査区南部、A 6・44・45・46・47・48・49・54・55・56・57・58・59・64・65・66・67・68・69に位置し、南に面する緩斜面に立地する。本建物跡の東側約1/4は三田遺跡の調査区に属している。周囲には016・017・018・019号住居跡が存在し、これらより本跡のほうが新しいが、住居跡調査後に検出したため、南東側桁行の2柱穴は検出することができなかった。大型でし

っきりとした柱穴で、遺存状態は良好であった。側柱式の梁行4柱間(8.4m)×桁行3柱間(5.0m)を呈し、面積は42.0m²。桁行主軸方位はN-30°-W。梁行の柱間寸法はP9-P10・P5-P6が2.2m、P10-P11が2.0m、P11-P12・P12-P1が2.1m。桁行の柱間寸法はP1-P2・P2-P3・P7-P8・P8-P9が1.5m、P3-P4・P6-P7が1.8mを測り、梁行柱間の方が桁行柱間より大きく、桁行は北東側と南西側の対する柱穴寸法が等間隔となっている。配置は桁行の柱列の中間柱穴(P4・P5・P8・P9)がやや外側にはみ出し気味である以外はほぼ整然とし、長方形を呈する。柱穴は本来の開口部面で検出できなかったものが多いが、不整形ないしは楕円形を呈し、径60cm~90cm、深さは70cm~1.1mを測り、大きさはほぼ均一であるが、深さはひじょうにまちまちである。P6では南側浅い柱穴が取りついていた。柱穴の掘え方は検出されなかった。覆土は明赤褐色土・赤褐色土を主体とする。

004号掘立柱建物跡 (第111図、図版42)

調査区北部、A5-07・08・16・17・18・19・26・27・28・29・36・37・38・39、B5-10・11・20・21・30・31・40に位置し、ほぼ平坦面に立地する。大型でしっかりとした柱穴であり、遺存状態は良好であった。本建物跡の東側約2/5は三田遺跡の調査区、北西側1/5は昭和54年の成田松尾線の調査区に属しており、それぞれ今回の調査部分とつなげて図示した。007A・007B号住居跡を切っており、側柱式の梁行3柱間(東側4.9m・西側4.8m)×桁行4柱間(北側7.5m・南側7.9m)を呈し、面積は36.7m²。梁行主軸方位はN-20°-W。梁行の柱間寸法はP1-



第111図 004号掘立柱建物跡実測図

P2が1.6m、P2-P3・P9-P10が1.5m、P3-P4が1.8m、P8-P9が1.7m、P10-P11が1.65mを測る。桁行の柱間寸法はP4-P5・P5-P6・P7-P8・P12-P13が2.0m、P6-P7が1.8m、P11-P12が1.85m、P13-P14が1.7m、P14-P1が1.9mを測り、桁行柱間の方が大きい傾向を示す。柱穴の配置は整然としているが、桁行北側と南側で約1.0m長さが異なることから配置は台形を呈する。柱穴は不整円形ないしは楕円形を呈し、径60~90cm、深さは50~95cmを測り、大きさはほぼ均一であるが、深さは隅柱が深い。柱穴の据え方は検出されなかった。覆土はローム塊を含む暗褐色土、褐色土を主体とする。

第 3 章

ま と め

第3章 ま と め

御田台遺跡・小池新林遺跡の調査では先土器時代から奈良・平安時代にかけての多くの遺構・遺物が検出された。遺構の内訳を示すと以下のとおりである。

御田台遺跡

先土器時代 石器出土地点 2 か所

古墳時代 竪穴住居跡 31軒

奈良・平安時代 竪穴住居跡 7軒

古墳時代以降 掘立柱建物跡 4 棟、溝 10条

小池新林遺跡

縄文時代 土坑 2 基

古墳時代 竪穴住居跡 12軒、粘土採掘坑 1 か所

奈良時代 竪穴住居跡 1軒

古墳時代以降 掘立柱建物跡 3 棟

第1節 縄文・弥生時代

遺構は御田台遺跡では検出されなかったが、小池新林遺跡では縄文後期曾谷式の土器を伴出す001号土坑と002号土坑の2基が検出された。001号土坑での検出状況は、一見中期末・後期初頭にみられる埋壔を連想させる。しかし、このような検出例は後期末にはほとんど知られていない。さらに同時期の遺構は隣接する三田遺跡（福岡 1989）からも全く検出されておらず、調査区域外に存在する可能性も極めて小さく、集落遺跡の一部をなすものとも考えにくい。土器の埋設位置に比べ土坑がかなり深くまで掘り込まれており、しかも覆土が人為的に埋め戻されていることなどから土墳墓であった可能性が考えられる。

遺物は、御田台遺跡では縄文中期加曾利E式土器が主体で、前期浮島式がそれに続く。小池台遺跡・小池地藏遺跡は加曾利E式の集落跡であり、小池木戸脇遺跡（千葉県教育庁文化課 1990）では阿玉台式の大形住居跡が検出されるなど、中期の集落跡が小池の台地に広がっている。御田台遺跡はこれらの遺跡とは若干地域がずれるが、これらの縄文中期を主体とする一連の遺跡として捉えられよう。

小池新林遺跡では、隣接する同一の遺跡である三田遺跡でも後晩期の遺物が得られているが、晩期の安行Ⅲb、焼山Ⅱ・Ⅲ式、前浦式、荒海式が出土している点、先述したとおり遺構が検出されていない点など、今回の成果とは様相が異なっている。北側に位置する小池台遺跡（滝

口ほか 1970)・小池地藏遺跡(奥田 1985)・小池地藏II遺跡(渡邊ほか 1991)が後晩期の集落跡であり、遺跡としての中心域はそちらにあるとみられる。

弥生時代は両遺跡から、いわゆる印旛手賀沼式が出土している。しかしながら、遺構は検出されなかった。昭和61年の御田台遺跡の調査(新井 1986)、昭和62年の三田遺跡の調査でも遺構は検出されておらず、弥生時代の遺構はおそらく調査区をはずれた地点にあるものとみられる。

第2節 古墳・奈良時代

御田台遺跡・小池新林遺跡は谷を隔てて隣接しており、検出された遺構の主体とする時期は共に古墳時代後期である。成田松尾線建設などで発掘調査された周辺の遺跡も古墳時代後期を主体とするものであるが、御田台遺跡の南側の台地上に位置する小池元高田遺跡は、奈良・平安時代が主体であり、やや地点を変えながら古墳時代から奈良・平安時代まで連続と大規模な集落が営まれていると思われ、今回の調査もそうした集落の一部を検出したにすぎないといえよう。

御田台遺跡、小池新林遺跡から検出された遺構のうち最も古いものは、小池新林遺跡007A号住居跡であり、規模も1辺約10mを測る最も大きなものであった。重複する住居跡によって一部が破壊されているため、炉とカマドのどちらも検出することができなかったが、出土した須恵器坏はTK23型式に比定されるものであり、5世紀代に遡るものである。御田台遺跡は6世紀代の住居跡が主体であった。小池新林遺跡では昭和54年調査区と隣接する三田遺跡でほとんど検出されていない7世紀中葉から8世紀初頭の住居跡が主体であり、さらに確実な時期は不明だが、古墳時代末の住居跡を切る掘立柱建物跡が3棟検出されていることから、古墳時代末以降の遺構が台地の南西側に展開している可能性が高い。また、小池新林遺跡で注目される遺構は台地南側斜面に検出された粘土採掘坑である。この採掘坑からは常総粘土層(下末吉ローム層)が採取されており、さらに調査区域外の斜面部に広がっていると思われる。遺物は検出されなかったが、この採掘坑を埋め戻した上に016・019号住居跡が構築されていることから、後に述べるIV期以前の所産と考えられ、台地上に展開する住居跡の主体が5世紀末～6世紀前半であることから、概期に属する可能性が高いと考えられる。採取した粘土の用途については手がかりとなる資料を得ることができなかったが、同様な粘土採掘坑を検出した市原市中永作遺跡では小池新林遺跡と同様に下末吉ローム層が採取されており、須恵器手法土器の生産に用いられたことが、胎土分析の結果明らかにされている(白井 1991)。本地域では須恵器手法土器や6世紀代以前の在産の須恵器の存在は明らかにされておらず、確たることは言えず根拠に乏しいが、小池新林遺跡の粘土採掘坑も土師器生産を含めた窯業生産に伴うものである可能

性があるといえよう。

次に出土土器を時期区分することによって、出土遺物を図示できた住居跡の帰属時期を示すが、両遺跡とも各時期の遺物が連続と出土しておらず、時期的に多寡が認められ、出土量も決して多いとはいえない。当該地域の土器の変遷については小池地藏Ⅱ遺跡・宮門遺跡の報告でも簡単に触れたが、最近、山武北部地域の古墳時代後期土器編年が呈示されており(小澤 1992)、ここではこれらの編年や周辺遺跡で出土している土器群を参考にしながら編年を行ないたい。

I期

この時期の遺物はわずかであるが、小池新林遺跡007A号住居跡が相当する。土師器坯は内外面赤彩がなされる。丸底で半球形を呈し、口縁部が内傾するもの(第95図1)、口縁部の内高度がひじょうに強いもの(第95図2)が出土している。いわゆる須恵器模倣坯は出土していない。土師器甕は球胴で、胴部中位がやや「く」の字形に張り、直立する口縁部中位までヘラケズリが施されている。同住居跡では須恵器坯身が2点出土しており、第95図3は復元口径10.6cmを測り、口縁端部内面に段を有し、底部の回転ヘラケズリは1/3以上施されている。第95図4は破片であるが、口縁部の立ち上がりがほとんど内側に屈曲しないものである。この2点の坯は陶色編年のTK23型式の範疇で捉えられるものである。なお、本住居跡の三田遺跡調査側である080号址からは3方スカシを有し、カキ目が施される須恵器高坏の脚部片が出土しており(第112図)、こちらもTK23型式として矛盾しないものである。よって本期は5世紀後葉の年代が与えられる。



第112図 三田遺跡080号址
出土須恵器高坏

II期

御田台遺跡008・012・023・024・025号住居跡が相当する。御田台遺跡において口縁部と体部との境に稜を有し、須恵器模倣の坯が出現する段階で、口縁部の外傾するものは体部と口縁部との境が段をなし、突出するものが多い。また、口縁端部が外反する傾向がみられ、体部～底部が扁平で、口縁部高が高く、器高の1/2以上を占めている。そのほかに数は少ないものの口縁部が直立するものや、内傾するものもみられる。前期の系譜を引くと思われるものでは、半球形の坯のほかに、量的には少ないが口縁端部が短く外反するもの(第48図119)も出土している。甕は球胴のものがほとんどであり、I期の甕の系譜下にあるとみられる最大径部位が「く」の字形に張り、口縁部が直立する甕が存在する。

なお、本期に含まれるがI期との過渡的な土器様相を示す土器群としては芝山町大西遺跡第1号住居址出土土器(平岡 1979)があり、深身の椀形の坯、扁平な半球形の坯、口縁端部が短く外反するものと須恵器模倣坯が共伴している。須恵器模倣坯は口縁端部が外反するものが多い。この住居跡にはTK47型式の須恵器甕を共伴しており、よって本期はやや幅をもたせて5世紀末葉～6世紀初頭の年代が想定される。

III期

多くの遺物が出土しており、御田台遺跡001・002・014・016・035号住居跡、小池新林遺跡017号住居跡が相当する。須恵器模倣坏が半球形のを凌駕するようになり、口縁部の立ち上がりが内傾するものは体部と口縁部の境に段を有するものとそうでないものが存在する。両者とも口縁部高は器高の1/2前後である。口縁部が外傾するものは体部と口縁部との境の稜の突出度が弱くなり、口縁端部が直線的に伸びるものがほとんどになる。第43図25・28・29のような全体に扁平なもの出現する。甕は球胴と長胴の中間的な中胴のものが主流を占めるようになる。また、口径が小さく、器高の低い小形の壺も多い。甗は胴が前期のものより細くなり砲弾形を呈するようになる。本期と同様な内容をもつ土器は芝山町宮門遺跡009号住居跡(渡邊ほか1991)、三田遺跡037号址などから出土しており、6世紀前半と捉えられる。

IV期

御田台遺跡010・019・034号住居跡・小池新林遺跡019号住居跡が相当する。坏は口縁部高は比較的高いが、全体としては扁平となり、赤彩が施されるもの他にヘラミガキが加えられ、黒色処理・漆仕上げがなされるものが出現する。また、天井部と口縁部の境に稜のない須恵器坏蓋を模したものと思われる弧状の扁平な坏が出現する^(註3)。高坏は内面にヘラミガキ・黒色処理が施され、外面に赤彩がなされるものが新たに出現し、本期以降主流を占めるようになる。甕はヘラケズリが施されるものほかに、「常総型」甕が出土するようになる。御田台遺跡033号住居跡出土の須恵器蓋(第59図257)は口縁部を欠くが、口径14cm以上になるとみられ、MT 8 5型式ないしはTK 4 3型式に相当すると思われる。よって本期は6世紀中葉～後半と捉えられる。

V期

御田台遺跡004・005・007・009・013・017・020・021・030・033号住居跡・小池新林遺跡021号住居跡が相当する。坏は前期に比べ口径が縮小傾向となり、口縁部高も低くなり、全体の約1/3程度になる。坏は赤彩が施されるものは減少し、前期の系譜を引くヘラミガキが施され、黒色処理・漆仕上げがなされる坏が主体を占めるようになる。本期は須恵器の出土量が多く、御田台遺跡004・005号住居跡にはTK 4 3型式の新段階、033号住居跡にはTK 209型式段階の須恵器蓋が伴件している。020号住居跡の出土の須恵器脚部片(第54図184)はおそらく短脚の無蓋高坏になるとと思われる。

6世紀末葉～7世紀前半の年代が与えられる。

VI期

御田台遺跡032・036号住居跡、小池新林遺跡007B・016号住居跡が相当する。坏は赤彩がなされるものはほとんどなく、漆仕上げないしは黒色処理されるものが多い。口径の縮小化が著しく、口縁部との境に稜を有するものは口縁部が内傾するものか直立するものがほとんどで、稜

がなくヘラミガキが加えられるものが主流となり、平底のものもある。また、高坏の出土量が増加する傾向が認められ、内面は黒色処理が施され、外面に赤彩がなされるものがほとんどを占めている。小池新林遺跡007B号住居跡ではTK217型式段階の湖西窯産の須恵器坏身・坏蓋が出土しており、7世紀中葉と捉えられる。

VII期

御田台遺跡006・026・037・039号住居跡、小池新林遺跡013・014・018号住居跡が相当する。土師器坏は体部と口縁部との境に稜を有するものはひじょうに小形となり、また量的にもひじょうに少なくなる。主流を占める坏は扁平な弧状の体部と短い口縁部をもつもので、平底を呈するものもある。また、ほとんどのものにヘラミガキが加えられるが、黒色処理・漆仕上げがなされるものは少なくなる。ほかに供饗形態では高坏がほとんど姿を消し、数は少ないが金属器を忠実に模倣した土師器碗(第100図100)や土師器盤(第99図81・82・第102図130)が出土している。須恵器の出土量はひじょうに多く、須恵器坏は高台を有するものと無高台のものがあり、前者は全て湖西窯産で占められていているが、後者は胎土中に雲母粒を含むものや濃青灰色を呈するものがあり、常陸産もしくは産地は特定できないが在地産(酒井 1981)の可能性が高いものである。蓋はつまみが付くもので、端部が下方に屈曲するものとともに端部に短いかきがあるものが相伴している。前者は湖西窯産、後者は常陸産・在地産と考えられるものである。小池新林遺跡018号住居跡では畿内産土師器が2点出土しており(第102図128・129)、2点ともいわゆる坏Aになるとみられるもので、特に128は形態・調整技法・法量から平城I(飛鳥V)段階の坏A Iに比定される(西 1976)。平城Iは701~710年という実年代が提示されており、相伴する須恵器とも年代的に整合するものである。よって、本期の年代を示すならば、上限はやや幅をもたせて7世紀後葉~8世紀初頭に考えておきたい。なお、畿内産土師器は千葉県では比較的出土例が多く、特に印旛沼周辺に集中している(林部 1986)。一方、太平洋沿岸、山武地域での出土例は少なく、現在までのところ、東金市久我台遺跡(萩原・小林 1988)からの出土が知られるのみで、木戸川水系では初の出土例である^(注4)。

VIII期

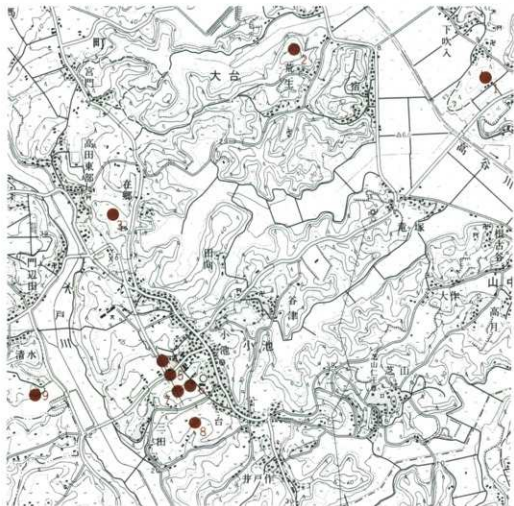
御田台遺跡003号住居跡が相当する。赤彩される盤状坏タイプの坏が出土しており、8世紀第2四半期を中心とする時期に比定される。

IX期

御田台遺跡011・029号住居跡が相当する。須恵器坏の底径は8cm弱を測り、土師器坏は体部と底部との境に稜を有するようになることから、8世紀第3四半期に比定される。

第3節 内面に記号状の赤彩が施される土師器環について

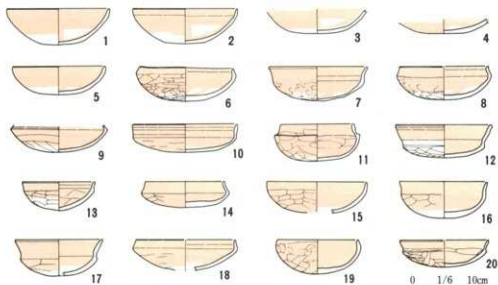
前節の時期区分で示したように、本地域の古墳時代の土師器環は5世紀末から6世紀前葉をピークに赤彩がなされる環が主体を占めるが、6世紀後葉に黒色処理、漆仕上げ土器が出現するとこれらや無彩の環に凌駕され、6世紀いっばいで赤彩の環はほとんど消滅する。このことは本地域のみならず若干の時期差はあるにせよ、上総地域に通有な現象であるといえる（長谷川 1989）。赤彩の環には内外面全彩されるもの、内面が全彩、外面の下方が塗り残されるもの、内面の下方が塗り残され、外面が全彩されるものなど、外面内外面とも下方が塗り残されるもの、内面が全彩、外面無彩のものなどいくつかのパターンが存在する。それぞれが意識的に施されたものと思われるが、そのなかで特に目を引くのは内面（見込）に卍や⊕状（形）の赤彩



第113図 ⊕・⊙状赤彩環出土遺跡 (1/25,000)

1. 東台遺跡
2. 仲ノ台遺跡
3. 宮門遺跡
4. 小池地蔵遺跡
5. 小池地蔵II遺跡
6. 三台遺跡
7. 小池新林遺跡
8. 御田台遺跡
9. 清水台No.1遺跡

が施される杯の存在である。⊖状赤彩は御田台遺跡001（第42図1）・002（第43図14）・024（第55図204）・025（第57図222・223）号住居跡、⊕状赤彩は御田台遺跡033号住居跡（第59図255）、小池新林遺跡017号住居跡（第102図121）で検出されている。この種の赤彩の仕方は、東台遺跡（大賀 1988）、仲ノ台遺跡（澁谷・荒井 1991）、宮門遺跡、小池新林遺跡（昭和54年調査区）、小池地藏遺跡、小池地藏Ⅱ遺跡、三田遺跡、清水台NO. 1遺跡（柿沼ほか 1980）など芝山町域の周辺の遺跡でも検出されている（第113図）。一方、県内の他地域では、管見によれば、成田市畑々田花山遺跡D028号住居跡（田形 1988）で⊖状赤彩の杯が1点、八日市場市柳台遺跡234号住居跡（福岡・神山ほか 1986）から⊖状赤彩が1点、佐倉市タルカ作遺跡第28号住居跡から⊕状赤彩と⊖状赤彩がそれぞれ1点ずつ（矢戸ほか 1985）、立山遺跡立山1号墳周溝内（金丸 1983）から⊕状赤彩の高杯が3点と⊖状赤彩の高杯が1点、大作遺跡4号墳から⊕状赤彩の杯が1点（藤崎 1990）、市原市中永作遺跡22号住居跡から 状赤彩の杯と⊖状赤彩の杯がそれぞれ1点ずつなどわずかに検出されているにすぎず、福岡元氏が指摘するように（福岡 1988）、芝山町域、木戸川・高谷川中流域にはかなり濃密に分布していると言うことができる。時期的には今回報告した資料では、前節の時期区分のⅡ・Ⅲ期に属するものが多いが、他遺跡出土資料をみると、最も古く遡るものは東台遺跡3号住居址出土土器（第114図1～5・第115図1）であり、この土器群にはTK208型式の須恵器坏蓋、高杯、甕が伴し、5世紀中葉まで遡るものである。反対に最も新しいものは仲ノ台遺跡23・48号住居址の⊖状赤彩の杯（第

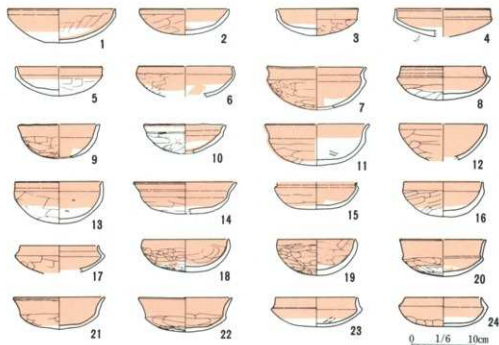


第114図 ⊕状赤彩坏集成図

1～5. 東台遺跡3号住居址 6・7. 宮門遺跡009号住居跡 8. 宮門遺跡015号住居跡
 9. 小池地藏遺跡004号住居跡 10. 小池地藏遺跡008号住居跡 11. 小池地藏Ⅱ遺跡002号住居跡
 12. 三田遺跡013号址 13. 三田遺跡024号址 14. 三田遺跡034号址 15・16. 三田遺跡096号址
 17. 三田遺跡104号址 18. 小池新林遺跡006号住居跡 19. 小池新林遺跡017号住居跡
 20. 御田台遺跡034号住居跡

115図2・5)、三田遺跡017号址の㊦状赤彩の坏(第115図17)、小池地藏Ⅱ遺跡001号住居跡出土の㊦状赤彩の坏(第115図9・10)、御田台遺跡033号住居跡の㊦状赤彩の坏(第114図20)であり、これらは前節の時期区分のⅣ期に相当し、赤彩される坏がほぼ消滅するまで、長期にわたって存続していることが分かる。数量的にみると、一軒の住居跡で最も多く出土したのは東台遺跡3号住居址であり、㊦状赤彩が施される坏が5点、㊦状赤彩の坏が1点出土している。ほかに同住居跡からは単に赤彩が施される坏が20点、無彩の坏が4点出土しており、全体の2割を占めている。ほかの住居跡からは1点もしくは2点のみの出土であり、坏全体に占める割合は極めて些少である。各住居跡をみてもこれらの坏が特異な状態で出土したものは認められない。形態では半球形のもの、口縁部が外傾するもの、直立するもの、内傾するものなど様々であり、㊦状赤彩が施される坏と㊦状赤彩が施される坏それぞれについて形態の統一性は認められず、同一住居跡出土のものでも東台遺跡3号住居址出土遺物を除いて、細部形態が全く同一のものはない。よって、形態と赤彩の仕方の因果関係はないと思われる。

このように㊦状赤彩と㊦状赤彩は同時期でもそれぞれ単一の形態の坏に施されるのでなく、

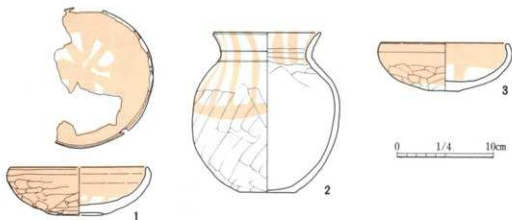


第115図 ㊦状赤彩坏集成図

1. 東台遺跡3号住居址 2. 仲ノ台遺跡23号住居址 3. 仲ノ台遺跡43号住居址 4. 仲ノ台遺跡47号住居址 5. 仲ノ台遺跡48号住居址 6. 宮門遺跡015号住居跡 7. 宮門遺跡017号住居跡 8. 小池地藏遺跡007号住居跡 9・10. 小池地藏Ⅱ遺跡001号住居跡 11・12. 小池新林遺跡002号住居跡 13. 小池新林遺跡004号住居跡 14. 小池新林遺跡005号住居跡 15. 小池新林遺跡006号住居跡 16. 三田遺跡011号址 17. 三田遺跡017号址 18. 御田台遺跡001号住居跡 19. 御田台遺跡002号住居跡 20. 御田台遺跡024号住居跡 21・22. 御田台遺跡025号住居跡 23・24. 清水台№1遺跡第3号住居跡

様々な形態の坏に施されていることが分かるが、同時期における坏の形態差を生産者集団の差と捉えると、形態のパラエティと赤彩の仕方が結びつかず、赤彩の仕方がそれぞれの生産者集団を示す固有のものでないことになる。さらに全く同一形態を呈するものが少ないことから、同一形態の坏を生産する集団内において何らかの識別のために用いられた記号である可能性も低い。よって、⊕状赤彩と⊖状赤彩が土器生産に関わる「ヘラ記号」的なものとは考えられない。

赤色塗彩そのものは祭祀と密接な関連があると思われるが、先述したとおり、出土状態からはこれらの坏を用いて祭祀などがなわれた状況は窺うことができない。本地域では⊕状赤彩や⊖状赤彩が施される坏で東台遺跡3号住居址より古く遡るものは検出されていないが、5世紀前半に遡ると考えられる宮門遺跡016号住居跡、横芝町振子上遺跡（平岡 1983）遺構外出土の坏に内面に放射状の赤彩が施されているものがあり（第116図1・3）、また、振子上遺跡第1号住居跡からは、甕の口縁部内面から胴部外面中央にかけて縦縞の赤彩が施されているものがある（第116図2）。甕の赤彩の仕方が端的に示すように、これらは記号というより、より装飾的で何らかの祭祀もしくは呪術的な意味を込めたものと思われる。これらの坏の赤彩の仕方が系譜的に直接つながるものか定かではないが、⊕状赤彩と⊖状赤彩を考えるのに示唆に富むものである。また、先に例にあげた佐倉市立山遺跡で古墳周溝内から検出された高坏は、明らかに古墳祭祀における供献土器として用いられたものである。また、参考例であるが、隠岐島の東笠根1号墳の横穴式石室出土遺物の中に、7世紀前半の合子状の須恵器坏の蓋と身の合計4点の外面に赤色顔料で十印が施され、また、同じ隠岐島の古墳時代後期の兵庫遺跡出土の土器器坏・高坏の底部外面には、鉄製工具によって円文の中に十字の線刻が施されており、出土状態は高坏の上に坏をのせたものを逆に倒置した状態で、祭祀遺物を含む遺物を廃棄した場所の一隅から検出されたという。これを検討した勝部昭氏は、十は「紐結び」を表し、結び目に



第116図 宮門遺跡016号住居跡(1)、振子上遺跡第1号住居跡(2)・調査区内(3)出土土器

靈魂が込められるという信仰があったこと示すものとし、霊が遊離するのを土器の中に封じ込める意味があったと解している（勝部 1980）。

以上、これまでみてきたところでは、現時点で⊕状赤彩と⊖状赤彩は土器生産に関わる記号ではなく、直接の根拠はないが、祭祀・呪術的な様相が強いものであると推察される。では、この赤彩方法は土器生産に関わる祭祀・呪術的な行為の所産によるものなのか、あるいは使用者側の要求によって施されたものなのであろうか。立山遺跡は後者であると思われ、隠岐島東笠根1号墳・兵庫遺跡は使用者によって施されたものである。しかしながら、両者とも本地域における出土状況とは異なることから、現段階ではその意味を即断することはできない。そのことに関連して、木戸川・高谷川中流域に集中して分布するという理由について前者の見解をとるならば、⊕状赤彩環と⊖状赤彩環を生産する集団の供給圏を示すと言えるし、後者の見解ならば、当該地域において⊕状赤彩環と⊖状赤彩環を用いた祭祀が盛行したと、現時点では言うことができよう。今回の検討では、結論めいたことは何も言えず、⊕状赤彩と⊖状赤彩の示す意味や両者の性格の違いを見出すこともできなかつた。今後の課題としたい。

註1 小池地藏遺跡、小池新林遺跡、三田遺跡は芝山町の埋蔵文化財分布地図（芝山町教育委員会 1982）では一つの遺跡（宮郷台遺跡）として把握されている。

註2 芝山町立芝山古墳・はにわ博物館福岡元氏の御厚意により、実見、再実測させていただいた。

註3 静岡県湖西窯跡群では陶邑編年のTK43型式に対応する第Ⅱ期第3小期から天井部と口縁部の境に横や沈線を施さない須恵器坏蓋が出現し（後藤 1987）、これと時期的に対応する。

註4 水系的には高谷川水系に属するが、横芝町東長山野遺跡（道澤ほか 1990）ではグリッド出土資料で、内面口縁部下に連弧暗文、体部内面に放射暗文、外面に横方向のヘラミガキが施される坏が出土しており、実測図を見た限りでは畿内産土師器の坏CⅠになると思われる。

註5 土師器にも須恵器の「ヘラ記号」と酷似した焼成前の記号状の線刻が稀に認められる（第43図15など）。「ヘラ記号」は中村浩氏によって検討されており、複数工人（群）が同一の窯を共同に使用するに際して、類似製品の区別のために使用されたものであるとされている（中村 1977）。

引用・参考文献

新井順二 1986『御田台遺跡発掘調査報告書』 芝山町御田台遺跡調査会

- 大賀 健 1987『下吹入遺跡群』 下吹入遺跡群調査会・芝山町教育委員会
- 奥田正彦 1985『主要地方道成田松尾線』II 財団法人千葉県文化財センター
- 小澤 洋 1992『上総地域の鬼高式土器』『月刊考古学ジャーナル』NO.342 ニュー・サイ
ンス社
- 柿沼修平ほか 1980『清水台NO. 1遺跡発掘調査報告書』 清水台NO. 1遺跡発掘調査会
- 勝部 昭 1980『十印のある土器』『古代学研究』94 古代学研究会
- 金丸 誠 1983『佐倉市立山遺跡』 財団法人千葉県文化財センター
- 小杉秀雄・佐藤俊雄 1956『芝山古墳群小池第一号墳』『古代』第21・22合併号 早稲田大学考
古学会
- 後藤建一 1987『西笠子第64号窯跡発掘調査報告書』 静岡県湖西市教育委員会
- 酒井清治 1981『房総における須恵器生産の予察(Ⅰ)』『史館』第13号 史館同人会
芝山町教育委員会 1982『芝山町の遺跡』
- 澁谷 貢・荒井世志紀 1991『大台遺跡群』 財団法人山武郡市文化財センター
- 白井久美子 1991『千原台ニュータウンIV 中永作遺跡』 財団法人千葉県文化財センター
- 田形孝一 1988『成田市畑々田地区埋蔵文化財発掘調査報告書』 財団法人千葉県文化財セン
ター
- 高橋賢一・伊藤智樹 1986『主要地方道成田松尾線』IV 財団法人千葉県文化財センター
- 滝口 宏ほか 1970『千葉県山武郡芝山町小池台遺跡調査-第一次概報-』 芝山町教育委員
会
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』 角川書店
- 千葉県教育庁文化課 1990『小池木戸脇遺跡』『千葉県埋蔵文化財調査抄報-昭和63年度-』
- 中村 浩 1977『須恵器生産に関する一試考』『考古学雑誌』第63巻第1号 日本考古学会
- 西 弘海 1976『平城宮出土土器の編年とその性格』『平城宮発掘調査報告』VII 奈良国立文化
財研究所
- 萩原恭一・小林信一 1988『東金市久我台遺跡』 財団法人千葉県文化財センター
- 長谷川厚 1989『神奈川・千葉県地域の赤彩土器・黒色処理土器について』『東国土器研究』第
2号 東国土器研究会
- 林部 均 1986『東日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器』『考古学雑誌』第72巻第1号 日
本考古学会
- 平岡和夫 1979『成田用水』 高田権現・大台西・上吹入・林遺跡調査会
- 平岡和夫 1983『東京電力送電線鉄塔建設事業地内八日市場線発掘調査報告書』 東京電力山
武・横芝町遺跡調査会

- 平岡和夫 1989『千葉県九十九里地域の古墳研究』 山武考古学研究所
- 福岡 元・神山 崇ほか 1986『飯塚遺跡群発掘調査報告書』 八日市場市教育委員会
- 福岡 元 1988「古墳時代後期の赤彩土器について（序）」『竹篋』第5号 北総たけべらの会
- 福岡 元 1989『三田遺跡発掘調査報告書』 芝山町教育委員会
- 藤崎芳樹 1990『佐倉市大作遺跡』 財団法人千葉県文化財センター
- 萬崎博昭ほか 1983『主要地方道成田松尾線』I 財団法人千葉県文化財センター
- 道澤 明ほか 1990『東・北長山野遺跡』 北長山野遺跡調査会
- 渡邊高弘ほか 1991『主要地方道成田松尾線』VI 財団法人千葉県文化財センター

写 真 图 版





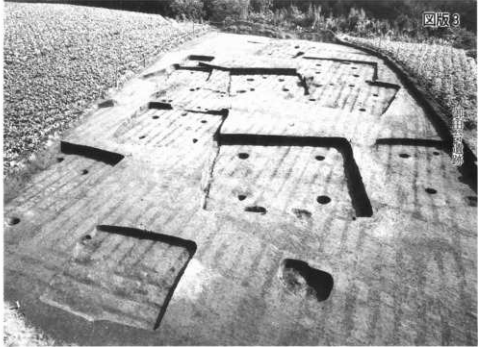
4C-67先土器時代
遺物出土狀況



11G-31土層断面



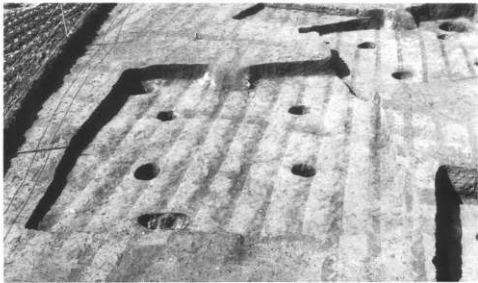
12H-72土層断面



南区全景



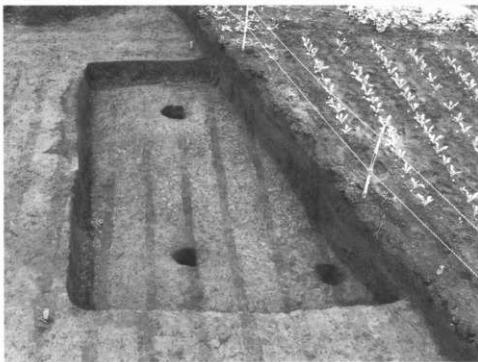
001号住居跡



002号住居跡



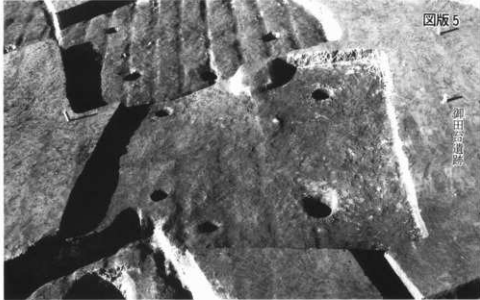
004号住居跡



005号住居跡



006号住居跡



007号住居跡



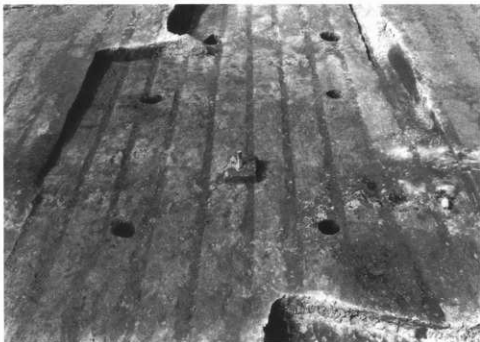
008号住居跡



009号住居跡



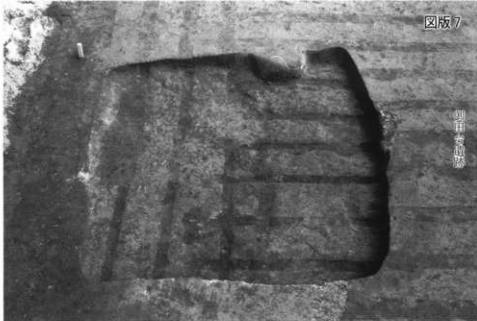
010号住居跡



012号住居跡



013号住居跡



014号住居跡



015号住居跡



016号住居跡



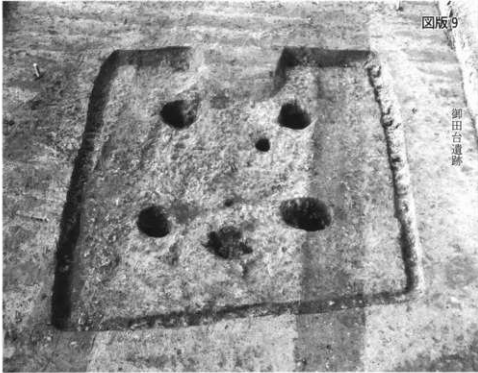
017号住居跡



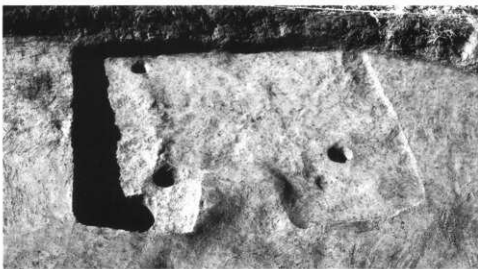
018号住居跡



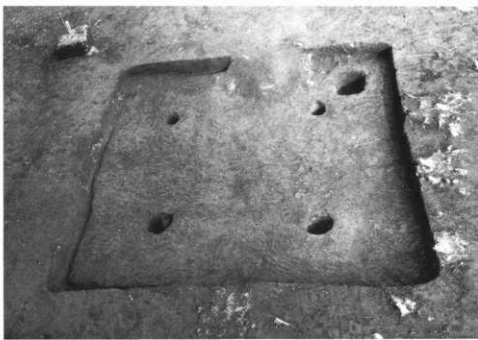
019号住居跡



020号住居跡



023号住居跡



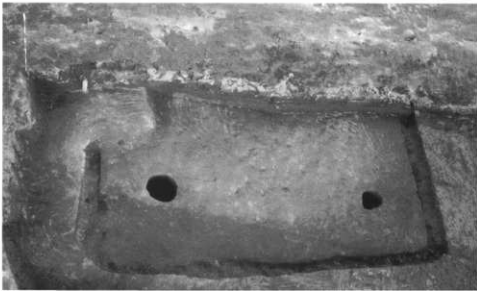
024号住居跡



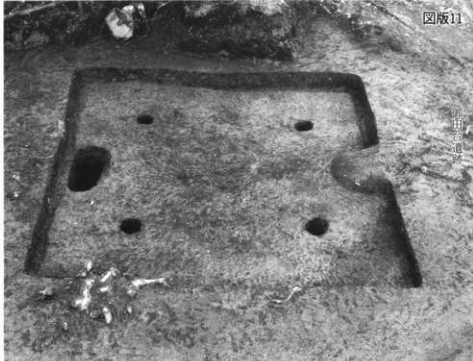
025号住居跡



030号住居跡



032号住居跡



032号住居跡



034号住居跡



003号住居跡



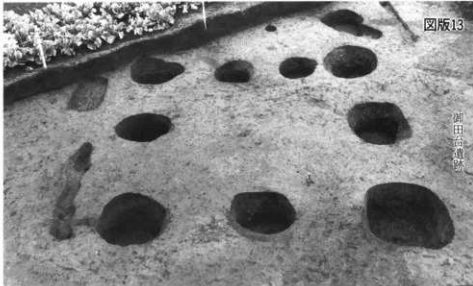
011号住居跡



022号住居跡



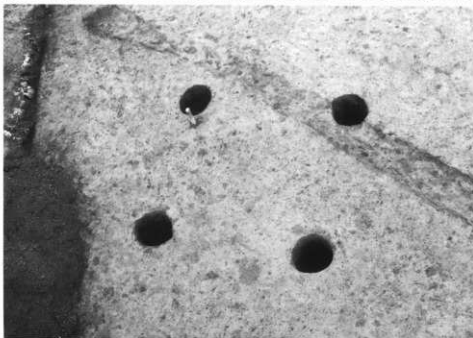
029号住居跡



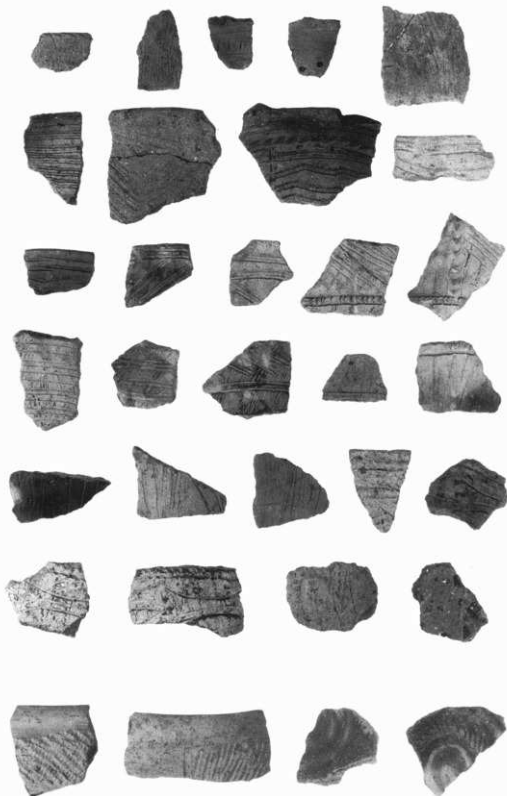
001・002号掘立柱建物跡



003号掘立柱建物跡



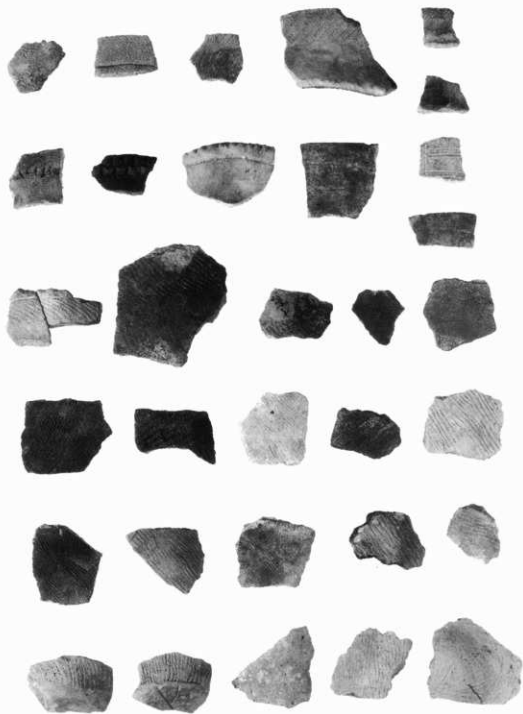
004号掘立柱建物跡



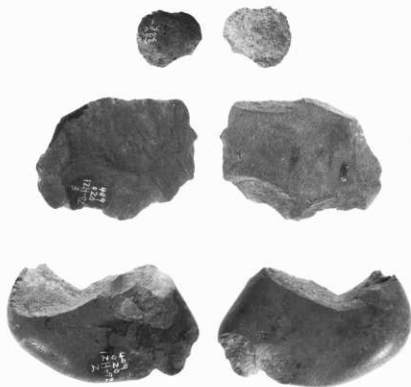
縄文時代土器（1）



縄文時代土器 (2)



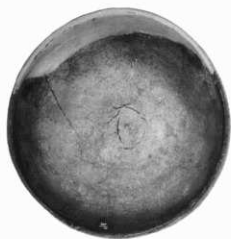
弥生時代土器



先土器時代石器



縄文時代石器



1



9



1



10



2

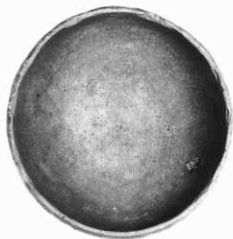


6



11

古墳時代土器 (1)



14



16



14



16



15



18



15



19



21



22



28



25



30



33



26



34



27



37



45



38



47



42



49



44



54



55



62



67



68



70



63



71



72



64



73



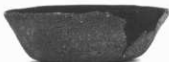
74



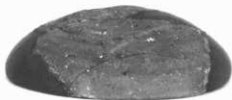
86



75



87



76



88



77



90



91



85



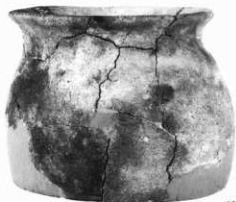
94



96



112



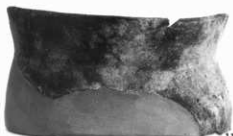
106



113



109



115



110



116



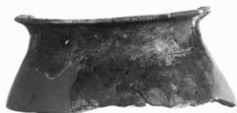
111



116



119



124



120



129



121



122



130



126



132



133



139



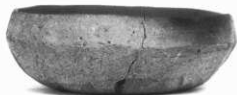
146



142



147



143



148



144



149



145



150



152



150



153



151



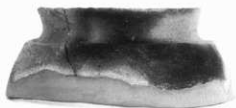
154



155



164



156



166



167



159



168



170



172



183



174



175



187



177



188



193



199



195



200



196



204



197



204



198



201



202



209



205



206



210



207



211



208



212



219



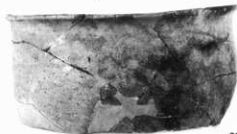
220



215



221



216



222



218



222



223



227



223



228



225



246



226



231



233



235



241



242



243



244



245



247



251



252



260



253



263



255



266



255



267



271



272



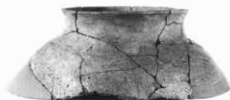
269



273



268



274



276



283



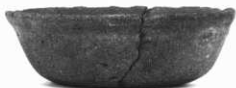
279



280



284



281



282



285



1



2



2



3



3



10



9



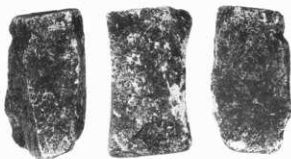
12



13



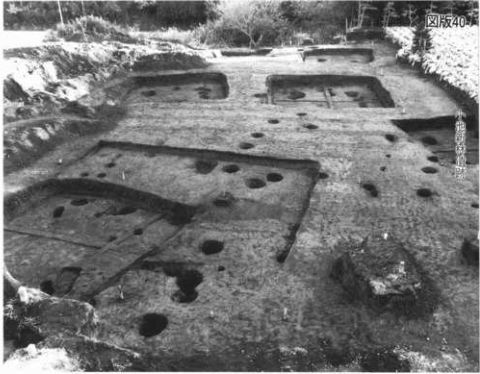
古墳時代土製品



古墳時代石製品



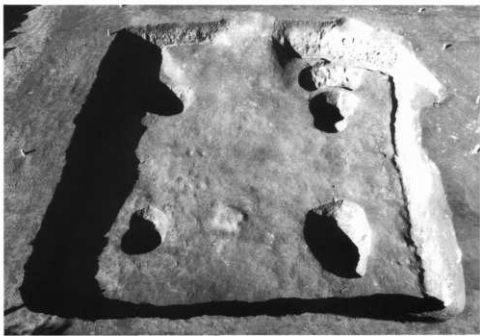
古墳時代鉄製品



调查区全景



007A·007B住居跡



013号住居跡



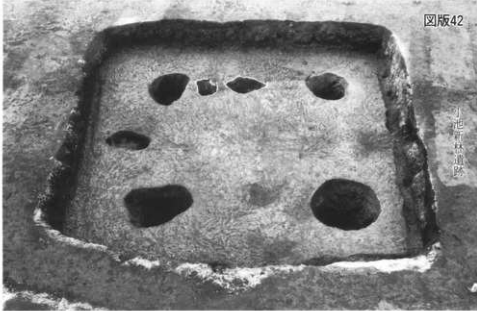
014号住居跡



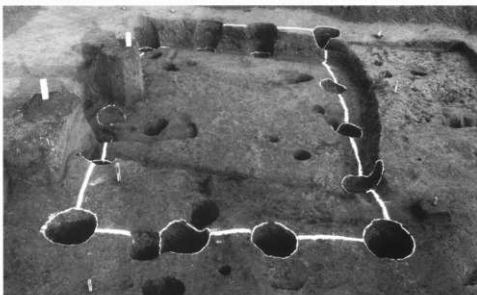
016号住居跡



018号住居跡



015号住居跡



003号掘立柱建物跡



粘土採掘坑

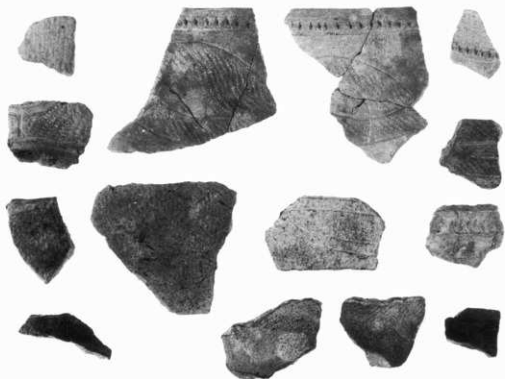


1



2

001・002号土坑出土土器



グリッド出土縄文・弥生土器



縄文時代石器



2



24



6



25



26



20



29



22



30



23



31



38



32



39



33



35



43



37



44



58



49



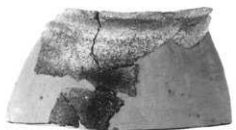
60



50



64



67



76



102



81



103



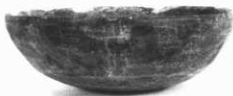
90



105



92



108



100



109



110



116



111



120



112



121



114



115



121



124



148



128



149



128



153



129



130



158



138



古墳時代土製品



古墳時代石製品



古墳時代鉄製品

千葉県文化財センター調査報告第209集

主要地方道成田松尾線Ⅶ

— 芝山町御田台遺跡・小池新林遺跡 —

平成4年3月16日 印刷

平成4年3月23日 発行

発行 千葉県土木部
千葉県市場町1-1

編集 財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡無番地

印刷 株式会社 弘文社
市川市市川南2-7-2
